913.6
M949t3
00923634

この図書は秋田放送局
の除籍本であることを保証します。
秋田　ふじ書房古書店
¥

秋田放送局
圖書
第2632号
35年7月7日

小説

塔

タワー

村松梢風

中央公論社

目次

塔（タワー） 一
斑女 一五
残光 二三
雨の苔寺 二五

913.6
M949t3
X

47.12.13

923634

塔（タワー）

一

S公園の一角に「日本タワー」が建ち始めた時の世間の騒ぎを、人々はまだ忘れてはいないだろう。日本タワーは今ではもう完成してしまって、本来のテレビ塔としての役目以外に、昼間は東京見物の地方客や修学旅行の生徒を幾千幾万となくエレベーターで展望台まで上げたり下ろしたりしているし、夜は夜でうす紅色の照明を鉄骨に流して、東京の夜空に異彩を放って聳え立っている。それはロマンティックというには相応わしくない工業的な建造物であって、事実パリのエッフェル塔のような優雅さもないが、巨大であることだけはたしかであるし、周囲の街との不均衡という点でも、昭和の初めに造られた国会議事堂と並んで代表的なものであるが、それが却って現代の日本を象徴することにもなって、それはそれなりに東京名所の一つになりつつある。この物語の始まる頃は、日本タワーの工事が七分通り進捗してようやく世間の話題となりかけた時であった。町というものは建物によって性格や運命を左右される。周囲

と不釣合いに大きかったり高過ぎたりする建物の出現は、町全体の美を破壊する効果をもたらすものだが、特にその建物の周囲に対しては、空気の震動や視界の変化から生じる精神的な脅威を与えるものである。日本タワーは、事実その付近に対して大きな影響を及ぼしていたと同時に、この物語にも深い因縁があることを読者はあらかじめ承知していて頂きたいのである。

日本タワーから距離にして三、四丁位、場末めいた電車通から一寸入ったところに一軒のアパートがあった。アパートと横丁を隔てた反対側には大きな病院があった。アパートの真正面になるところが、外来患者の入口で、その前には自動車を幾台も停めておくことができるコンクリートの広場がある。この横丁は先へ行けば閑静な屋敷町になるらしく、低い丘の上には石段のついた小さな神社が見えたりして、そこには樹木が鬱蒼と茂っている。四階建てのアパートは、アパートとしては小さいほうだが、コンクリート造りのまだごく新しい建物で、殺風景でもなく、表から見てもどっちかといえば瀟洒とした感じである。或る日——八月の末であるから、真夏といってもいい季節だが、もう日が殆ど暮れかけていたから、日中の暑さは街から洗い流されていた。作家の加賀美正一は、アパートの前でタクシーを降りて、往来から三階の一室を見上げた。その部屋には、彼の愛人の佐藤瑠璃子がいるからであった。いつも彼が瑠璃子を訪問する時には、電話をかけて在宅をたしかめてから来るのが例であった。けれどもアパ

ートの電話は一本であって、管理人の交換台から各室へ取り次ぐのであったから、少なくも十五、六人の居住者のあるアパートの電話は通話中が多いのであった。そういう時加賀美は面倒になって、銀座からでも五、六分で着くところだから、いきなりタクシーを拾ってやって来てしまうことも時々あった。そして彼女が不在なら引き返すまでである。今日もそういった具合で、電話を通じないでやって来たのであった。瑠璃子の部屋は、三階の、向かって左の端の部屋である。二間続きの、どちらも磨りガラスの戸が立ててあって、厚い茶色のカーテンが掛っている。加賀美が見ると、ガラス戸が半分くらい開き、カーテンは閉めてあって、室内には電燈はついていない。けれどもルーム燈がついているらしく、カーテンの合せ目から微かな光が流れているような気がした。在宅なら室内電燈がついている筈だが、しかし窓の戸が開いているからには不在ではない筈だ。外出する時には窓をキチンと閉めて出ることは、アパートの住人ならだれでもすることである。加賀美は別段そんなことまで考えたわけではなかったが、瑠璃子が在宅であることがわかったから直ぐアパートの玄関を入っていった。コンクリートの階段を上って瑠璃子の部屋の前に行って、鉄のドアをコンコンと叩いた。が返事がなかった。いつもならすぐ「はあい」と威勢のいい返事があって、部屋着姿の彼女が内がわからドアを開けるのだが、今日はなんの応えもなかった。そんな筈はないと思うから、こんどは強く続けさま

にノックしたが依然として答えはなかった。（おかしいな）と思ったけれども、返事がない以上は留守だときめるよりほかはない。加賀美は階段を下りて来た。そして玄関から往来へ出た時、何気なくもう一度彼女の部屋を見上げると、磨りガラスの戸の開いたところが前より少し細目になっているようにも感じられたし、それからカーテンの合せ目からルーム燈の光が微かに出ていたように思われたのが、全然まっ暗になっていた。もっとも最初に見上げた時はそれほど正確に見たわけではなかったから、確信はもてなかったが、なんとなく異状を感じたのであった。彼は自分の眼を疑った。そこで念の為に道路を少し先の方へ歩いて行くと、アパートの隣は今年の五月総選挙に東京から立候補して全国第一の高点で当選した代議士の家であった。もっともこの代議士はそれまで警視総監をしていた上に、死んだ鳩山氏の地盤を受けついだのだというから、そう聞けば最高点も別に不思議ではない。そんなことはどうでもいいとして、代議士の家の門の辺りから見ると、アパートの側面がすっかり見える。瑠璃子の部屋には横窓があって、ここも磨りガラス戸だったが、それが明け放しになっていた。暑い時だから窓を閉めていられるものではないが、外出する時にこんなに窓を明け放しにして出る道理はない。瑠璃子にはそんな習慣もないことを加賀美は知っていた。加賀美は非常に不思議な気持がした。といっても、彼は彼女に対してべつに何も疑いをもったわけではなかった。ドアをノックされ

ても、バスルームで洗濯でもしていれば気がつかぬこともあるし、又疲れて眠っていれば聞えぬことだってないとはいえない。とにかくもう一度戻って確かめて見ようと思ったから、又アパートの中へ入って行った。しかし今度は彼女の部屋へ行かずに、一階の廊下の突き当りの管理人、家主の入口のドアを叩いた。中年の婦人がドアを開けて顔を出した。

「どちらさまで」

「私は加賀美という者ですが、三階の佐藤さんを訪ねて参りました。ノックしても返事がありませんが、方々窓が開いていますから多分いるだろうと思います。佐藤さんの部屋へ一寸電話をして見て頂き度いのですが」

婦人はじっと加賀美の顔を見ていた。瑠璃子のところへ電話をかけると大抵「どちら様で」と訊く。名前をいうと部屋へ通じてくれ、いる時は直ぐ瑠璃子が出るし、不在なら「お留守のようでございます」という。小さいアパートのならいとして大抵家の人だけでやっているから、加賀美の名前もここの家族にある程度知られていたのだかも知れない。

「少々お待ち下さいまし」

といって婦人はドアを閉めた。加賀美は廊下に立って待っていた。しかしそれっきり家主のドアは開かなかったし、瑠璃子の姿も階段の上から現われなかった。電話を部屋へ通じるだけ

なら十秒とはかからない。かりに不在だとしても、二分も三分も信号を続けている筈はない。ところが家主の婦人からは、ドアを閉めたままいるともいないとも何の音沙汰もないのだった。加賀美はいよいよ変な気持になって来たが、黙って立ち去るわけにもいかないから、廊下で煙草を吸いながらやがて十分近くも待った頃、バタバタと高い足音を立てて階段を駈け下りて来たのは、瑠璃子ではなくて、四階の部屋に住んでいる瑠璃子の友達の木島京子という女であった。

「あら先生いらっしゃい。ルリちゃんはわたしの部屋へ来ていらっしゃったのよ。いますぐ降りて来ますけど、その前にあたくしぜひ先生に聞いて頂き度いことがあるんですのよ。ちょっと大家さんの応接間を借りますからお入り下さいませ」

と、京子は丸々と太ったからだの胸をはずませ、息せき切って早口にいいながら、家主のドアを叩くと、先刻の婦人が中から開けた。京子は無理矢理にそこの玄関へ加賀美を押し込むようにするのだった。瑠璃子も京子も同じナイトクラブに勤めているダンサーである。加賀美は従来京子とは何の交際もなく、そのナイトクラブへ行ってもテーブルへよんだこともなかったが、瑠璃子がこのアパートへ引っ越して来てから、京子の方は前からこのアパートに住んでいたところから、自然瑠璃子の紹介で知り合いになったという間柄である。京子はよほど前から

生け花の修業をしていて、今ではその方でも立派に師範の免状を持っていた。一週に三回稽古日があって、その日には十人余りの弟子が彼女の部屋へ稽古に来る。また京子は英会話が堪能だから、店にいても外人客の方が多いが、その英語が生け花にも役に立って、以前は進駐軍の軍人の家庭などへも盛んに出稽古をしたものだという。最近はそういう古い馴染の軍人が大部分本国へ引き揚げてしまったので、京子の稽古先は少なくなったが、それでもちょいちょい外人との交際はあるらしい。黒いスラックスをはいて赤い模様のあるアロハを着た京子は生け花の連想とは遠いが、ずんぐりした体で色の黒い逞しい腕と頸をもっていて、ピチピチした精力的なものが感じられる。京子は加賀美を家主の応接間へ連れ込むと、扇風器をかけたり、家主の婦人に冷たい飲み物を注文したり、さも重要なことでも相談するような様子であったが、加賀美が「どういう御用ですか」と訊くと、「実は先生」といって話し出したことは実に他愛もないことであった。その無意味なことを京子はさも重大なことのように非常に熱心に喋っているのだった。瑠璃子が京子の部屋へ遊びに行っているところへ、家主から電話の連絡があったというのなら、何をおいても瑠璃子が駈け下りて来る筈だ。それを十分近くも待たせた揚句に、瑠璃子は来ないで、京子が来て、しかもご丁寧に家主の応接間へまで引っ張り込んで、愚にもつかぬことを長々と喋っているとはいったいどういうことであるか。加賀美は馬鹿々々しくな

ると同時に、ある疑惑が一つの形をそなえて心の中に起り始めたが、そうむげに立つわけにもゆかず、いら立たしい気持で腰かけていると、やがてそこへたて縞のワンピースを着た瑠璃子がぼやっとした顔つきをして入って来た。

「ルリちゃんすみません。先生をお引き留めして。わたしぜひ先生に聞いて頂きたいお話があったもんだから」

京子はほっとしたような調子でいった。三人は管理人の室から廊下へ出た。階段を上る間だれも口をきかなかった。言葉を忘れた人間のように黙々として足を動かしていた。三階に達すると瑠璃子ははじめて口を開いた。

「木島さん一寸お寄りにならない」

「ありがとう。でもわたしお弟子さんが来ると困るから。先生すみませんでした。また後ほど」

京子は色の黒いまんまるな顔にはち切れるような笑みをうかべながらそういって、四階の階段の方へ行った。

ドアは直ぐ開いた。狭い靴脱ぎ場から廊下が付いている。その左がわに二部屋あり、反対側は便所、キッチン、風呂場といった具合である。横窓のある六畳は鼠色の絨毯を敷き、窓際に

は長椅子があり、それと向きあって肘掛椅子が二つある。かなり立派な棚があって、その上には水盤めいた鉢に生け花がしてある。表へ面したガラス戸のそばにはゴムの木の鉢植がおいてある。瑠璃子もここへ引っ越して来てから京子に弟子入りして生け花を習っていた。しかしその部屋へおく花は京子が来ていけてくれるのだといった。隣の四畳半は寝室で、壁際に抽斗（ひきだし）の沢山ついた腰掛けの化粧箪笥があってその上にかなり大きな鏡がある。

二つの部屋の中は、そこに何事も起らなかったことを物語っているようであった。ゴムの葉は翡翠よりも青い色をしているし、棚の人形もふだんのような表情をして立っている。ソファーのクッションは正常な位置によくふくらんでいて、ガラスの灰皿の中もきれいに磨かれている。つい十分か十五分前までここに一人の男が来ていて、寝室の方では薄い夏の敷蒲団がもみくちゃにされ、裸になった男と女が重なり合って殺される前の豚のようにのたうち廻っていたとか、長椅子の上でエジプトの彫刻のように男女が抱き合っていたとか、灰皿の中には煙草の吸いがらが一杯たまっていたとか、パンツやシュミーズがそこらに放り出されていたとか、そういう光景を想像させるようなものは何一つなかった。それにもかかわらず、加賀美の頭の中には、それ以上の光景がありありと現実のように描き出されるのであった。われわれはそれを彼の妄想だとして哂うわけにはいかないのである。なぜかといえば、実際その通りのことが行

われていたとしても、加賀美が一階の廊下や、家主の応接間で空費させられたあれだけの時間が経つ間には、それらの物体や痕跡は跡形もなく消し去ってしまうことができるからである。その間に男はこの部屋からもアパートからも立ち去ってしまうことができるし、女は女で乱れた髪にブラシをかけ、ちょっと口べにを塗るだけで平常の姿にかえることができるのである。女の肉体やいかなる行為も、ガラスの上にインキで書いた字をタオルで拭き取ってしまえばあとにはなんにも残らぬように、次の男の眼には何にも見えないのである。

作者は加賀美に代って次のようなことを想像して見よう。最初ドアをノックされた時には、誰だか分らないから強引に返事をしないで息をひそめていたが、それから暫く経ってから家主から電話で加賀美が来たことを知らされ、加賀美が窓が開いているからいるに違いないといったことなども取り次がれてみると、もう留守だというわけにはいかなくなった。そこで来ている男には何とかいって帰ってもらうことにした。しかし男を送り出してやっても、階段の途中や廊下で加賀美とぶつかったりしてはまずいし、第一それまでには相当時間が掛るからその間をつないでいなくてはならない。咄嗟(とっさ)に瑠璃子が考えたのは京子のことであった。京子とは秘密を打ちあけあうほどの友だちではないが、この場合背に腹は替えられないというものだ。男が洋服を着たりしている間に瑠璃子は四階の京子のところへすっ飛んで行って、簡単に事情を

話し、何んとかして加賀美を暫くの間一階のどこかで引き留めていて貰いたいと頼んだ。京子は勿論瑠璃子と加賀美との関係をよく知っている。同じ穴の狢(むじな)というではないが、女同士の相見互いだから快く引き受けて直ぐ様階段を駈け下りて行ったが、その上にもいい知恵が浮かんだ。京子はこう云いおくことを忘れなかった。

「瑠璃ちゃん、先生の方はあたしが引き受けるけど、あなたも五分以内にお部屋の中を整理するのよ」

その結果京子は一階まで駈け下りて行き、瑠璃子は自分の部屋へ帰って男を無事に送り出した。京子が家主の応接間に加賀美を連れ込んだのはこの場合妙案というべきであった。こうして事はすべてうまく運んだのである。

以上の想像は、作者の想像であると同時に、加賀美の想像であった。こういう想像をえがくことが、単なる架空のことといえるだろうか。想像を生み出すためには十分の根拠がなくてはならない。最初の印象、時間、場所、出来事、原因と結果、それらのすべてを綜合して、合理的に生み出されるのでなくては正確な想像とはいいがたいだろう。

加賀美は今日瑠璃子に渡すべき金を持って来ているのだった。そして数日前に今日の日を彼女と約束してあったような気持がした。新聞社から受け取った原稿料を持ってそのまま、ここ

へ来たのだった。それだのに瑠璃子がこんな不始末を仕出かしたのだとすれば、彼女がこの大事なことをうっかり忘れていたのだと取るよりほかはなかった。なんともいえないしらじらした気持で、加賀美は長椅子の上で黙り込んでしまった。

「上衣をお取りにならない」

と瑠璃子はいった。

「そうだね」

加賀美が上衣を脱ぐと、瑠璃子は洋服掛にかけて、むこうの部屋のなげしにぶら下げた。

「お風呂がわいてますけど」

「いや、風呂は止そう」

加賀美は反射的にいった。そして金を渡して直ぐ帰ることを考えていた。瑠璃子はガスで湯を沸かして茶をいれた。茶を飲みながら、煙草をふかしていると、横窓から涼しい風が入って来た。それは隣の代議士の家の庭の方から吹いて来るのだった。加賀美はもう十分老境にはいっている年齢であった。年齢というものは、樹木の皮がだんだん厚く幹を包むように、人間の感情を包んでしまうものである。それは老朽に達する一つの過程でもあるが、同時に、安全を求めて自分の身を保護する一種の本能でもある。こういう人間は破壊することを好まない。社

会に対してもそうであるが、自分の生活に対しては一層注意深くなる。恋愛に対していうならば、火山の火のように燃えるとか、嵐のように吹きすさぶといった激しい感情は、もし起りうるとしても避けるであろう。そういう危険の伴わない、平穏無事の、変化のない恋愛の中に、おとろえたからだを休めていることを望むだろう。加賀美もつまりそういう部類へはいるべき人間であった。

――おれはいまのような想像を描き上げて見たけれども、いくらこまかに想像しても、結局、想像は想像である。想像は現実ではない。おれはこの眼で瑠璃子の行動を見たわけではない。肉眼で見たり、肌で感じたことでなくては真の事実ではない。もし想像した通りのことが行われていたとしても、自分の眼で見るまでは、事実だと断言することはできないではないか。

現実的に根拠のない想像に基づいて、女に対する気持を動揺させられるのは間違ったことだと、加賀美は考え直した。瑠璃子は彼の横へ来て長椅子に腰をかけた。それはいつでも彼女がすることであった。そうすると加賀美は彼女を引き寄せてキスしたり、まっ白い大きな乳房を弄んだり散々たのしんだあげくに、下着を脱がせるのが習慣であった。隣の寝室の方へ行くこともあるが、長椅子の上へそのまま押し倒して、それほどたっぷりした椅子ではないから、下半身を椅子からずり落ちるようにさせながら、衝動的に行うほうが効果的だからであった。身

体の位置が不自然なほど情慾は刺戟されるのだ。

ここへ来るたびに必ず行われるそのことが、今日の彼は不思議に出来なかった。十分欲望を持ってここへ来たのだ。現に今だって女の肉体からの誘惑を強く感じていた。あらゆるしちめんどくさい感情のもつれは、ただ一回の肉体の交わりで、苦もなく解けてしまうのだ。それは神の裁きよりもたしかである。そんなことは加賀美が知らぬ筈はないのだが、情慾の炎が燃えると同時に、一方では火に水をかけるような心理作用が行われていた。別の男がいまのさきまで抱いていた女を、すぐあとから自分が抱くということが非常に不快なことに思われたのだ。それは嫉妬でもあるし、つかみがたい女の秘密に対する一つの抵抗でもあった。

「今日は用事があるから直ぐ帰る」

加賀美は突然こういって、渡すつもりで持って来た金を上衣のポケットから取り出して瑠璃子に渡した。そして直ぐ上衣を着てしまった。彼女は黙っていた。彼女は元来無口なたちでおまけに口下手だったから、殊に加賀美のようなうんと年上のしかも気むずかしい男に対しては、いいたいことがあってもいえない場合があった。しかし今日の出来事については、自分にやましいことがない限りは、自分の立場を守る上からも十分釈明すべきである。こんな不自然なことがあっても、加賀美がなんとも感じていないと思うほど無知ではない筈だ。それをどこまで

も黙っているということは、加賀美が想像した通りのことが事実あったからだろうか。あまりに白々しい云いわけになるから、黙っているのだろうか、と加賀美はそれに対して考えた。

加賀美が玄関へ行って靴をはくと、瑠璃子もアッパッパのままで、サンダルをつっかけ、ドアに鍵をかけて表通りまで送って来た。もうとっくに日は暮れ切っていたが、空は少し明るかった。その空に、僅かに数百米の距離をおいて、七分通り建ちかけた日本タワーが聳えていた。加賀美の眼にはタワーが何か忌まわしいもののように映ったが、それは別段根拠のあることではなかった。人間には時々そんな本能がある。電車道の端に立って、向う側を走って来るタクシーに向かって手をあげると、橋の際でカーブして彼らの前へ来て停った。

「左様なら」

タクシーは又一廻りして、正面にタワーが見える橋の方へ走り出した。瑠璃子はそれを見送っていた。

二

四谷の親類——従姉妹（いとこ）の家に下宿しているといった佐藤瑠璃子が、芝の方のアパートへ引っ

越したいといって加賀美に相談したのは二月ほど前のことであった。加賀美は彼女が働いているナイトクラブへ時々遊びに行った。そうしているうちに、いつとはなしに瑠璃子と関係が出来た。関係が出来たといっても、ナイトクラブのダンサーと客との交渉は非常に平凡なことだから、なんら特筆するほどのことはないのだ。男の方も女の方もそう責任を持つ必要はなく、だいたいそういう条件の下に結ばれる恋愛ではないのだ。けれどもその関係がある程度進むと共に、加賀美の彼女に対する愛情が次第に深まっていったことは当然であった。瑠璃子の近代的な容貌や、豊満な肉づきや、無口でおっとりとした性格は、加賀美の好みにもあっていた。それでもとり立てて打ち込むほどの気持はなかったが、或る日瑠璃子は

「あたしシャンソンを習おうかと思うんだけど」と、加賀美の意見を求めるような眼付をしていった。築地にあるシャンソン学校へ通いたいというのだった。

「音楽の下地は多少あるのかね」

「女学校の時学校で教わっただけで、別に下地ってありませんけど、音譜だけはどうやら読めるのよ。その学校では初等科からあるんです。月謝は二千円で、週に三日行くのよ」

「そんなことなら別に考えて見るほどのこともないじゃないか。やって見たらいいと思うな」

「じゃ、早速行くことにきめるわ」

こんなことから、瑠璃子は築地のシャンソン学校へ通い始めた。もう二、三年で三十になろうという今頃から音楽を勉強したって物になるかどうかわからないが、一つの物を勉強しようという気持だけでも有益であるという風に加賀美は考えた。ナイトクラブのホステスという完全な夜の商売に従事する女たちは、昼間も大抵映画を見たり、美容院へ行ったり、友だちのところへ遊びに行ったり、その友だちと一緒に食事に出たりという具合で、夜、店へ出勤するまでのかなり長い時間をぐうたらして過ごすことが多いのだ。そしてその間には自然に生活も崩れて行くのが普通である。浅はかな欲望や虚栄心を満たすためには、店で稼ぐ以上の金が必要である。その金を得る手段は至極手近にあるのだ。瑠璃子もこういった一般の型から特別異なった女ではないらしかった。しかし幾年かそういう生活を続けて来て、ようやく将来の不安が身につまされて考えられる年頃である。辛うじてでも歌手に転向することができれば、前途に光明が開けるというものだ。こういう気持からであることは間違いないが、同時に加賀美がこれをきっかけに少し腰を入れて後援してくれるならば、すべてにおいて安心してやれると考えたことも確かであった。べつにそういうことを彼女から申し出たわけでもなかったが、期待通りうまくいった。それ以来加賀美がホテルで会ったり銀座辺で会ったりする時、瑠璃子はいつもシャンソンの教科書を抱えて歩いていた。今度アパートへ移りたいという理由も、親類の家

では練習に歌うこともできないが、アパートならある程度声を出して歌っても構わないだろうからということであった。加賀美はもう一年近くなるが、一度も四谷の彼女の住居を訪ねたことはなかった。従姉妹は薬屋をしているとのことだったが、行って見ないから何も様子は分らなかった。彼は瑠璃子の頼みを快く承知して、アパートに移る一切の資金を出してやった。敷金、前家賃、その他あらゆる家具調度をととのえるには相当まとまった金額が必要であった。その上こういう結果になれば、今後は女を正確に援助してやらなければならないし、従って二人の関係も今までとは性質のちがったものになることは当然であった。この関係は加賀美としても不満足なものではなかった。いや、不満足どころか、加賀美の衰えてしまったと思っていた肉体から無限の情慾が湧き出して来るのには、自分でも驚かずにはいられないくらいであった。彼は瑠璃子を心から愛するようになった。愛はすべてのものを育てる根本である。

はじめに話したような事件があってから一週間ばかり後に、加賀美はアパートを訪ねた。彼が鉄のドアをノックすると、待っていた瑠璃子は「はい」と答えてドアを開けた。例によって簡単な部屋着で、化粧もしていなければ髪の手入れもしていなかった。肌の色が白く豊満でなめらかな肉体を持っている彼女は、そういう時に一番強い魅力を発揮した。加賀美はもう先達てのことはすっかり忘れていた。かりに覚えていたとしても、それは文字通り痴人の夢のよう

なもので取るに足りないことだと考えたであろう。およそ男女間で無益有害なことはつまらぬ詮議立てである。それがために愛情にヒビを入らせたり、心を悩ませたりする。そういう愚かな行為から無数の悲劇が生れてくる。加賀美のように人生を十分に歩いて来た人間が今更そんな児戯に類したことが出来ようか。

彼はその日すっかり上機嫌であった。本当をいうとアパートの中へ一歩入った時から情事は始まっているのである。それからの僅かの時間は、クライマックスに到達するまでの前奏のようなものである。加賀美はいくたびそういう激しい歓楽を味わって、彼女をこの世で最高のものと思ったり、自分の人生の中で与えられた最後の幸福であると考えたりしたことか。今日もそういう絶大の期待をもって来たのだった。彼女の方にも一点の暗さもなかった。

加賀美はそういう極めて自然の、こだわりのない気持で、瑠璃子を抱いたつもりであった。ところがどうしたというのだろう。いざとなると彼の性器は活躍しないのだった。欲望は有り余るほどあるし、その直前まで電気を感じていたくらいだったのが、いざ接触すると局部的に力を失い、萎縮して用をなさないのだ。彼は女の体をもてあそび、彼女の方からもあらゆる手段を尽してみたが、そんなことは何の効めもなかった。加賀美は焦慮（あせ）ったことがいけなかったのだとひそかに思いかえした。そこで一旦起き上って、煙草を吸ったり、新聞を読んだり、取

り留めない話をしたりして時間を過ごしていた。しかし、性慾の満足をえた後の休憩であったら、精神の安静もえられたであろうし、あるいは再び欲望の起ることだって有りえたであろうが、満たされないままで心の安定を求めようとしても無効である。果して再び試みても、三度試みても、ついに不可能であった。加賀美の性器は、臆病な子供が物に怯えたように縮こまり、かたくなな偃僂(せむし)がいうことをきかないように沈黙してしまった。

「きっとお疲れになってるんだわ」

と瑠璃子もしまいに匙を投げてしまっていった。加賀美もそうかも知れないと思った。ただこの一回だけだったら勿論なんでもないことだが、それ以来加賀美は不能になった。焦慮ればなるほど不可能であった。彼は自分の体内にホルモンが欠乏しているとは考えられなかった。老衰現象なら徐々に来る筈で、こんなに一度に、ダムで川の水を堰き止めたように、一挙に涸渇してしまう筈はないと思った。

悪いことは単独にはやって来ないとか、悪魔は後から後から呼鈴を鳴らすとかいわれているが、加賀美の場合がやはりそれと似ていた。その頃から彼の脚の病気が起った。少し歩くと右の脚のふくらっぱぎの筋肉が痛んで来て歩行困難になるのだった。しかし二分か三分腰掛けているとその痛みは治り、又ある程度歩くことが出来るのだ。加賀美は青年時代から健脚家で、

山河を跋渉することが得意であったが、近年でも毎日一里二里の散歩をするのが習慣になっていた。そうして歩くことを唯一の健康法としている彼が、突如として脚の病気に罹ったのだった。もっとも初めは病気とまでは考えないで、薬屋で膏薬を買って貼ったりしていたが、だんだんひどくなるので、とうとう医者にかかるようになったのだった。間歇性跛行症という病気であると医者はいった。この病気の恐るべきことは、血管が極度に閉塞されると、指の先から脱疽になるというのだった。もっとも医師によって診断はちがって、加賀美の場合は脱疽になる恐れは絶対にないという医者もあった。それはともかくとして、思わぬ病気を引き起してしまったために、彼は非常な苦労をしなければならなかった。ただ一つここに奇妙なことは、これまで話して来たような瑠璃子との肉体の関係がうまく行かなくなったのは、実はこの脚の病気が起ったのと前後しているのだった。身体の一部に故障があっては性の活動が止められるものかも知れない、と彼は考えた。それは素人考えでもある程度常識である。けれども彼は自分の性交不能を脚のせいだとは考え切れなかった。どっちにしても、ここには老年期になった人間の大きな悩みが横たわっている。

加賀美の鎌倉の住居の裏山には、幾百年の樹齢を経た老木が欝蒼として枝を張っている。そこは頼朝の墓の地続きで、この屋敷は数百年前から頼朝の墓守が住んでいた所であった。頼朝

の墓は慶長年間に島津氏が修復したもので、爾来墓守も島津家の家来であった。明治以後久しく空き屋敷になっていたのを、昭和十何年頃ある財閥が買い取ってここへ別荘を建築した。終戦後の混乱時代、戦災で東京の家を失った加賀美は、この別荘の二間ばかりを借りて一、二年住んでいたのであったが、そのうち多少のいきさつがあって、財閥からこの家屋敷を安く売って貰って、彼がここへ住み着くことになったのであった。

裏山にはいまいったように山一杯の老樹が繁っているが、その中でも珍しいのは樹齢数百年を経た椿である。毎年冬になると一本の木に数千の花を咲かせるのだ。いったい鎌倉や三浦半島は伊豆の大島と気候風土の通じるものがあるせいか椿の栄える土地である。加賀美はこの見事な椿の花盛りを見るたびに、人間もこのように永く盛りを保つことができたらどんなに素晴らしいだろうかと考える。数百年の寿命を保ってきて、季節ごとに幾千の花を咲かせるということは、そこに見事な青春が開花していることである。これと比べるなら人間の寿命は物の数ならぬほど短くはかない。けれどもその短くはかない人生でも、せめて生きている間は花を咲かせることができないものだろうか。

加賀美は青年時代から今日までに幾たびも恋愛をした。恋愛というものはいつでも新鮮で、季節に咲く花のようにあでやかであるが、或る時期を過ぎると、花が凋んで散るように恋愛も

色香を失ってしまうのである。加賀美は数年前に幾年か続いた恋人と別れて、それ以来失意の人となっていた。そうして一年くらい月日が経っているうちに彼の前に現われたのが瑠璃子であった。しかし瑠璃子は、ナイトクラブのダンサーという都会の女性の中でも一番自由で奔放な職業を持っている女であるから、普通の女に対する時とはちがった気持で接していたのであったが、この瑠璃子に対していつの間にかこんなに強い愛情を持つようになったことは、加賀美としても意外なくらいであった。

女に対する疑惑や不信があるとしても、それは最初から彼女の持っていることであって、今更始まったことではない。そういうことを洗い立てて行ったら際限がない。彼女の言葉を信じて今まで通りつきあっていればいいのだと加賀美は思った。性の問題などは時間とチャンスが自然に解決してくれるだろう。

加賀美は仕事を沢山背負い込んでいる上に脚の治療も意外に面倒なことになり、その上仕事の関係で外国へ旅行しなければならぬようなことも出来て、時間的にも気持の上でもあんまり瑠璃子にかかわってはいられなかった。それでも月々の物だけは正確に渡した。こうしてその年も暮れ、翌年の冬も過ぎて春になった。

三

四月に入ると日本タワーは落成した。世間は暫くこの噂で持ち切った。一つの建造物が出来上ったというだけのこととしては、たしかにジャーナリズムは騒ぎ過ぎた。それはテレビの尖塔まで加えればエッフェル塔よりも高いというのであったが、それは事実だとしても単なる高さの問題である。エッフェル塔ほどの調和もなく、ニューヨークの摩天楼のような充実した外観や内容があるわけではない。このジャーナリズムの馬鹿騒ぎは、塔の建造者にとっては思う壺だった。毎日雲霞の如く押し寄せる見物人の入場料だけで、数ヵ月で元は取れてしまうのだった。

四階の木島京子の部屋からは、丁度日本タワーが真正面に見えた。四角な窓枠が額縁のようになって、そこへタワーの全景が丁度よく嵌って見えるのは、壮観といえば壮観であった。その窓際近くに大きなベッドが据えられてあった。まだタワーが八分通りくらいしか出来ていない頃、ある日加賀美は瑠璃子と一緒に四階のその部屋へ遊びに行った。京子は生け花の師匠らしく、なかなか趣味家で、何でもかでも蒐集することが好きだったので、狭いアパートの部屋

の中は古道具屋のようにゴチャゴチャしていた。

「あの展望台から見ると、わたしの部屋の中が丸見えですのよ。これからうっかりカーテンでも閉め忘れて寝たら大変だわ」

「もう登って見たんですか」

「ええ……先達てちょっと」

といったがその先は京子も話さなかった。

タワーが完成して一月くらい経った頃、瑠璃子は加賀美にこんな話をした。

「日本タワーの下に沢山の売店があって、いろんなお土産物を売ってるんです。鉄でこしらえたタワーの模型を考案した人は一ヵ月で何千万円も大儲けをしたそうです。それでわたしも思いついたんですが、神戸の義兄の家が模造真珠の袋物を作って輸出していますから、それを取り寄せてタワーの売店で売って貰ったらと思うんですが」

「しかし模造真珠の袋物はどこでも売ってるじゃないか」

「ですから、真珠でタワーのデザインをするんです。見本をかいて送ってあるから間もなく来ると思いますけど」

一個百五十円位なら売れると思う。元値（もとね）は百円で十分だといった。

「それだと、十個売れば五百円。毎日百個売れれば五千円で、一月に十五万円儲かる勘定だ」
「そんなに儲からなくてもいいけれど」
「売店へ卸すのは君が直接卸すのかね。誰か世話をしてくれる人があるのか」
「お店のお客さんで、タワーに勤めている人と懇意な人があって、その人から紹介して頂くつもりですのよ」
それから暫くすると、神戸から見本が到着したので、タワーへ行って相談すると、三軒の売店で注文を出してくれたといった。ところが神戸の義兄が一向製品を送ってくれないというのだった。
「それはどういう理由なんだ」
「つまりわたしに信用がないからだと思うわ。見本程度なら格別、何百とか千とかいう数になれば、商人ですから、わたしなんかに商売が出来る筈はないと思って、それで送ってよこさないんでしょうよ」
加賀美もそうかも知れないと思った。しかし彼はこのことに興味を持っていた。
「それじゃ、とりあえず二百個か三百個分、前金で送ってやって見たらどうだ。そうしたら品物送ってよこさないわけにもゆくまいじゃないか。売れ次第当分前金で払うのだ」

「そうすれば送ってよこすでしょうけれど」
加賀美はその場で資金を出してやった。間もなく品物は到着した。瑠璃子は「J子」という一番近くのアパートに住んでいる親しい友達を頼んで、それをめいめい大きな風呂敷に包んで手で提げてタワーへ持って行った。こうしてタワー相手の商売を始めた。売店では月末になると売れただけの代金を支払ってくれた。予期したほど羽が生えて飛ぶという程にはいかなかったけれども、時々十個とか二十個とか電話で注文が来る。近い所だからいつでも歩いてタワーへ届けに行くのだった。彼女の部屋には商品を入れたボール箱が積み上げられていた。こんなことを始めたからといって、シャンソン学校へ通うのを止めたわけではなかった。或る日、銀座の喫茶店の六階のホールで、彼女が通っているシャンソン学校の生徒の発表会が催された。瑠璃子はよほど前から大張切りで、ステージ用の衣裳や靴を注文したが、加賀美に
「ぜひ先生に来て頂かなくちゃ困るのよ。お友だちにもそういってあるんだから」
と幾たびも念を押して、無論招待券も渡した。彼女がシャンソンを始めてから丁度一年目くらいであった。加賀美は最初から相談相手にはなっていたが、一度も彼女の歌を聴いたことはないのだ。一体どれくらい歌えるようになったのかと興味が起らないではなかった。そこで多少でも見込みがあるようだったらどこかへ売り込んでやろうという慾が出て、ミュージックホ

ールの運営委員の松尾氏を無理に引っ張って連れて行ったのだった。会はなかなか盛会であった。加賀美と松尾氏のテーブルはステージのすぐ前で、その横にはフィリッピンの男歌手が来ていた。瑠璃子の店の朋輩の顔も五、六人見えた。あとで聞くと、学校の宣伝がきいて、音楽界、ラジオ、テレビ、映画関係の知名人もかなり来ていたということであった。校長の藤山氏がピアノを弾き、六、七人のバンドが出ていた。生徒たちは順々に出て、一曲か二曲ずつ歌ったが、いずれも初舞台であったから上ってしまってどうにもならなかった。瑠璃子は着飾って六番目に歌ったが、これも漬物石のように固くなって、かすれた顫え声が跡切れ跡切れに聞えただけであった。顔や姿は慾目でなくても確かに美しい筈であったが、しかしその顔も化石のように引き吊って眼は節穴のようにうつろであった。加賀美はガッカリした。たった一年だから無理もないが、しかし素質があるとは思われなかった。松尾氏に話すのも極りが悪いのでそのまま黙っていた。大勢出た中で一人二人は少しは歌えるのもあった。発表会などというのは大体こんなものなのかと思ったが、人前で慄えてしまう初心さが、人ずれのしている加賀美には珍しくもあり面白かった。最後に校長の藤山氏が物慣れた調子で挨拶した。

「今夜は何分初めてのことでございますうえに、お客さんがお客さんですから、生徒さんたちも固くなってふだんの半分も実力が出せませんでした。しかし去年学校を始めた時には皆さん

もっともっと大変なものでした。それがともかくこれだけになったのですから、私はこの人達を根気よく育てて行きたいと存じます。何分皆さんの御援助をお願い致します」

といって拍手を受けた。その時瑠璃子はいつの間にかステージの衣裳のままで加賀美の横へ来ていた。

さて問題の、加賀美と瑠璃子との性関係はどうであるかというと、跡絶え跡絶えながら辛うじて続いていた。それは磧の水がすっかり乾上ったように見えながら、ところどころに水溜りが出来たり、小さな流れが出来たりするのと同じ理屈であった。彼は焦慮れば焦慮るほど実行不能になった。そういう時瑠璃子は眼を薄く閉じて微かな笑いを浮かべていた。その時の表情や肉体のすべては完全な娼婦であった。彼女は相手を刺戟するためにいつでも口を使った。しかしやがてそれを正常の位置に戻すのが常だった。加賀美はかつて経験したフランスの娼婦の技巧を思い出した。その方法を一つの売り物にして観光客などから普通の倍の料金を取るのであった。それは徹頭徹尾口で終始するのであって、この場合、口を完全に生殖器と考えることができれば成功である。加賀美は瑠璃子をフランスの娼婦と同様に取り扱うことにした。彼女もそれを拒まなかった。果して加賀美は非常な満足を得ることに成功した。彼女はこの方法を

少しも厭がる様子はなかった。どういう方法でも加賀美に満足を与えることは彼女の義務でもあるが、同時にそれによって彼女も一種の満足を感じるのであった。それ以来加賀美は不能の恐れがなくなった。それにしても驚くほど多量の放射物があるのに、普通の状態では筋肉が隆起しないというのはどういうわけだろう。このことについて彼は親しい医師に訊いて見たことがある。つまり多量の射精があるにもかかわらず、事前に勃起作用が起らぬという状態がありうるかどうかと。医師はホルモンが多量にあるのに勃起しないということは普通には考えられない。衰弱した場合にはホルモンが減量するのが当然だと答えた。しかしこの医師といえども、実際にはそういう知識をどれだけ持っているか疑問である。

加賀美はその頃、中国の怪談をむさぼり読んだ。「聊斎志異」「閲微草堂筆記」「唐宋小説」の類であった。説話の種類は、神仙、狐、幽鬼、精魅、竜女、蛇等から、殆どあらゆる動物や草木にまで及んでいるが、例外なくそれらの妖怪（女）と人間（男）との恋愛物語である。通常これを単に怪異文学として解釈されているが、こういう怪異文学を書いた作者の目的や、幾百年にわたって伝承され愛読されている理由について加賀美は考えて見た。

人間の恋愛には必ず限界がある。どんなに熱烈な恋愛でも歳月が経てば冷却するし、冷却しなくても病気や老いやその他種々の原因のために、恋愛行動が不可能になることが多い。又情

交の快感や悦楽にしても限度があって、そう無際限に人間を感動させることはできないものである。しかるに相手が人間であって人間でない妖怪や神仙である場合は、かりに男がこれを覚って恋愛を止めたいと思っても止めることはできない。そうして命のある限りは続くのである。その情交の深刻さは人間同士の比ではない筈である。想像も出来ないほどの歓楽が、相手が妖怪変化であるからその怪力によって満たされるのである。しかも女はいくらでも美しく化けることができる。幾人子を生んでも衰えもせず老いることもない。男は無限の幸福に浸ってしまうのだ。そしてその結果命を縮めることもあるが、かりに命を縮めても悔いのない人生である。狐や仙女の場合は命を縮める心配もまずなく、却って男も仙術を得ることもあるが、多くは一定の時期が経過すると狐や仙女の方から消え去るのが普通である。

人間の性の欲望を無限に発展させることがこの怪異文学の目的であろう。また読者は、現実には満たすことのできない欲望を、この怪異文学によって満たすことができるのである。

加賀美は、もしこれらの物語にあるような妖怪変化に現実に出会うことができたらどんなに幸福であろうかと空想した。しかしそれはどこまでも空想であって現実にはない。そこで今度はこんなことを考えた。妖怪でなくても、普通の人間であっても、徹底的に男をたぶらかし、

欺き通す女がいたら面白かろうと考えた。男の方ではだまされていることは露知らず、女だけがそれを知っているのだから、妖怪ではなくても、狐が女に化けているのを知らずに夫婦になっているのと幾分か共通したものがある。手練手管に富んだ女のことを古狐と呼んだりするのも、そういう連想から来ているのだかも知れない。こういう種類の女なら世間にある程度いる筈だが、加賀美はまだそういう女に出逢った経験がない。途中から女に叛(そむ)かれたとか、結果において騙されたという経験なら珍しくないが、徹頭徹尾嘘で固めた恋愛に対して、自分の方でだけ夢中になっていたというような異常な体験は、加賀美はいまだ曾てないのであった。それは彼が人一倍自惚れが強いために、騙されても騙されたと感じないからではなく、実際世間にもそういうことは、そうザラにあるものではない。

四

加賀美の瑠璃子に対する愛情は、彼女に対する不信の念と、むらがり起る疑惑の中から生れて来るといってよかった。男は女があまりよくわかりすぎると、恋愛の熱が冷めるものである。女の本性がわからぬということは、それと反対の効果をもたらすのである。

近頃加賀美が瑠璃子に電話をかけても、殆ど不在のことが多かった。昼間シャンソン学校へ行くとか、買い物に出るとか、美容院へ行くとかで不在がちなのは当然であるとしても、当然アパートにいなければならない午前中とか、正午頃とか、又用事から一旦帰って来る頃の夕方でも、滅多にいたことはなかった。中でも午前中にいないことは特別問題であった。夜の遅い商売だから、午前中に起きるとか、午前から外出するということは絶対にないのである。だから午前中に不在なら、よそへ泊っていると考えるより外はないのである。といっても加賀美は毎日電話をかけるわけではない。五日目ぐらいに例の脚の病気である病院へ注射を打ちに来るとか、雑用で出て来るとか、そういう時に限られているが、それでも相当の回数になるわけである。又月に二回位は日比谷のホテルに泊る習慣になっていたから、午前中に電話をかけるのは多くホテルからであったが、版にすったように「お留守でございます」だった。それにしても毎日ではないから、運が悪いといえば運が悪いともいえるのだ。現にこのことで加賀美が一寸不機嫌な顔をした時など、「わたしだってそううちにばかり閉じこもっちゃいられないから」というのだった。そんなに留守がちの瑠璃子でも、夜八時か九時になれば必ず店へ出勤するから、そこへ行けば会えることも無論であるし、十二時に早引けして一緒にホテルへ来ることだって出来るのだが、アパートを訪ねたことはこんな風でもう一月半近くもなかった。

しかし瑠璃子にあえば、ちっともおかしな態度が見えるわけではないし、パトロンに対する誠意も忠実さも一向変ったようには見えないばかりか、彼女の方でも自分を愛しているのだとさえ加賀美は思っていた。それにもかかわらず外の面における彼女の生活は全部秘密に包まれていた。一体こういう職業や生活を持っている女の全貌を知ろうとすることは、暗闇の中の物を見るよりも困難である。ただ加賀美に分っているのは逢っている時だけの瑠璃子の姿である。それは白昼の光線や夜の燈火に映し出されたまぎれもない彼女の実体であるが、一度別れてしまえばもう闇の中を飛びあるく蝙蝠のように何も分らなくなるのだ。分らないといえば、彼女の気持も分らないのだ。女は概して男にとっては不可解のものだが、彼女の場合は極端に謎であった。正直にいって、加賀美は彼女が彼一人を守っているとは最初から思っていなかった。そんなことは無理な注文である。もちろん彼女にいわせれば、加賀美の外に何もない。第一そんなことをする必要はないというのであったが、加賀美はそれを信じたことはなかった。だが、いくら自由な生活を認めるといっても、おのずから限度があるものだし、又男女の関係では双方とも誠意を持ち義務を感じ合わなくては成立するものではない。加賀美は今のように瑠璃子に深入りし、その関係は周囲に公然となって見ると、彼女に対してもある程度の誠意を求める気持の湧くのは当然であった。自分ひとり誠意を持ち義務を果しているのに、相手の方には一

片の誠意もないというのでは問題にならない。それでは阿呆の仕業で愛情も恋愛もあったものではない。

ある日加賀美はホテルに泊っていて、夜十時過ぎから瑠璃子の店へ遊びに行った。あとでホテルへ行こうということになっていた。ナイトクラブのホステスは夜何時に出勤してもかまわないが、出た以上は客のあるなしにかかわらずラスト（大概一時半）までいることになっている。しかし客があって、客と一緒に出る場合は、十二時を過ぎれば自由である。その時は公然と表の玄関から出てもいい。まだ初夏だけれども、ホールの中は冷房がしてあった。背中を丸だしにしたドレスを着ている瑠璃子は途中から寒いといい出した。

「冷房がききすぎてるわ。からだがゾクゾクして来たわ」

「そんなら服を着替えて来たらどうだい。もうお客さんも来そうもないじゃないか」

「そうね」

彼女は支度部屋へ行って通う時のスーツに着替えて来た。それから間もなく十二時になって一緒に連れ立って出た。こういう時いつもなら帰り道によそのクラブへ行って三十分か一時間位遊ぶのだが、タクシーへ乗ってから瑠璃子は風邪を引いたらしいというので、どこへも寄らずに真直ぐにホテルへ帰って来た。加賀美の鞄の中にはいつでも感冒の薬と体温計がはいって

いた。早速体温を計ると七度一分位あった。

「やっぱり風邪だね」

有り合せの薬を呑ませて直ぐ寝た。その晩は口など使わなくても、普通の状態でなんの苦もなく行えた。こういうふうに、女がかぜをひいたとか、メンスだとかいう時にかぎって反って支障なく行えるというのは、一体どういうわけだろう。翌朝は十一時頃、いつものように朝食をとった。加賀美はその日も昼過ぎから碁の観戦をしなければならなかった。

「君は今日帰って一日寝ていた方がいいな」

「そうするわ」

アメリカンファーマシーで感冒薬と体温計を買って彼女に渡して別れた。碁の観戦記を書くという仕事も時間に追われて忙しいものである。夜九時頃、加賀美は彼女のことを思い出して電話をかけてみると部屋にいた。

「計って見るとまだ少し熱があるのよ。あれからずっと寝ているわ」

「今夜は店を休む方がいいな」

「ええ、そうするわ」

碁が終ったのは十二時頃だった。加賀美はそれからホテルへ帰ったが、アパートの電話は夜

遅くは取り次いでくれないから掛けても見なかったが、彼も疲れているのでブランデーを飲んでそのまま寝てしまった。

翌朝十時頃瑠璃子に電話するといなかった。更に十二時頃かけても帰っていなかった。

夜出勤しないでいる時に、馴染の客が来ると、店の方から電話で知らせてくることになっている。そこで大急ぎで支度をして店へ行くことは普通である。昨夜は風邪を引いて寝ていて休むつもりではあったが、そこへ電話が来れば慾が出て、大した感冒でもないから行ったことは解るが、そのままアパートへ帰らぬとあっては問題で、加賀美の心中は穏やかでなかった。加賀美は昨夜毎月渡すだけの金を彼女に渡していた。それは当然のことだとしても、わざわざ感冒薬と体温計を買って持たして帰したのだ。寝ていたのを起きて行ったのは仕方がないとしても、そのままどこかへシケ込んで帰って来ないとあっては、余りに踏み付けた仕業である。加賀美の胸はおさまらなかった。それでは人の誠意に対して少しもこたえるところがないというものだ。加賀美の立場は道化役でしかなくなる。風邪薬や体温計の一本くらいに義理を立てて商売を棒に振るわけにはいかないという日になれば、全く赤の他人である。

ナイトクラブの経営者は、別に麻布の方に新店を建築中であったが、それがほぼ完成して近く開店することになっていた。その店の建築にはかなりの巨費を注ぎ込んだので、店主も殆ど

運命を賭けているとまで評判された。ところで新店の方のダンサーだが、それは現在ここに勤めている者で新店の方へ移りたい者は移す。別にニューフェースも三、四十人位は入れるという話であった。この話はよほど前からホステス達の間で重大な問題になっていた。現在の店で相当に売れている者は、慣れた職場を捨てて新店へ移ることについては多大の不安を感じていた。といって現在の店は建物が古くなって、これも早晩改築するという話はあるが、今のところ新店の大きくて近代的なのには到底及ぶべくもない。こういったわけで全部のダンサーが去就に迷っていた。その中で瑠璃子は最初から新店へ移る覚悟をきめていた。

「わたしは断然新しい方へ移るべきだと思うわ。一つのチャンスだもの。そうすれば今までのお客さんだって来てくれるでしょうし、その上新店だから必ず新規のお客さんが来てくれるでしょう。固定した店で働くよりその方が働きばえがすると思うわ」

ふだんあまり明確な意志を表示しない瑠璃子としては珍しく割り切った考え方で、彼女の熱意に動かされて新店へ行くことに決めた朋輩も少なくなかった。それだけに本人は一層張り切っていた。木島京子も新店へ行くことになった。もっとも瑠璃子と京子がいるアパートからリドウ（新店）までは都電で一停留場である。

加賀美は瑠璃子に銀座の洋服屋で、純白に近いモヘヤで夏のスーツを注文してやった。服を

こしらえてやることは別に珍しいことではないが、今度の場合は新しい店から出発するのを祝ってやる意味もあって、開店の日の正午までに仕上げるようにと洋服屋へ念を押してあった。

加賀美は丁度開店の日ホテルに泊っていた。五時頃洋服屋へ行って出来ているかと訊ねると「出来ておりますがまだ取りにお見えになりません」と番頭はいった。彼女も今日は忙しいだろう。都合によっては持って行ってやってもいいと思ったが、ともかく彼女に電話をかけるといなかった。そこで念の為に京子の部屋へ電話を通じるとそこにもいなかったが、

「今日は開店の日で七時に集合することになっていますから、もう追っ付け帰っていらっしゃると思います。わたしのところでお待ちになってはいかがですか」

と京子はいってすすめた。加賀美は京子と親しくしていても、まだ何も彼女にやったことがないことを思いついたので、この機会に一寸した物をプレゼントしてやろうと考えた。すぐその足で和光へ行って何か探すつもりで三階へ上ると、そこにマルティングラスの花瓶が陳列してあった。新しい感覚を持っていて、近代的な生け花には調和するかもしれないと、花瓶を二個買って洋服屋へ戻ると、先ほど瑠璃子が取りに来て帰ったという後だった。そこでタクシーでアパートへ行くと、丁度瑠璃子も乗って来たタクシーから洋服の箱を抱えて降りるところだった。彼女は途中で一寸どこかへ寄って来たのだろう。

「あら――」
彼女は妙な表情をしたが加賀美は別に気にもとめなかった。
「京ちゃんと君に上げようと思って花瓶を買って来た」
一緒に部屋へ行って、それから花瓶の箱を瑠璃子に持たせて二人で京子を訪ねた。加賀美は二人に花瓶を箱から取り出させた。一つは濃いグリーンで、一つは淡い紅色だった。
「まあ素敵」京子は叫んだ「先生からこんな物頂いてはすみませんわ」
「そんな礼をいうほどの物じゃないが、あなたは商売道具だから、どっちでも気に入った方を取って下さい」
京子はグリーンの方をほしかったらしいが、遠慮してどっちをとるともいわなかった。そこで止むをえずクジをこしらえて引かせると、やっぱりグリーンが京子に当った。
「まあ嬉しい。あたしの好きな方が当った。ルリちゃん構わない」
瑠璃子はシュンとしたような顔をしていたが、実際はどっちがいいともいえないのだ。それにこのプレゼントは京子が主なのだから、京子が喜んでくれれば一番いいのだ。
それから暫くそこで喋っているうちに、集合時間の七時は過ぎてしまった。まだ外は少し明るいが、京子の部屋の窓一杯にうつるタワーは、淡く、濃く、紅い照明で空に浮き上っていた。

八時近くなって三人は一緒に外へ出て、タクシーでつい眼と鼻の距離のところにある新しい店の前へ行き、そこで二人を降ろして、まだ時間が早いので加賀美は銀座の方へ引っ返した。
その晩加賀美がリドウへ行ったのは十時頃だった。建物は外部も内部も未完成で、コンクリートが乾き切らないといった有様であったが、夜昼工事を急いでともかくも予定の日に開業したのだった。どこもかしこも花輪でうずまっていた。今夜と明日は招待日である。テーブルは招待客で一杯だった。そんなわけですべてがガサガサした感じで落ちつきが悪かった。瑠璃子のグループは六、七人あって、その女たちが皆加賀美のテーブルへ挨拶に来た。加賀美は今夜その連中へ義理をするために来たのだ。瑠璃子ははやくから張り切っていたくらいだから、今夜の招待客の中にも自分のお客が幾人もいるらしく、忙しくテーブルを廻っていた。加賀美はこの開店日に女を連れ出すのも悪いと思ったし、そうかといってラストまでいる気にはなれず、十二時頃独りでホテルへ帰った。
翌朝、加賀美は眼を醒ますと直ぐ、今日は昼から彼女に逢おうと思っていたので電話をかけた。十時頃だ。するとなんと帰っていないのだった。十二時になっても一時になっても帰って来なかった。開店日だと思うから、折角行ってもわざと自分だけ帰って来たのだ。昼間からあれほど好意をつくし、夜は夜で友だちにまで義理を果しに行ってやったのに、その晩、彼の帰

ったあとで、誰かとどこかへ泊りに行ったのだ。

読者はすでにこれを読んで、加賀美がこれほど分り切った売女に対してなおも綿々恋々としているのを歯がゆく思うだろう。しかし加賀美とすれば、これも当然の結末に到達するまでの一つの努力である。彼といえども、この恋愛が失われつつあるのを知らぬわけではない。ただ完全に失うまでには、まだ多少の時間と、動かない事実が必要である。いったい世間の人は、燃え盛る恋愛に対しては熱心であるけれども、恋愛が失われて行く過程も、立派な恋愛であるということをあまり考えていないようだ。そこでの恋愛は明るい幸福なものではなく、不信、疑惑、未練、嫉妬のような感情に悩み狂う暗い不幸なものである。けれどもその不幸を味わわなくては、自分の恋愛がどれほど深いものであったかという深さを知ることは出来ないのだ。

或る日の夕方、例によって電話が通話中だったので、加賀美はタクシーを飛ばして瑠璃子のアパートへ行ってみた。すると三階の彼女の部屋はあかあかと電燈がついていたので、加賀美は息ごんで三階へ上って行った。ノックすると「はい」と答えてドアを開けたのは、瑠璃子ではなくて時々手伝いに来ている浴衣を着た中年の女だった。瑠璃子はその女のことを加賀美に四谷の従姉妹で、時々手伝いに来てくれているのだといっていた。「あの人薬剤師ですのよ」ともいった。

「いらっしゃいませ。瑠璃子さんはお留守ですけど、お待ちになってはいかがですか」

「待っているわけにもいかないが、一寸休んで行きましょうかね」

加賀美は長椅子へ行って煙草を吸っていると、中年の女は茶を淹れて持って来た。

「あなたのお宅は四谷ですってね」

「いいえ、わたしの家はつい近くの小山町です。二日おきくらいにお掃除やお洗濯に通って参りますんですよ」

「佐藤さんの親類の方じゃないですか」

「いいえ」と中年の女は笑っていた。向うの部屋の壁にかかっている竹の額ぶちに入れた歌麿の浴衣姿の女の絵が笑っているように見えた。それは加賀美が並木通りの版画屋で買ったものだった。

「先生は今日瑠璃子さんとお約束があったんですか」

「いや、何も約束はしてないんです」

「わたしも今日はまだお会いしていませんが、もうそろそろ帰らなくちゃならん時間です。リドウへ変ってから瑠璃子さんとてもお忙しいようでございますわね」

加賀美は直ぐ暇を告げた。なんともいえない憤りがこみ上げて来た。通いの女中を四谷の従

姉妹だと偽る必要がどこにあるだろう。愚弄するも甚だしい。もっともあとになれば、四谷の従姉妹も薬剤師も全部架空の出鱈目であることが分るのだ。

加賀美は瑠璃子の正体を知ってやろうと決意した。実際問題としてもそうした必要に迫られていた。

五

蠣殻町の裏通りに「加藤探偵局」と明朝活字風の字で書いた大きな看板の出ている木造二階建のモダンな事務所があった。加賀美がそこを訪ねたのは午後三時頃であった。植木鉢などがおいてある階下で十数人の男女が事務をとっていた。二、三日前から面会の約束がしてあったので、名前を告げると直ぐ「局長室」という札のかかった部屋に通され、待つ間もなく局長の加藤早百合女史が入って来た。ワンピースを着たせいのすらっと高い中年の瀟洒たる美人である。加賀美は直ぐに用件を語り出した。瑠璃子の行動調査を依頼したのであった。本人の氏名、勤め先、現住所、前住所、出身地、その他必要と思われることは、彼の知っている限り話した。女史は彼のいうことを全部書き取った。

「当人の写真をお持ちではございませんか」

「持っていません」

「それでは他の方法で面取りを致しましょう」

「大体どれ位の期間で調査は出来ますか」

「わたくしの処では一週間を標準にしております。一週間で、あるものなら大抵現われるものです。それ以上の細かい事になりますと又日数を要しますけれど」

加賀美は申込書に署名し、申込金と別に実費の概算を支払った。

「明日から調査を始めます」と局長はいった。

「こういう事件は時々まいりますか」

「まいります。八割までは男女間の問題です。旦那様が奥様を疑って行動調査を依頼してくるのが多いのですが、調べた結果は旦那様の嫉妬で、何も出て来ないのが随分ございます」

局長は美しい眼で笑っていった。

それから二、三日加賀美は落ちつかない気持で暮した。女の問題で私立探偵局に依頼するというようなことは加賀美も初めての経験であった。瑠璃子の正体を知りたいと思っても、自分の眼でそれを見ることは出来ない。しかし信用ある探偵局に依頼して調査すれば、自分に代っ

て調べてくれるのだから、結局自分の眼で見るのと同じことだと思った。又、こういうことをするのも、自分にまだ愛情と未練があるからだと思った。同時に、何が飛び出すかしらという悪魔的な期待が頭を抬げることも禁じえなかった。とにかく落ちつかない一日一日であった。調査中は寄りつかないつもりであったが、全然行かないのも却って疑念を持たせることになるかも知れないという理屈もつくが、それよりも好奇心を唆られて、依頼した日から三日目に早くも加賀美はリドウへ行って見た。勿論彼女は何も気がついていなかった。その晩はひまであった。加賀美はおそくても家へ帰ることにきめていたので、十二時過ぎから彼女を連れ出して赤坂の以前の店へ行って暫く遊び、それからそこの専属の自動車で彼女をアパートへ送り届け、彼はその車で鎌倉へ帰って来た。その翌々日加賀美は辛抱し兼ねて鎌倉から東京の探偵局へ電話をかけると局長が出た。

「少しは手がかりがつきましたか」

「はい。確実なのが一つは出ましたが、そのあとは店の方の張込みが困難でうまくまいりません。しかしあることはあるようです」

一週間経った木曜日の昼過ぎ加賀美は東京へ出て、探偵局を訪問すると、今日は局長は不在であったが、女史の父君で総務部長である六十年配の紳士が代って応対した。

「だいぶ男出入りは激しいようです。昨日までの一週間の報告が出ております」

といって幾つにも綴った報告書を取り寄せ、

「まだタイプに打ってありませんが、一応ここで御覧下すっても結構です。日報といいまして、毎日担当者に前日の報告を出させることにしております」

加賀美は飛び付くようにそれを読んだ。

佐藤瑠璃子殿に関する行動調査の件

昭和卅×年×月十六日（木曜日）

午后〇時〇〇分　局長以下局員車を用意し××区××町「××荘」付近に到着し張込みを開始する。

〃　一時〇五分　本人部屋の正面テラスに黄色いバスタオルが干してあり、横側テスリには座布団が三枚干してある。窓が開いていることから本人在宅と思われる。

〃　一時一〇分　本人が部屋に居るのを確認する。

〃　一時一五分　中年の男性が一名同女を訪問中であるが肩の部分しか見えず、容貌、身長、年齢等は不明。

午后二時三〇分　本人室の他の人物は白ワイシャツを着ているが相変らず肩の一部しか認められず。

〃　二時四八分　本人の面取りもまだ確認出来ぬ上このまま二人で外出されてはと不安に思い局員Aは本人の室を訪ね他の用件にことづけ、それとなく面取りをする。しかし男客は入口より見えず、本人の服装白と黒の細い線のマンボズボンに黒と青の縞のブラウス着用。一見五尺三寸はない様に見受けられる。

〃　四時〇〇分　本人の部屋での動き全く分らず。窓より顔を出さず。

〃　六時二五分　座布団を入れるが本人顔を出さず。

〃　六時五〇分　正面より左側の電燈ともる。障子わずかの間をおき閉める。

〃　八時三〇分　窓から本人の頭部時折見えるが、出勤の時間になっても外へ出ず。

〃　九時一二分　本人の部屋の電燈消え、ルーム燈つく。窓障子を開けバスタオルを取り込みカーテンを引く。

当局員男性の訪問者があるらしいのに、此時間に電燈が消えるのを不審に思う。

〃　九時四五分　相変らず電気つかず。此旨局に報告する。

〃　十時一〇分　電気つく。人影一つが右の室より左の室に移る。暫くして又人影が一つ右

の室より左の室に移る。人影が男女であることが窓の開いた所に来た時確認出来る。やがて男性は帰るものと思料される。局員外に立っていたのでは出て来る人間がどの室から出て来たか分らないため、A局員アパートに入り三階四階の階段にて本人の部屋から出るのを待つ。

〃　十時二〇分　四階の住人に見とがめられやむをえず一旦アパートの外へ出る。

〃　十時二三分　本人の室から男が顔を出す。

〃　十時二五分　よって局員再びアパートに入り、三、四階の中間階段にて本人の室のドアの見える所にて出入りを待つ。

〃　十時二八分　男性出る。ドアのそばにて抱き合いキスするのを確認する。男は一見四十以上、顔よく見えず、五尺六寸位、太り気味。服装紺系統の上衣、グレー系のズボン。階段からすぐに尾行に移っては不審に思われる為、少し間を置き後を追う。×の橋にて空車をさがすもなく、

〃　十時三一分　×の橋を渡った所でようやく車を拾い×の橋方面へ向う。局員は待機中の車にて後を追う。

〃　十時四七分　目黒区柿ノ木坂を通り玉川×××町×ノ×××―一「大倉健」宅前にて車より降り同宅に入る。中より女性の「お帰りなさい」という声が聞える。

午后十一時〇〇分　此旨局に報告。本日の張込みを終了する。

×月十七日（金曜日）

午前十一時二〇分　局員二名車を用意し現場へ向う。

午后〇時〇五分　現場到着直ちに張込む。窓正面及び横窓共に開いておらず。張込み場所を七十米先の××神社境内に移す。

〃　四時三五分　神社石段より本人室の横窓開くを見る。望遠鏡にて内部を見れば、本人とは違う女性（白地に青色模様ある浴衣、エンジの帯、頭髪アップ、鼻シャクレており、光線の加減にて年齢不明）机に向い雑誌を読んでいる。此旨局に報告。

〃　六時十六分　本人連れ一人と共に車にて帰る。本人の服装は白地に青模様のアロハシャツ、白地にネズミ色の縞あるマンボズボン、サンダルをはき、頭髪茶色である。連れの女性はピンクのブラウスにブルーのズボン、手に荷物を持っている。

〃　六時二〇分　電燈ともる。テラスに海水着二枚干す。

〃　七時〇二分　本人バスタオル一枚を腰に巻いているのを望見する。

〃　七時二三分　窓を閉め部屋の電燈消える。

〃　七時二四分　本人連れと共に出る。本人の服装はクリーム色のツーピースに赤のハイヒ

ール。手には何も持たず。

〃　七時二五分　×の橋電停より車を拾い×の橋方面へ向う。当方待機中の車でこれを追えば、リドウ裏口にて本人だけ降り、ボーイと立ち話をなしリドウに入る。会話から連れの女性はクラブBのJ子と判明。此旨局に報告。一度局に帰り、深夜の張込みの為に待機する。

〃　十時五〇分　リドウ到着、ガソリンスタンド前に駐車させ張込む。

〃　十一時三〇分　店の外の電気全部消える。

午前〇時〇〇分　男女の出入り多く、電気消えた為出入りの瞬間に確認することは困難となる。又外にボーイが立っているため余り接近出来ず。

〃　〇時三一分　本人及び、白背広、白パナマ帽、ステッキ持参、長髪、眼鏡をかけた一見六十年配の紳士連れ立って出る。局員はこれを依頼者と思料するが一応尾行する。店前より車（五き―七四〇〇）に乗車本人宅方面へ向う。（連れの男性に対しボーイは先生と呼ぶ）

〃　〇時三七分　本人宅へは行かず飯倉、虎ノ門を通り赤坂山王下クラブBに着き降りる。

〃　一時二九分　本人紳士と共にクラブBより出て車（三―一四七九六）に乗車、来た道を戻る。アメリカ大使館前を通り飯倉四丁目を経て××荘前にて車を止め、運転手がドアを開け本人は車より降りて連れに挨拶をしてアパートに入る。車の紳士は依頼者に相違なしと思われ

た為尾行中止し、此旨局に報告、本日の張込みを解き局に引上げる。
（局員の報告は女性の行動を照魔鏡で照し出すようで興味津々たるものだが、この小説には枚数の制限があるため全部採録するわけにいかない。いま一日分だけ載せる）

×月二十一日（火曜日）

午前〇時〇八分　局員二名リドウ裏表に張込む。懐中電燈を持った守衛の様な男、見廻りに来る。付近は暗く静まり返っている。客が入る度に入口真暗な為、ボーイは懐中電燈で足許を照らし案内する。

〃　一時一六分　本人、水色Yラインの女性、及び連れ三人の男性と共にキャッキャッといいながら正面より出て、五米程左に歩き宝タクシーを拾い、女性一人と男性一人乗車するが、二名は又下車し、局員の前を通り、裏口付近で再び京王タクシー（五き―五三四五）を拾い、女性一名男性二人は後席に座し、本人と他の男性一人は前方に乗車。

〃　一時一九分　タクシー発車、局員追跡する。×の橋より都電道を××橋方面に走り、×の橋電停を右折、××荘前にて停車。本人及び男性一人下車。態度その他によりこの二人特定の関係らしく観察される。他の男性二人と女性一人がもたついていたが結局下車する。

〃〃　二三分　アパート入口で遠慮がちな他の三人を本人は「どうぞ」と云い招じ入れる。

〃〃　二四分　三階本人の室左右共電燈つく。男性及び女性の姿がちらほら見える。窓開く。左側の部屋に皆集まる。一同大声で笑う。開襟の男性「開襟でも暑いなあ」と大声を出してぬぐ。皆大笑いする。

〃〃　三〇分　麻雀を始めるらしくパイの音がする。

〃〃　四一分　麻雀開始。局員暫く扉に接近して張込む。

〃　二時〇〇分　麻雀益々佳境に入っている様子で当分終りそうにない為、当夜の張込みを打切る。猶、麻雀をしていた男女の容姿は左の通りであります。

一、白地に細かい縞の背広、グレーの靴、五十四歳位、ヒタイ禿上った五尺四寸位。
二、ワイシャツ、グレーズボン、茶靴、五尺三寸強、四十六、七歳、体格普通。
三、開襟シャツ、紺ズボン、黒靴、黒ブチ眼鏡、五尺五寸、四十三、四、体格良し。
四、女性、五尺一寸五分弱、中肉、白ハンドバッグ、白パンプス、二十六、七歳、髪普通。

加賀美は息もつけぬほどの感興を以て全部の報告書を読み終った。彼の猟奇心は、探偵局員の張込みの現場を見て実感を味わいたくなったので、そのことを総務部長に話すと、総務部長は在局の担当者の一人を呼んで彼の希望を伝えてくれた。

「昼間はたいていアパートの先の××神社の石段の中頃に張込んでいます。今日行っているのは二十五位の男で、五尺二寸位、頭は刈り上げ、ワイシャツにグリーンのズボン、黒靴で、小さな望遠鏡を肩にかけています」

と局員は教えてくれた。総務部長は、

「なお、調査第一日に現われた大倉健という人については、別の者が身分調査に当っています。又本人の前住所での聞き込みもやっていますが、それらは大抵明日あたりまでに終了する筈でございます。全部揃ったところでタイプに打ってお手許へ届けます」

加賀美は蝸殻町からタクシーを走らせて××荘へ向かった。いままでとは全く異なった目的を持って行く自分の姿を不思議に思った。アパートの前をわざとゆっくり走らせながら車の窓から見上げると、彼女の部屋は正面のガラス戸が閉まっていた。七、八十米先へ行くと道が曲っていて、そのつき当りに神社の石段がついている。彼が石段を上ってアパートの方を見ていると、一人の青年が近付いて来た。張込みの局員で加賀美の顔をよく知っていた。

「本人は昨夜から不在です。昨夜は先生がお出でになってると思って引き上げたんですが」

「報告書で拝見しましたが、それは間違いでした。あれは私の乗用車ではありません。しかしラストの時間に本人を捉えることは困難ですね」

加賀美がこの前にクラブBから乗った車がリドウの前に駐車していたので、局員はそれを加賀美の乗用車と間違えたのである。ナイトクラブのラストの時間には、表も裏も真暗になっている。客は表から出るが、百五十人から二百人いるダンサーや、バンドマンや、従業員達は裏口からどっと一斉に暗い町へ流れ出るのだ。その瞬間に目差す当人を捉えることは全く不可能に近い。しかし瑠璃子は自分のアパートへ帰ることは殆どなく、そのままどこかへ消えてしまうのだった。

「玉川の大倉という人の家を見たいのですが、案内して頂けますか」

「承知しました。その晩追跡したのは私ともう一人の同僚でしたから家をよく知っています」

青年は電車通へ行って車を拾って来た。二人は玉川へ向かった。この一週間の調査を通して男性の実体が浮かび上ったのは大倉という人物だけである。あとは彼女が外泊してアパートへ帰らないことが実証されるだけで、その間の行動は不明である。加賀美は大倉という人物の存在を確認するためにその家を見て来ようと思い立ったのだった。タクシーが目黒辺を通る時物凄い豪雨が襲って来て、舗装した広い道路は忽ち川のようになった。車はその中を水を飛ばして疾駆した。加賀美はその光景をさながら自分の情熱の現われでもあるかのように思った。加賀美はいわれもなく往年中国大陸を放浪した頃の自分の姿を思い出した。そして失われてし

まったと思っていた激しい感情や冒険心が、いまでも自分の心内に逞ましく残っていることを知った。玉川へ近付く頃には雨はすっかりあがっていた。

車は大倉氏の住居の前で停った。そこらは新開地めいた土地で、道路から二米位高くなり、二つに曲る石段がついていた。門には「大倉健」という表札が出ていて、何かの蔓をからませてある垣根の下にサボテンの小さな株が一列に植えてあるのが印象的であった。建物は中流の文化住宅式で、南側に芝を植えた庭があった。

それから二、三日のち、加賀美はタイプライターになった全部の報告書を受け取ったが、最後に付いている大倉健なる人物の身分調査と、瑠璃子の前住所における聞込みを読んだ加賀美は限りなく驚いてしまった。

大倉健殿及本人前住地に係る内偵調査は次ぎの通りであります。

一、大倉殿に係る件

本籍地　××県××市×町××番地

現住所　世田谷区玉川×××町×ノ××一

生年月日　明治四十三年一月二十一日

勤務先　日本タワー

同人は京都大学法学部を卒業、北支の××炭坑に勤務。戦後帰還し××新聞社に入社。途中一千田大蔵大臣の秘書官を勤めたことあるも、又社に帰る。社長後田永吉の信用を受け秘書格にて勤務。日本タワー建設に当り、抜擢されてタワー重役に転じた。

二、本人前住地における内偵

新宿区四谷×丁目××番地××方に本人は昭和三十×年一月、十畳一間、シャワー、キッチン付で前家賃一万円、本人名義で契約し、同年七月同家を出て居ります。（××方は個人経営のアパート）

同アパートには半年程しか居住しませんでしたが、金銭の支払等は几帳面に行われ、しっかりした気持のよい人物で、勝気な一面も見られ、五尺三寸大柄の近代美人であると、評されております。本人身許については前住地に於て何等の登録もなき為、本籍地も分らず、又短い年月の居住であった為に本人を知る者もありません。

四谷の前住所は完全なアパートだったのだ。従姉妹の家だの、その従姉妹が薬剤師であるなどとは跡形もない嘘だったのだ。瑠璃子は最初から嘘八百を並べて加賀美を騙していたのだ。

しかしこれらは一見何の利害関係もない嘘のようだ。そうした無意味な嘘までつくところに彼女の異常な性格があると思わねばなるまい。

大倉健なる人物の身分確認は、完全に加賀美を驚倒させた。瑠璃子が四谷から現住所へ移って来たのは去年の七月初めで、日本タワーはすでに建設途上にあった。従って大倉も同事務所に勤務していたのである。瑠璃子と大倉との交際は後にクラブBで調べたところによるとそれよりずっと前新聞社時代からであるらしい。いずれにしても去年の七月頃はその交際も相当進行していた筈である。その大倉が勤務することになった日本タワーから、距離で三、四丁、歩いて三、四分の場所へ瑠璃子は引っ越して来たのだ。見様に依ると、同氏が夕方勤めを終って事務所を出てブラブラ三分程歩いて来ると彼女のアパートへ達するというわけだから、こんな便利な場所はない。このことは瑠璃子の発意によるものだかそれとも大倉氏がそれをさせたのだか、それは何んともいえないが、少なくとも相談ずくであることは明らかだ。ここで問題は加賀美の立場である。彼はその敷金、前家賃、家財道具一式、冷蔵庫まで整えてやったのだ。大倉は重役といってもサラリーマンだからそんなに余裕がある筈もないが、第一女にそんなムダ金を使う男ではない。いい替えるなら、加賀美は大倉氏の為にその妾宅一軒を建設してやったことになる。この場合、人一倍抜け目のない大倉が加賀美の存在を知らずにいることは勿論

ない。知っていて瑠璃子にそれをやらせたとあれば、大倉もグルだったといわれても仕方がない。そしてその妾宅の使用率は加賀美に数倍したことは論をまたない。

瑠璃子が模造真珠の袋物をタワーの売店で売って貰うことになったいきさつも、これで明瞭になった。大倉の肝入りであることは無論だが、その資本は加賀美が出したのだ。

何もかも明らかになったようだ。要するに加賀美は一番最初から計画的に騙されていたのだといえる。それにしても不可解なのは彼女の生活状態で、探偵局員の調査によれば九日間に亙る間に、彼女がアパートへ帰って寝たのはたった二晩だけである。毎夜クラブのラストの時間に暗闇と混雑に紛れて、風の如く、魔性の如く、どこかへ姿を消してしまうのである。

六

加賀美は宵の内にリドウへ行った。瑠璃子は何も変った事もない顔をしていた。昼間プリンスホテルのプールへ行ったといっていた。二人は空いた客席で中華料理を食べた。瑠璃子は天気がよければ昼間はプールへ行くので、顔以外は、腕も背中も赤く陽にやけていた。瑠璃子は驚くべき健啖だった。プールで泳いで来たせいもあるが、最近又太って、そのエネルギッシュ

な肉体は貪婪そのもののように見えた。
加賀美は、この落ちついた上品な顔をしている女が、毎晩深夜になるといずこともなく姿を消してしまうという、探偵局の報告書を思い出していた。それから翌日夕方アパートへ帰って来ることもあるが、出先からそのまま店へ出勤することもある。この間の彼女の行動は全然不明である。探偵局の調査も、ある意味では明るみに出ている時だけの彼女の姿であって、闇の中へ隠れてからの行動は少しも摑めないのである。尤もこれについて局長は
「それには又別に調査の方法がないではありませんが、そこまでやる必要がございますか」
と加賀美にいった。
「いや、もうこれ以上調べて頂く必要はありません」
実際そんなことはムダなことだ。これ以上彼女の秘密をあばく必要はない。
「君もかなり発展家らしいが、アパートへお客を連れ込むということはあまりやらないらしいな」
食事のあとで加賀美はさり気なくいった。
「まあ、そんなことがあってもいいものですか。どうしてそんなことをいうの」
それから暫くたってから、

「わたしこの頃変なことがあるのよ」といって話し出した。「一週間くらい前、昼間誰かがドアをノックするのよ。それが何んだか厭な叩き方なの。押し売りかも知れないと思って一寸ドアを開けて何んですかって訊くと、大きな真黒な眼鏡をかけた男が、北島さんのお宅はこちらですかっていうの。北島なんて聞いたこともないし、気味が悪いから一階の管理人の所で聞いて下さいっていってドアを閉めちゃったの。その後でも気になるから、大家さんへ電話でこういう男が行きませんでしたかときくと、来ないというじゃありませんか。それから又こんなこともあるの。十二時過ぎにお店へ、瑠璃子さんいますかと男の声で電話が掛ってくるの。ボーイが呼びに来たからあたしが電話へ出て、モシモシというとプツッと切れてしまうんです。二、三回そんなことがあったのよ。誰がそんないたずらをするかと思って。アパートの空巣狙いが流行るっていうからそれも心配だし、空巣狙いでなかったらどういう意味でしょう。まさか先生がそんなことをなさる筈はないし」
瑠璃子は、じっと加賀美の顔を見た。彼女の方でも何か感付いていることはたしかである。
加賀美はもう黙っていることはできなくなった。彼はテーブルの上に乗り出した。
「それじゃ、いっそバラしてしまおうか。実は一週間ほど前から、僕がある機関を動かして君の行動を調査しているんだよ」

秋田県立図書館

「……」

「第一日目、先週の木曜日に、大倉さんが捉まってしまったんだ。昼間から二人でアパートにいて、夜電燈を消したのが九時十二分で、再び電燈がついたのが十時十分だ。それから大倉さんが支度して君の部屋から出たのが十時二十八分だ。その時ドアの側でキスしたこともちゃんと見られているんだ」

「まあ、そんなバカなことが」

「バカなこととといっても、動かせない事実だから仕方がない。三階と四階の階段の曲り角から眼だけ出している人がいたわけだ。それからこれは公然のことじゃないが、電気を消している間の情況だって、あのドアには郵便差入れ口がついているだろう。郵便差入れ口の蓋を外から指で押せば上へ上る。そこから覗けば玄関だけは見えるし、その穴へ耳を当てていれば、部屋の中の動静は手に取るように分るんだよ。大倉さんは電車通へ出たがタクシーが来ないので、×の橋を渡った所でタクシーを拾って乗ったが、それを探偵に追跡され、玉川の家へ帰って、奥さんがお帰んなさいという声まで聞き取られているのだ」

ホールの中の光線でも彼女の顔は蒼ざめ、突っ張ってしまった。

「デッチ上げだわ。大倉さんはよく知ってる方で、お友達の仕事のことなんかでお頼みに行ったこともあるけど。そんな人じゃないわ。――第一、先週の木曜日はラジオ屋が機械を直しに来た日だもの」

「昼間の早い頃はそうかも知れない。しかしラジオ屋はそう長いことはいない」

「出鱈目だわ」

「君はそういったって、先方は社会的信用ある探偵局だ。しかもその日は局長自ら陣頭に立って指揮していたんだから間違いない。その人達は職務として調査しているのであって、君に対して個人的の感情は何も持っていないのだ。大倉さんに対しても同じことだ。丁度その日にぶつかったのは大倉さんが運が悪かっただけだ」

瑠璃子のからだはブルブル顫え出した。加賀美はそれを見ると初めて経験する一種の悪魔的な快味をおぼえた。

「大倉さんが御迷惑なさると思うわ」

「多少は迷惑するかも知れないが、仕方がないね。自分のやったことなんだから、自分で責任を持つべきだ。人間はある事柄に対してはいつかそれだけの報復を受けるものなんだ。大倉という人は僕は一向知らない人だったが、今度詳しく調べたよ。新聞関係の人だから、僕には三十分以内で調査が出来る。おそらく君以上に知っているだろう。君が今のアパートへ引っ越し

たのは去年の七月初めだ。その頃彼は日本タワーの事務所へ勤めている。四谷から何んでタワーのお膝下へ引っ越したという、他の理由が立つと思うかね」

「四谷の従姉妹の家じゃ都合が悪いからって、先生に御相談したじゃありませんか」

加賀美は怒り心頭に発した。バンドは彼の感情を煽るような狂躁曲を演奏し出した。

「四谷の従姉妹だって。そんな幽霊はもう出遅れだよ。あの家は従姉妹の家屋でも薬屋でもなく、ただのアパートで、君の借りていた部屋は十畳で家賃一万円だったってことも調べ上っているんだ」

瑠璃子はそこでカタツムリのように黙ってしまった。眼のふちが急に黒く見え、化粧が剝げて行くのではないかと思った。神通力を破られた九尾の狐がクルクルと廻って正体を現わす昔の芝居を加賀美は思い出した。長い沈黙が続いた。加賀美は何か帰る恰好をつけなければならなかった。

「とにかくこんな話をしちゃもうお仕舞いだ。お別れに一つ踊ろうかね」

そういって加賀美が椅子から立つと瑠璃子も素直について来た。その時は小人数のバンドが静かな曲を演奏していた。こういう場所では、こういう恋の結末もそう珍しいことではないかも知れない。

「先生はもういらっしゃらないというんですか」

「始めのあるものは終りありで、仕方のないことだろうね」

加賀美はもう平静な気持になっていた。

「その方が先生にとって都合がいいからだわ」

加賀美は直ぐに帰った。

ほとんど一年がかりでモヤモヤしていた問題が解決したので、加賀美は一応ほっとしたような気持になった。といってもそれはあの長かった雨が晴れたあとのようなカラッとした気持ではなかった。恋愛はいつでも、どんな形でも失ったがわの方に不幸は残るのである。それから数日経った或る日の夕方電話をかけると丁度よくいた。

「今から一寸行こうと思うが」

「どうぞ」

タクシーは、日比谷の方から空に浮き上ったタワーを真正面に見ながら走った。公園へ入って、タワーの下を通ると、そこにはまだ車や人が群がっているのが見えた。加賀美は、タワーと自分との間にある何かの因縁といったようなものをかすかに感じた。瑠璃子は、ズドンとした部屋着に素足で、何事も起らなかった時のような顔つきをして彼を迎えた。

窓際のテーブルにカレーライスが一皿おいてあった。瑠璃子は冷蔵庫からオレンジジュースを出してコップに注ぎながらいった。

「おなかが空いたからライスカレーを注文したところだったの。半分召し上らない。おいしくはないだろうけど」

「たべよう」

彼女は別の皿を持って来て、フォークでそれを真二つに分けて、分けた方を加賀美の前においた。彼も丁度空腹だったので、その半分のカレーをひどくうまく食べた。瑠璃子も黙って食べていた。

「コーヒー淹(い)れましょうか」

「いや、お茶で結構」

彼女はお勝手へ行って茶をいれ、長椅子へ移っている加賀美の前へ持って来て、自分も向き合いの肘掛椅子にかけた。ゆたかなまっ白い肉、うす赤く染めた髪、小さく結ばれている口もと。二た皮眼と典型的な鼻。加賀美をとらえたそれらのものは以前と少しも変っているわけではなかった。手をのばして、彼女を自分の横に坐らせれば、それですべては解決するのだ。前と同じ状態に平易に戻ることができるのだ。

「この間は少し乱暴なことをいい過ぎたようだ。僕はおこって別れようというんじゃないから、あらためて話をしに来たのだ」

「わたしは何んといわれてもやましいことはないのよ」

「それならそれでいい。君には君の生き方もあることだからね」

「わたしの生き方より、先生のご都合ね。それでなかったら、あんなひどいことなさる筈がないもの。アパートの人たちはみんな気がついていたんですって。知らなかったのはわたしだけなんですって」

それは加賀美としてもいいわけの出来ない苦しさであった。自分の愛している女にどんなことがあるにせよ、私立探偵を頼んで素行を暴くなどということは不道徳極まることである。これだけは一言半句もなく、平身低頭して謝まっても足りないことだと思った。

大倉氏との関係だけは具体的に明るみへ出されたといっても、それ以外の瑠璃子の生活はなんにも明らかになっていないのだ。濃い霧の奥にいるようでもあるし、加賀美の眼に見えるのは、水草や木の葉が浮いている古池の表面だけであって、その底には何が住んでいるのか分らないのと同じように、瑠璃子の生活の大部分は、加賀美の眼から遮(さえぎ)られてしまっているのだ。加賀美にしても大倉にしても、ほんの幕外で躍る役者に過ぎないかも知れない。

正直なところ加賀美は、こうして瑠璃子と向き合っていると、そのからだじゅうのどの一点にも暗いかげなどあろうとは思われなかった。そればかりか、女のほうでも自分に対して愛情を持っているのだと思いたかった。少し譬えはおかしいけれども、妖怪変化の女が最後には男を取り殺すにしてもそれが愛情のためであるのと同じように、どんなに彼をだまくらかしていようとも、愛情はやはり愛情であると思った。

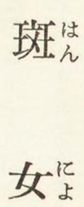
暫く言葉は跡絶えていた。やがて加賀美は一つの決断をえた。

「今はお互いに何をいっても無駄だ。一応これで別れよう」

といって加賀美は立ち上った。瑠璃子は後からついて来た。玄関で加賀美が靴の紐を結んでしまった時「じゃ、また」と瑠璃子はいった。

外へ出ると日が暮れかけていた。向うの町の屋根の上に、タワーは何か不吉なものを象徴するような感じで立っていた。

斑女



一

加奈子が金を貯めようと考え出したのは今から五年くらい前からであった。どういう動機で金を貯めようと考え出したのかといって、別に取り立てていうほどの動機はない。だれでも金を貯めたいとは考えるものだが、実際には貯まらないだけのことである。加奈子の場合はほんの偶然のことからだった。偶然ということが当らなければ、運がよかったといってもいいし、ついていたといってもよかった。なんといってもその時分は加奈子も女盛りであったから、いわゆる引く手数多であった。ナイトクラブで働いていても面白いくらい客がついた。一とテーブル平均二千円としても、五つあれば一と晩一万円である。アパートの部屋代当時六千円。毎月作る洋服代をほぼ同額ぐらいと見て、それに食費、美容院の払い、靴代、交通費等、いっさいを計算して二万円あれば十分であった。実際にはテーブルで稼ぐ収入はそれほどにはいかないとしても、その代りもっと大きな臨時収入が時どきあった。これは金儲けであると同時に、

半ば以上は彼女も楽しみであった。夫はもちろんないし、恋人というほどのものもない加奈子は、お客に誘われてホテルへ行って泊る晩は――ごく稀れには自分のアパートへ泊めることもあったが――加奈子にとっても享楽であった。そこには恋愛は少しもない。しかし肉体の交わりの快楽は、こういう種類も、恋人同士もほぼ変りはないだろう。ただ済んでしまったあとに愛情が何にも残らないだけの相違である。加奈子はこれを金で取引きするためかしら、と考えてみたこともある。たしかにそうである。なかには彼女の方も好きで、恋人にしてもいいな、と思うような男もたまにはある。けれども彼女の方でそう思うだけで、男の方に真の愛情がなかったら、恋愛は成立しないではあるまいか。男の方は単に金を出して彼女の美貌や見事な肉体を買うだけのことで、ベッドの中ではどんな恋人にもまけないだけの情熱や、動物的の本能を存分に発揮するけれども、済んだあとではケロリとしているのである。「これで元はとれている」といったような満足な顔をするのが関の山である。それならいっそ彼女の方でも、そういう好きな男からは金を取らないで、恋愛だけを楽しむようにしたらよさそうなものだとも思われるが、それは多くの女がほとんど皆やっていることであって、その結果は例外なしに最悪だといっていい。男という動物は金を払った時だけ女の価値を認めるのであって、金を払わないとなると、破れたシャツかなんかのように粗末に取り扱うのである。そして自分は王様のよ

うに自惚れて反対に女から金を絞り取ろうとするのである。キャバレーのダンサーやナイトクラブのホステスをやっていやというほどそういう実例を見ている加奈子には、そんな阿呆げた真似は出来ないのだ。「恋愛はこの職業からは生れない」と彼女は固く信じている。「この広い世間にはどこかに自分の恋人がいるに違いない」そういう少女めいた空想やあこがれを持つことも満更ないではないが、そんなことは現在の生活と関係のないことだ。無益なことに心を浪費するくらいなら靴下の繕いでもしていたほうがいい、彼女はこういう考え方である。だから同じ職場の或る女たちのように、お客の中に恋人めいたものをこしらえるとか、ヒモに貢ぐとかいったようなことは加奈子の場合は絶対にない。

その頃彼女がツイていた証拠には、友達同士で麻雀をやっても、ポーカーをやっても、決して負けたことがなかった。帰る時には必ずといっていいくらい金が殖えていた。こういうこともばかにできないものである。そうかといって加奈子が特に勝負事が上手なわけではない。賭け事は好きは好きであるけれどもむしろヘタである。それにもかかわらず勝つのである。だから友達も「ナカちゃん――カナをひっくりかえしていうのだった――近頃すごくツイてるね」と呆れたようにいうくらいだった。加奈子が自分でもツイていると思ったのは、やはりバクチ好きの友達と一緒に相当な親分が開帳している本式のトバへ行った時だった。従来こういうと

ころへ来て勝ったためしはないのだが、その頃の加奈子は行くたびに何万円ずつか勝って帰った。顔見知りになった貸元が「吉沢さんは大層ツイてますな」と笑っていったことさえあった。

或る日加奈子は、銀行の普通預金帳の帳尻が百万円を突破しているのを見て、他人の出来事のように吃驚したことがあった。それほど自然に、別に計画したわけでもなく、苦心したわけでもなく、百万円貯まってしまったのだった。

「金持は吝嗇の始め」というが、加奈子もこうして偶然金持になると同時に、なお一層金を貯めようという気持が勃然と起って来た。それは第二の天性が目醒めたといってもいいが、まるで眠れる獅子が目醒めたような勢いで、彼女は自分の新しい信念の前に立った。各種の計画が泉のように湧いて来た。その計画は次ぎ次ぎと生れたものだが、便宜上同時に並べて見ると、今後絶対にムダ使いをしないこと、毎週一回定期的に銀行へ預金すること、一たん預金帳に記載された金はいかなる事情があっても絶対におろさないこと、現在の貯金の内百万円を定期預金に据え、今後は貯金が五十万円に達するごとに定期預金に振り替えること、ムダな交際を廃すること、金銭出納の帳簿を正確にすること、その他であった。そして毎週一回の預金日は土曜日の午前中ときめた。

加奈子は二冊の簿記帳を買って来た。一冊は金銭出納簿で、一冊は銀行関係の資産状態を明

確にするための帳簿であった。それには都合のいいことに、加奈子は女学校を卒業して家にいた時分その市の地方銀行へ二年ばかり勤めたことがあったので一と通り簿記の知識はあった。家にブラブラしているよりもというので、その町ではかなり顔役の父から銀行の頭取に頼んで形式的に採用試験は受けたが、ともかく銀行へ勤めることになったのだった。銀行というところは三時に金の出し入れを停止するから、夕方は五時か六時に退出できるものかと思っていたところが、実際に入って見ると、その後の残業が大変で、八時、九時まで残されるようなことも珍しくなく、見掛けよりは骨の折れる勤務であった。それでも半年、一年くらいは加奈子も興味をもって勤めた。この間に彼女が習得したことは簿記であった。一年半くらい勤めると加奈子は朝から晩まで紙幣の勘定をしているこの仕事が厭でたまらなくなって来た。同じところに勤めている男の行員から誘惑を受けたことも二度ぐらいあった。一人は大学を出てまだ間もない若い行員で、一人は四十男の課長であった。若い行員はわりかた美男であったが、加奈子は何の興味も惹かれなかった。課長のほうは三人も子供があって、女癖が悪いという噂のある、下司な男であったが、加奈子はむしろこの男には多少惹かれて、一度彼と一緒に松林の中にある旅館へ行って食事をしたことがあった。けれども男が彼女のからだに手をかけると、本能的に反撥して、男を突き飛ばし、旅館の玄関から靴をはいて遁げ出した。ちっともいい思い出の

残っていない勤めであったが、それでもその銀行勤めのおかげで簿記をおぼえたことは、いまとなっては得がたい収穫であった。彼女は二冊の会計簿へ克明に記入した。銀行預金の資産状態の方は比較的簡単だったが、毎日の収入支出の計算はかなり複雑であった。前日の収入と支出を計算して、手許の残金が一円でも不足していると、加奈子は何度でも計算し直すとか、つかった金の落ちを思い出そうとして一時間でも二時間でも考えているのであった。銀行へ勤めていた頃、帳尻と現金とが十円でも相違すると、その誤りを発見するまでは大勢の事務員が時間過ぎまで居残って計算をやり直さなければならなかった。当時加奈子はそれがばかばかしくて、時間の浪費であり、不当な体力の消耗だと思った。誰か十円出して帳尻を合せたらいいじゃないかと思った。しかし今になって考えて見ると、正確な計算ということは、銀行や個人の生活ばかりでなく、科学や自然界に対しても最大重要なことである。宇宙ロケットを打ち出すについては、どれほど精密な計算をすることだろうか。それでも釐毫の計算違いのためにアメリカは何遍失敗をくり返すことだろうか。個人の財政でも、一円でも計算違いとか記憶の間違いがあるのをそのまま過してしまえば、その会計簿全部は虚偽のものになってしまうのだ。加奈子はそういった考えから、一銭一円の間違いをも自分に対して許さなかった。

すべての守銭奴がそうであるように、彼女は極端に支出を憎み、反対に利殖に対しては熱心

で敏感であった。土曜日の午前に銀行へ預金する際には、それからあと一週間分の生活費を最小限度に計算して残しておき、他はごっそりと預けてしまうのである。出来るだけ切り詰めた生活をすることは勿論だが、それとは関係なく、日々の収入がある。彼女はその収入には決して手をつけず、毎晩箪笥の引き出しへ入れて鍵をかけてしまうのである。しかし生活費や経費はきめた通りに行くものではないから、週末に近付くと、取ってある生活費がなくなってしまうことがある。そうなっても彼女は決して箪笥の中の金を使うということはしなかった。それは所有権が別にあると同じように考えていた。だから窮乏すれば窮乏したような生活をした。たとえばライスカレーを食べる場合にかけそば一つで我慢するというやり方である。そのかけそば一杯の金もなくなった時は、一食や二食は抜きにする習慣までつけた。ナイトクラブの客は、酒類はどしどし注文して女たちにも飲ませるが、そこで食事をする人は少ない。どこのクラブでもあまり恥ずかしくない西洋料理と中華料理が出来るから、家族づれの外人客などは宵に来てバンドの音楽をたのしみながら食事をする組もかなりある。日本人の客でもダンサーにご馳走してくれる人も時たまあるが、まず当てにはならない。酒類はダンサーの飲んだ分は半分店から割り返しが来る。三百円のハイボールを一杯飲めばダンサーのふところへ百五十円入る。だからあっちこっちのテーブルで二、三杯ずつ飲めばそれだけでもかなりいい収入になる。

もちろんチップとは関係ない。酒の強い女はそれでかなり稼ぐ理屈である。ところが加奈子は酒は一滴も飲めないと来ているから駄目だ。ジュースなんか飲んだっていくらも儲かるものではないし、飲んだって腹の足しにはならない。店がかんばんになってから――大抵午前一時半――友だち同士誘い合って、夜明かしの朝鮮料理だとかお茶漬屋だとかへ行くことが多い。バンドの男が一人や二人まじることもある。誰かのお客が幾人もの女を誘って行くこともある。その時は問題はないが、女ばかりの時は割かんが普通である。加奈子は週末で金がないことがある。「あたしお金がないから」という。友達が「いいわ、立て替えておくから」というと加奈子はのこのことついて来る。が、わりかた几帳面だからそういう借りは今度金が入った時必ず返すようにする。友だちは彼女が全く一文も持っていないことを知って不思議に感じたが、誰もその秘密を知ることはできなかった。「あたし貧乏で困るのよ」と加奈子は口癖のようにいった。加奈子があんなに稼いでいるにもかかわらず貧乏するのは、どこかに引け道があるからに相違ないと思った。そうかといって恋人がある様子もないし、親許は埼玉県の某市で旅館を営んでいるし、大体その家は土地の旧家で、二代くらい前までは盛大に暮していたということだ。加奈子の兄もちゃんとした会社員で、決して貧しい家庭ではない。そういう事情を知っている者にとっては、加奈子の貧乏はあくまでも不可解であった。

加奈子の定期預金は雪だるま式に見る見る太って大きくなっていった。それと同時に強慾はますます激しくなった。しかしあくまでも利殖の道に長けた彼女は、金を儲けるためには徒らに消極的では駄目であると悟った。何商売でも門戸を張り、体裁をつくる必要があることは、彼女の場合も変りはない。そこで先ず、当時としては飛び切り高い家賃二万円のアパートへ引っ越した。二部屋あって無論バス付きである。敷金の十万円は痛かったが、これは出る時は返してもらえる契約である。十万円を何年間も無利息で預けておくことは馬鹿らしいが、習慣だから仕方がない。部屋に相応した家具調度、装飾も必要になった。小さい物は自分でも買ったが、すこし金のがさばるもの――たとえばピカピカする洋服箪笥、大きな三面鏡、絨氈といった類――はなんとかしてお客に買わせる算段をした。今までのようにホテルへ行かずになるべく自分の豪華なアパートへ連れ込むようにした。それは彼女の値打ちを上げることになって、同時にお客の方もムダなホテル代をはぶくことになって双方経済的であった。彼女は自分できめた公定価格を決して崩さなかった。アメリカ人などの中にはどうかすると、ベッドへ行って支払う直前になって値切る男があった。或る晩加奈子の友だちがアパートへ来て泊ることになった。その時加奈子のお客のアメリカ人も一緒で、いよいよ最後の土たん場になって値切り出した。加奈子は服をぬぎシュミーズ一枚になってそれの応酬をしていたが、一時間もかかって、

結局加奈子は一銭も負けなかった。アメリカ人の完全な敗北であった。「カナちゃんはよくあんなに頑張れるわね」と翌日友だちはいった。「だって、魚は鉤にかかっているのよ。釣れているのに小さい魚と取り替える法はないわ」と加奈子は朝のコーヒーを飲みながらいった。この話は友だちの口から広まってかなり有名になった。が、もっと有名な話がある。

政界の汚職と関連して赤坂で有名になった春若という芸者があった。その芸者を細君にしたKという芸能社長があった。社長は加奈子の肉体に魅せられてこの女と遊んで見たいという浮気心を起したが、花柳界でばかり遊びつけている社長は直接談判をするのがテレくさいので、彼女の友だちに交渉を依頼した。加奈子はもちろんOKだった。この有名な芸能社長なら金ばなれもよいだろうが、第一将来のためになると考えた。その晩社長をアパートへ連れ込んだが、何しろ相手が相手だから金の話などしなかった。黙っていても社長のことだから相当のことはしてくれるに相違ない。ところが、あいにくなことに芸能社長はおそろしくケチな人だった。十分たのしんだ揚句帰りがけに、鰐皮の大きな紙入れから札を取り出して置いていった金額は五千円であった。加奈子は地団駄踏んでおこったがどうすることもできなかった。翌日の昼、Kを紹介した友だちを電話で呼び寄せた。芸能社長が五千円おいて帰った顚末を話して、加奈子は憤懣やる方ない顔をして云った。

「あたしがどんなことがあっても一万円のワクは崩さないことは、あんたも知っているはずじゃないの。Kさんだから、黙っていても二つや三つはよこすことと思っていたのよ。あたしの不覚だったわ。けどあんただってこれには責任があると思うよ。みすみすあたしに五千円損をかけたんだからね。あたしこんな侮辱を受けてそのままじゃ胸がおさまらないから、あんた責任を持ってKさんから取り返してよ、お願いするわ」

加奈子の話を聞いていると、まるで芸能社長が彼女の財布の中から現金五千円を持ち逃げでもしたように聞えてくるのだった。友達は加奈子の権幕に呑まれ、全く自分の責任であるかのように思い込んでしまったので、

「あたしの手落ちだったから勘弁して頂戴。そのかわりKさんからきっと五千円貰って来るから」

といった。

「そうして頂戴」

友だちは芸能社へ電話をかけ、社長を呼び出して、加奈子が怒っていることを話し、ぜひもう五千円出して貰いたいといった。社長は電話口で「アハアハ」笑ったばかりで出すとも出さぬともいわなかった。二度目に電話をかけると「あとからそんなことといったって駄目だ。定価

がきまっているなら体へ正札をつけておくようにいってやりたまえ」とりつく島はなかった。板ばさみになった友だちは加奈子のところへあやまりに行って「あたしが弁償するから」と自分の金を五千円出した。

「あら、そう」

加奈子は貸してあった金を取るような顔をしてそれを受け取った。

加奈子が大金を貯めていることが友だち仲間に知れ渡ったについては、偶然の機会があった。或る時ごく親しい友だちの一人が彼女のアパートへ泊った。すると翌日の昼間、加奈子は急に虫歯が痛み出した。

「おお痛い。どうしたんだろう。×ちゃん、あたい歯医者へ行って来るからお留守番していてね」

加奈子は頬を押えながらそういって、セーターを着たままであわてて飛び出して行った。友だちは留守番をしていたが、加奈子はなかなか帰って来なかった。友だちはその時ふと妙なことを考えついた。彼女は平常加奈子が簿記をつけていることを知っていた。そういう時に行き合せると、加奈子はいそいでその大きな帳簿をかくすのが例だった。彼女たちの間では類のないことだから友だちはひどくそれを珍しく思っていた。「いったいあんな大きな帳簿に何を記

すんだろう」そういうかねがね抱いていた好奇心がいま不意に頭をもたげて来た。加奈子がその帳簿をしまっておく引き出しも知っていた。まったく悪気はなくその引き出しに手をかけた。加奈子はいつでも外出する時は、大切な物が入れてある場所には鍵をかけて出るのだが、今日は虫歯の痛みに慌ててそれを忘れたのは不覚であった。二冊の簿記帳はこうしてなんなく友だちの眼に触れてしまったのだった。出納簿の方は、その細かい記入と数字の素人ばなれのしたうまさに驚いただけであったが、もう一冊の銀行預金の資産状態の方は、友だちにとっても意外なものであった。この数年間の時々まとまった定期預金と、半期半期に生み出す利子の計算など明細を極めていたが、いちばん友だちを吃驚させ、双つの眼を極度にまん丸くさせ、口を開けっぱなして息もとまるほどにさせたのは、帳簿の最後にある資産現在額五百何十何万何千何百円という数字であった。友だちは暫く茫然としていたが、やがて気がついて帳簿を元通り引き出しの中に仕舞い、静かに引き出しを閉めると、客間の方の椅子へ戻って来て週刊雑誌を読んでいた。それから三十分ほどすると加奈子は歯科医から戻って来た。

二

加奈子はナイトクラブの勤めが飽きて来た。人間は金が出来ると、いろいろの考えが起って来るものだ。加奈子の場合もそれであった。足かけ四年間も勤めたナイトクラブの変化のない、そして将来の希望のもてないこの仕事に見切りをつけたくなった。世間からは華やかなように思われているここの光景が、彼女の眼には砂漠のように荒寥たるものに見えて来た。酒を飲んで、みだらな言葉をしゃべったり、露骨なダンスをしたりしている人々の姿が、骸骨のように生気がなく見えて来た。バンドの音楽は、徒らに狂躁を極めるだけで、人生の葬送曲のように味気ないものに聞えて来た。彼女が一滴の酒も飲めない冷静さが、その考えを手伝っていた。

彼女は時々、自分がどうしてこんな自堕落な女になってしまったかと思い返して見ることがあった。郷里から飛び出して来て、最初は知人の紹介で小さな証券会社の事務員になったが、一年も勤めないでやめて、銀座のキャバレーのダンサーになった。そうしてこの社会へ入ったのだが、その時はまだ処女であった。それまでにもボーイフレンドのようなものは二、三人あったけれども、一線をのり越すことは固く慎しんでいた。最初のキャバレーへ勤めて三月目くらいの時、懇意になって、時々お茶を飲んだり、軽い食事くらい交際ったりしていたバンドマンのトランペット吹きの男に誘われて、はじめてプロレスを見に行った。激しい狂暴なスポーツは、わけもなく彼女を興奮させた。興奮は思慮や分別を失わせた。競技場からの帰りに男に

誘われて食事だけのつもりで立ち寄った家で、彼女は苦もなく処女を奪われてしまった。けれどもその時は別に後悔の念は起らなかった。それのみか男に対して愛情を感じて来た。しかしその関係は三ヵ月しか続かなかった。しかもその間男は加奈子の稼いだ金を強盗のように掠奪したあげくに、ポイと紙屑のように捨てて、同じ店の別の女に移っていった。彼等の間では日常茶飯のことであったのだ。加奈子の方でも面当てに別のバンドマンと関係したが、それは男の顔が違うだけで、することは前と同じであった。加奈子はこんな馬鹿々々しい男関係をこれ限り打ち切って、異性の相手をお客の間にだけ求めるようになった。これとても恋愛は生れないけれども金を絞られるようなことはなく、反対に収入が多くなった。よほど悪い男にかからないかぎりは危険もなかった。こうして足掛け四年の月日が夢の間に経ってしまったのである。

商売に熱心でなくなった加奈子は以前のように売れなくなった。一と晩に二つも指名があれば上等で、時々お茶を挽くこともあった。

こうしていたら末はどうなるだろう――とおそまきながら考えることがあった。

「わたしってどうして恋愛が出来ないんだろう」

加奈子は朋輩に向かって時々そんなことをいうことがあった。

「あんたは理想が高すぎて、男選みをするからじゃない」

友だちの言葉には無論お世辞がまじっていた。

「そんなことないわよ。あたし自分がつまらない女だってこと、自分で一番よく知ってるのよ。ただ男の人が愛してくれたら、あたしの方でもいくらでも愛してやるんだけれど」

「あんたの方から先に愛さなきゃ駄目よ。男って、女に好かれてから、はじめて男の方でも惚れて来るのよ」

「そうかしら」

とにかく加奈子は、みんながそれ相当に恋愛をしているのを不思議に思って眺めた。自分にはそれがない。男は自分の肉体を求めて来るだけだ。そしてそれだけで満足している。そういう男に対して、精神的な愛情を湧かそうとしても出来なかろうではないか。加奈子は、自分が金で肉体を売ることに習慣づけられた生活をしている立場を忘れていた。愛情のある男に出会わないのは、自分が運が悪いからだという風に勝手に考えていた。

加奈子は二つの新しい目標を持ち始めた。一つはいい相手を見付けて結婚すること。一つは一千万円以上貯金が出来たら、それを持ってアメリカへ行くこと。結婚の方は相手さえあれば簡単である。アメリカへ行って何をしようという目当てがあるわけでもない。一千万円の資金でアメリカで商売を始められるものだかどうか、それも分らない。けれども日本で結婚相手が

ない場合には、アメリカへ渡って新しい運命に身を任せるということにも偉大な魅力があった。どちらにしても、この二つの目標について考え出すと、ナイトクラブの仕事など身がはいらなかった。ここで百年勤めたって結婚相手などある筈がない。単に金を得るだけの生活なら、そんなところで働かなくたって別に方法はある。加奈子は店を怠け出した。ここでは別にダンサーに固定給を出しているわけではないから、いくら怠けても平気だった。何百人というホステスがいることになっているけれども、それは籍があるだけで、実際に出勤しているのはせいぜいその半数に過ぎない。加奈子はクラブを休む時間や精力を、外人——主としてアメリカ人とのプライベートの交際に振り向けていた。それは賢明な策でもあった。外人間には彼女のような女性に対する要求が強くあった。そしてその間に自然に語学が上達するという益がある。

それでも店へも一日おきくらいに出て行った。或る晩、加奈子の古い友だちで、今ではダンサーをやめて新橋から芸者に出ている素子（もと）という女がお客と一緒に来ていた。べつに呼ばれたわけではなかったが、バアの中から素子を発見したのでそばへ行って、

「素子さん、しばらく」

と声をかけると「あら、加奈ちゃん」といって、白地のカスリのきものを着た素子はつれのお客の方を見て「わたしのお友だち吉沢加奈子さんですのよ。こちら山村先生」と紹介した。

「まあお掛けなさい」
と山村はいった。「すみません」加奈子は素子と並んで山村と向き合いの椅子に腰をかけた。山村はかなり古手の作家だが、時々こういうところへ現われるので加奈子の方では顔だけは知っていた。頭髪が半分白くなり、痩せてせいのひょろ高い作家は思ったより愛想がよかった。
「吉沢加奈子さんというんだね。君の噂は誰かから聞いたことがあったよ」
「あら、どんなことお聞きになったんでしょ」
「どんな話だったか忘れてしまったが――今日は新橋の歯医者で偶然素子さんと会ってね」
「あたくしの方ではいつも先生のお作を拝見しておりますのよ」
「加奈ちゃんは元から小説好きだものね」
「あたしほかに楽しみがないから小説ばかし読んでいるのよ」
「何かお飲みなさい」
加奈子はボーイを呼んでオレンジジュースを注文した。
「酒は飲まないの」
「あたくし、だめなんです」
加奈子は笑いながらいった。

「見かけによらないんだね」
「ほんとに、あたしって、あばずれに見られて損しちゃうわ。でも、こういうところじゃ、お酒が飲めなくちゃ駄目ね」
と加奈子は素子に向かっていった。素子は笑っていた。素子は終戦の翌年満州から引き揚げて来てすぐ銀座のキャバレーでダンサーになったのだからずいぶん古顔である。若く見えるけれどももう四十になるはずで、高校へ通っている男の子を郊外の方の親類へ預けてあって、日曜日には必ず息子のところへ行って泊って、月曜日の朝新橋の置屋へ帰って来る。芸者に転向してからもう二、三年経つ。
「一つ踊りましょうかね」
マンボが鳴り出すと山村は加奈子にそういって立った。
「おねがいします」
二人はテーブルの間を縫って踊り場へ出て行った。元来大衆作家だが近年恋愛物に転向した老作家は、我流だがマンボなども軽く踊った。
「先生お上手ねえ」
「上手なもんか。ただ古いだけだよ」

「一度先生のところへ伺いたいんですけれど」
「家は鎌倉だからだめだよ」
「東京にいらっしゃればホテルへお泊りになるんでしょう」
「時どきね」
その次ぎもマンボだったから二曲続けて踊ってテーブルへ帰った。加奈子は、山村と素子とがどんな関係であろうかということもちょっとは考えたが、そんなことは別に問題ではなかった。山村は自分が今まで交際ったことのある男たちとは全然ちがった感覚をもっているように思えた。山村なら、自分が暗中摸索して求めているものに何かヒントを与えてくれはしないかというような気持がした。十一時のショウが終ると、山村と素子は一緒に帰って行った。
或る日、ホテルに泊っている山村のところへ、加奈子から電話がかかって来た。
「先達てクラブでお目にかかった吉沢加奈子でございます。ぜひ先生にお目にかかって御相談したいことがあるんですけど、これから伺ってもよろしいでしょうか」
「かまいません、いらっしゃい」
三十分くらいたつと、加奈子は山村の部屋へ入って来た。黒い服で髪はアップにしている。べに色をした耳から真珠がさがっている。

「先生お邪魔じゃなかったでしょうか」
向き合いに肘掛椅子にかけてから加奈子はいった。
「別に邪魔なことはないが、相談って何んですか」
「あたし、あんなことといって、あとで後悔したんですのよ。先生にご相談なんて、厚顔しいですものね。なんとなくお目にかかってみたくなったんですのよ」
「それならそれで、別に差支えはないが」
と山村は笑い顔をしていった。とりとめのない話よりほかに話題はなかった。加奈子はこの老作家の生活に興味をもっていた。仕事をするのはどういう時間にするのかとか、東京のこのホテルへ来て仕事をするのかとか、だれでも訊きたがるようなことを訊いた。
「君のいる××アパートって、豪奢なアパートだそうだね」
「豪奢なんてことありませんけど、いろんな人がいるんですのよ。あたしの部屋なんか一番お粗末なんですけど、でも家賃が払えなくて困りますわ。三月も溜めると、経費共じゃ大変になりますから」
「しかしアパートの生活は自由で面白いでしょう」
「慣れっこになって、べつに面白いとも思いません。それよりも先生なんか、ホテルへお泊り

になるより、アパートに部屋をお取りになったほうがよろしいんじゃございません」
「どういう意味ですか」
「だってアパートならいつでもいらっしゃれるんですもの。でも先生がアパートへお住まいになったら、女性の方が沢山押し掛けてうるさいかしら」
それから暫くたってから加奈子は突然いった。
「先生、実はお願いがあるのよ」
「なんだい」
「あたし、昼間のお勤めをしたいの。どこかへお世話願えないでしょうか」
「昼間の勤めって、たとえばどんなとこ」
「出版社でも、商店でも、どこでもいいんです。あたしこれでも帳簿をつけることは出来るんです。以前銀行へ勤めたことがありますから」
「どうしてそんなことを考え出したんだね」
「どうしてって、あたしって、大体ああいうところに向かないんです。お酒は飲めないし、お愛想をいうことはへただし。それにああいう世界がふつふつ厭になりましたのよ。すべて虚偽でかためているんですもの。もっとまじめなお仕事をしたいと思うんです。先生なんかお顔が

広いから、何かあたしでも出来るようなこと、お世話願えたら有難いと思って」
「顔なんか広かないよ。出版社といったって、ほんの二、三社しか懇意なとこはありませんからね。そんなこといってるより、いい相手を見付けて結婚でもしたらどう」
「金輪(こんりん)ざいありっこなし。あたしには恋人さえ出来ないんだもの。生れつき冷血漢なのね」
「そんなことはあるまい」
広くカットした胸のところから見事な乳房が半分のぞかれているのを山村は意識しながらいった。この女が訪ねて来た真の目的がどこにあるのか彼にはよくわからなかった。
「堅気の就職なんかまぁ見込みなしだね。大きな社は試験採用だし、小さいところだって、君みたいな派手な女を傭うとこがある道理がないじゃないか」
「そうでしょうか」
加奈子はべつに失望したような顔もしなかった。事実そんなことはどうでもいいので、山村とこうして喋っていればそれで十分愉しかった。若い時から数知れぬ女遍歴をして来たと噂され、自分でもそれを書き散らしている老作家の、どこかにまだ新鮮な若さがひそんでいるような気がして、この人と恋愛をしたらどんなものだろうと空想したりした。
部屋の裏窓の厚い緑のカーテンは左右へ引きしぼられている。白いレースを透して、道を隔

てた向う側の九階のビルディングと相対している。そのビルの窓は全部燈火で輝いて、中で仕事をしている人の姿が動いている。空は夕焼けで紅く染まっている。この部屋はまだ燈火をつけないから、夕焼けのとけこんだ外の明るさが流れ込んで来ている。

「ずいぶん静かね、このお部屋は」

「裏側だからね。静かなことは深山幽谷と同じさ」

加奈子は椅子から立って窓際へ行った。

「向うのビルは何んの会社ですか」

「放送会社だよ」

「あら、宮城の方も見えるわね」

山村もそばへ来て並んで立っていた。ハイヒールの加奈子はかれこれ山村と同じくらいの高さがあった。山村の手がうしろから加奈子の右肩にかかった。そして引き寄せながら素早くキスした。加奈子は予期しなかったことだけれども、驚きはしなかった。一と言もいわずに行動に移る山村の積極的な態度がむしろ快くて、間もなく陶酔した気持になった。二つ並んでいるベッドの片方のピンクのカバーを山村は手荒くはね除けると、案外強い力で加奈子を突き倒すようにした。

「ちょっと待って」

加奈子は仰向きに寝たまま、最初に真珠のイヤリングを外して、ベッドとベッドの間の枕近くにある電話やベルの台の上に、手を伸ばしてそれをおいた。それから半身を起して背なかのチャックを外して服を脱ぎかけた。靴はベッドの木の角で蹴られて離ればなれに遠く飛んでいった。高く盛り上った乳房が牝牛の乳房のように激しく揺れている。再び山村が挑みかかろうとすると加奈子はまた、

「ちょっと待って」

といって、アップに結い上げた髪のピンを手さぐりで残らず抜き取った。背中までとどく髪の毛を両手で掻きおろしてしまうと、はじめて牝豹のような素速さでしなやかな両腕を男の首に巻きつけた。

三

山村は月に二、三回ずつ東京へ出て来てホテルへ泊った。むろん仕事の用事も兼ねてであったが、彼の場合は遊びの方がおもな目的であった。彼は青年時代から女道楽にうき身をやつし

て来たが、恋愛の泉はいつまでたっても涸れないのである。涸れたように見える時は、何かそこにつまっているからであって、それを取り除けば再びこんこんと湧き出すのだ。恋愛は火のようなものだから、燃え尽せば冷却するはずである。しらじらとした灰の中からは愛情や性慾は起らない。新しい恋愛が燃え上る都度に、人間は甦るのである。そして人間は幾度び恋愛をしても、純粋さが失われることはなく、かえって経験は、恋愛を浄化したり、道徳的にするものだ。

加奈子は山村のホテルへ泊ったり、山村の方から加奈子のアパートへ遊びに来たりした。しかしアパートへはのべつ電話が掛って来るし、時々不意の訪問者があったりするので、山村は決してそこへ泊るようなことはなかった。外人から電話が掛って来ることも珍しくなかった。加奈子はかなり上手な流暢な英語で応答していた。冗談をいい合って電話口で笑ったりしていた。

「パンアメリカンの本社の総支配人があす日本へ来るんですって。わたしに羽田へ行って花束を上げてくれって、頼まれちゃったのよ」

「そりゃ面白いじゃないか」

「ところが、飛行機が午前九時に着くから、八時半までに来てくれというのよ。大変な仕事だ

わ」

加奈子がアメリカへ行きたがっていることは山村も知っていた。彼女が相当多額の貯金を持っているということは、朋輩間では知れ渡っていたから、自然山村の耳にも入っていた。それについて悪口めいたゴシップも伝わっているが、山村は問題にしなかった。むしろ、一つの目的に向かって熱中し、それがためにはすべてを犠牲にするといった加奈子の生き方を興味ある性格として眺めていた。

「あたしがアメリカへ行って成功したら、先生を呼ぶわね」

そんな空想をしてみると加奈子は愉快だった。山村は黙っていても毎月一定額の金を彼女に呉れた。彼がアパートへ来た時、丁度ほかの男と鉢合せをしたり、誘いの電話が掛って来たりしても、なんにも気にかける様子はなかった。今日は午後六時にアメリカ人とデートして、彼の友達の誕生日に招ばれて行くことになっているなどといっても、山村は「それはいい、行って来たまえ」といって自分はさっさと帰ってしまうのだった。

「先生って、ちっとも嫉妬しないのね」

「そんなことがあるもんか。僕はこれですごく嫉妬深い男なんだ」

「あたしに対してだけ嫉妬しないのね。愛情がないのかしら」

「愛情と嫉妬とは別物だよ。君の立場は、嫉妬するに値いしないから、嫉妬しないんだよ」
「失礼しちゃうわね。愛情があっても、嫉妬しないことがあるものかしら」
「そりゃあ、あるとも」
山村の心理は加奈子にはよく解らなかった。けれども誠意のない男だとは思えなかった。このままずっと山村が世話をしてくれるならそれでもいいと思った。
「わたしにほんとうに好きな人が出来たら、先生にご相談するから、相談にのってね」
「ひとに相談して恋愛するなんてばかなことがあるもんか。いったい君は、恋愛をして結婚することが理想なのか、それともアメリカへ行くことが目的なのか、どっちが重大なんだ」
「どっちも魅力があって、迷っちゃうのよ。わたしって、どうしてこう平凡なんだろう」
夏の終り頃から山村は健康を害ねたらしかった。胃腸の具合が悪いとたえずいっていた。それでも彼は習慣で、寝酒にブランデーをかなりの量飲むのである。寝酒ばかりでなくナイトクラブへ来た時などにも飲んだ。食事も健康体と同じようにとっている。顔色を見たところでは別に病気があるらしくも見えないが、本人はすっかり病気を意識している。
「二、三の病院で診て貰ったが、レントゲンではさしたる徴候も見えないというんだ。しかし医者には分らなくても、病気はたしかにあるもんだね」

「神経じゃないかしら」
「神経がおこるようなら、そこに病気がある証拠だよ」
と山村は独断的にいった。「俺は医学は信じるけれども、医術を信じないんだ」と彼は常にいっていた。信用するに値いする手腕を持った医師がいないという意味らしかった。それはとにかくとして、胃が悪くなってから俄然精力が衰退してしまった。そうなると加奈子の魅力的な肉体も、水に浸った炭俵と同じように、山村を興奮させることはできなかった。山村の心の底には、胃癌ではないかという懸念が潜んでいた。この人知をもっても、意力をもっても抵抗することのできない強い力を想像してみることは、山村にとっては新しい発見であった。
或る晩加奈子が店へ行っていると、十時頃に指名の客があった。テーブルへ行って見ると、知らない顔の三人連れである。
「いらっしゃいませ」
席につくと、
「君ですか、加奈子さんは」
二十七、八歳くらいの、丸顔で、人懐っこそうな男がにこにこしながらきいた。服もぱりっとしているし、一見してほかの二人は取巻きであることがわかる。

「はい、吉沢加奈子でございます。どうしてわたしをごぞんじでしょう」
三人は顔を見合って声を立てて笑った。
「いや、知ってるといったって名前だけですよ」
「どこでお聞きになったんですの」
「ぼくたち、田舎者でね、名古屋なんだ。カサブランカのママさんからあんたのこと聞いて来たんだよ」
「あら、蘭子さんご存じなんですか」
「地元だもの」
三人は又声を立てて笑った。カサブランカというのはやはりここのダンサーだった蘭子という女が、郷里の名古屋へ帰って広小路のビルの部屋を借りて開いたバアである。蘭子がここにいる時分は同じグループだったので最も親しくした一人であった。
「蘭子さんからお聞きでしたら、あたしの悪い評判たいがいご存じですわね」
「とんでもない。あのママさんはとても君をほめていたよ」
「本当なら、蘭子さんにお礼の手紙出しますわ。あの、失礼ですけど、お名刺頂けないでしょうか」

「はい、はい」
と相手は直ぐに名刺をくれた。日本××製陶株式会社取締役、販売部長という肩書があって、名前は加藤民雄、名古屋の住所と電話番号がはいっている。
「瀬戸物屋ですよ」
連れの二人の名刺には、同じ会社の東京支店の肩書があった。
「君の仲良しの人を二、三人呼んで下さい」
と加藤はいった。加奈子はボーイを呼んで、悠子と範子という二人をテーブルへ呼んだ。加藤は瀬戸の生れだというが、名古屋訛りはほとんどなく、態度も洗練されていた。暫くたってから加藤は加奈子と踊った。
「加藤さんは東京へお出での時はどこへお泊りなんですの」
「神田の××館という宿屋です。われわれの泊る所は商人宿で安いから」
「あら、そんなことございませんでしょう」
「支店長は僕の従兄だが、やっぱり時々出て来てハッパを掛けないとね」
踊りながらそんな話をした。そのあとでテーブルに残っている支店の社員はこういって話した。

「加藤家といえば瀬戸の旧家でね。日本××製陶会社は親父さんが社長だけれども、実際は御曹子のあの人が切り廻しているんだよ。陶器会社としたら二流だろうが、戦後に輸出を早く始めた会社だから、発展性はあるだろうね。来年になると民雄さんがアメリカへ行くそうだよ、販路拡張のために」

「アメリカへいらっしゃるんですか」

加奈子は思わず声をはずませていった。

二、三日経つと加藤は違った連れでやって来た。二度目も加奈子を指名してくれた。

三度目には珍しく遅く一人でやって来た。すると十二時過ぎに加藤に電話が掛って来て、間もなく一人の男が訪ねて来た。その男はボーイに案内されてテーブルへ来たが、加藤が注文したハイボールを手に取りもせずに何かヒソヒソと加藤にささやいていた。加藤は「ふん、ふん」と受け答えをしている。話が済むと、

「それじゃ若大将、一つお願い申しますよ」

と男はいった。

「よし、承知した。一時間くらいしたら行くよ」

「じゃ、これで失礼します」

男は直ぐに立ちかけた。

「君、それを飲んで行ってくれよ」

「頂きます」

男は再び椅子に腰をおろすと、ハイボールをぐっと二た息くらいに飲んだ。

「どうも御馳走さまでした」

と加奈子の方へも軽く会釈をして帰ってしまった。

「これからどちらかへお出掛けなんですか」

「うん。じつは家の親父の代から目を掛けてやっている浅草の顔役があるんだが、その男が今夜ちょっと派手に場を開くというので、賑やかしに来てくれと頼んで来たんだよ。僕はあんまり興味はないが、義理で一寸顔を出さなくっちゃならないと思うんだ」

「あなたなぞでも、そういう方にお交際があるんですの」

「交際というほどじゃないが、会社をやってると総会なんぞの時にそういう連中を使うことがあるからね」

「加藤さん、あたしも連れてって下さらない」

「きみもあんなことが好きかい」

「別段好きってこともないけれど、以前お友だちに凝ってる人があって、時々連れてって貰ったことがあるのよ。久しく行ったことがないけれど、加藤さんとご一緒なら行って見たいわ」
加藤は笑いながら、
「それなら一緒に行ってもいいが、君、元手は多少あるかい」
「たくさんは持っていませんけれど、二、三万くらいならありますわ」
「たくさん持っていないほうがいいよ。それくらいならよかろう」
「じゃ、あたし服を着替えて来ます。すぐ来ますわ」
加奈子は支度部屋へ行った。支度部屋はガランとして、おばさんがひとり煙草を吸っていた。加奈子は手早くドレスを脱いで、通いのスーツに着替え始めた。
「ナカちゃん、もうお帰りかい」
「ええ」
「お前さんここんところ一寸精勤だね。いいお客さんがついたの」
「それほどでもないけど」
「先生は暫くお見えにならないようだね」
「胃が悪いのよ。大学で診て貰ったら胃潰瘍だっていわれたとかで、お宅で養生していらっしゃるんだわ」

「胃潰瘍だったら、漢方薬でとてもよく効く薬をわたしが知ってるんだが。なんだったらナカちゃんから先生に教えて上げるといいね」
加奈子は今夜は忙しいからと断わって、二階の支度部屋からおりてテーブルへ行くと、加藤はもう勘定を済ませて待っていた。玄関から一緒に外へ出ると加藤の車が待っていた。
深夜の街を自動車は二十分ほど走ると、だだっ広い大通りから人通りのない横丁へ入って、それから又幾曲りしたところで停った。往来の端の物陰のようなところに二十米おきくらいに人が立っていたが、加藤の車が停ると一人が側へ来て何か小声でいいながら先に立って案内した。相当な邸らしい構えをした家の表門から入らないで狭い路地の方についている潜り門を入ると、植込みのある庭があって、離室(はなれ)らしい建物があった。格子戸を開けて入るとそこにも二、三人若い者がいて、加藤と加奈子が脱いだ靴を持って「お預りしておきますから」といった。廊下を二た曲りもしたところに、明るい八畳と六畳の部屋があって、かれこれ三十人くらいの人がいる様子であった。床の間のある八畳の方に、縦(たて)に長い白布を敷いて、その両側に人々は坐っている。
加藤たちが入って行くと、ちらと見た人もあるが、ほとんどすべての人は場の勝負に心を奪

われている。白布の中央に線があって、そのあとと先に花札を配る賭博である。五十年配のでっぷりしたあから顔の男はどうやら胴元らしく、ゆったりとしたのどかな顔をしながら、加藤を見付けると黙って会釈をした。加藤は次の間の方で様子を眺めていたが、暫くすると胴元と反対側の方に席を見付けて坐った。その隣の人が席を譲ってくれたので加奈子も坐り込んだ。ここでは一万円が単位で、千円札を十枚ずつ一束にしてあった。しかし五千円札も一万円札も勿論通用している。大抵の人が一万円束を二つくらいはった。呼吸を計ってその上へ更に二つ三つ重ねて行く人もある。あとさきの札を同時に開ける。瞬間に勝負がついて、紙幣の束があっちこっちへ投げられる。加藤は二、三回黙って見ていたあとで、五万円の束を抛り出した。すると忽ちそれが倍になって戻って来た。一時間くらい経つと加藤の膝の前には札束が山と積まれた。加奈子は一万円ずつはっていたが、三度に二度は外れたので、またたく間に元をすってしまった。それに気が付くと加藤は黙って五万円束を二つ加奈子の膝の前へ抛り投げてよこした。それからは加奈子も加藤にツイてはっていたが、いつでも一万円ずつはるので、格別にふえもしなければ減りもしなかった。加藤のはり方は緩急自在で、その鮮やかなことは胸がすくようだった。二時間近く勝負をして、もう汐時というときに加藤は、胴元の傍へ行って、

「親分、あすの朝早いので、失礼します」

と低く声をかけると、胴元は「さあ、どうぞどうぞ」という風にうなずいて見せた。

出口の方へ来ると、若い者が靴を出してくれた。幾らずつか分らないが加藤は彼らに握らせていた。表へ出て、往来で張り番をしている者にも同じようにしていた。まだ夜明けまではだいぶ間がある。しかし暁を迎えようとしている街は凍ったように静まっている。車はスピードを出して走った。加奈子の心からはまだ賭場の興奮がさめ切らなかった。加藤に向かって何か話しかけたかったけれども、適当の言葉が出て来なかった。時々車体の動揺で身体が触れ合うのが快かった。

「とにかくアパートまで送ろうね」

加藤はぽつんといった。

「すみません」

そこからアパートまでは三十分近くかかった。まだ空は暗かった。

「ちょっとお寄りになりません。お茶でもいれますから」

アパートの前で車が停った時加奈子はいった。加藤はどうしようかという風を見せた時加奈子は又「どうぞ」と誘ったので、加藤も紙幣のはいった手提カバンを持って続いて降りた。

四階の自分の部屋へ入ると、加奈子はほッと緊張がほぐれた気持がした。椅子をすすめてか

ら加奈子はふと気がついて、
「お借りした分、お返ししますわ」
といってハンドバッグから十万円出してテーブルの上においた。
「冗談じゃない。そんなものはあの場かぎりのことだ」
「そう――」
その金はそのままにしておいて、加奈子はガスで湯を沸し始めた。リプトンをいれ、サントリーの丸瓶を出して、
「少し入れましょうか」
「そうですな」
小さいテーブルで向き合って茶を飲んだ。加藤は部屋の中を見廻して、
「このアパートはなかなかいい設備だね」
「そうでもありませんのよ。もう二年もいるから飽き飽きしてしまいましたわ。アパートの独り住居って、とても味気ないんですもの」
「僕なんか、こんなところに住めたら自由でいいだろうな、と思うんだが」
「そんなら、今日からでも越していらっしゃいません。わたしメードになって何んでもいたし

ますから」
「そんなことになったら、会社の奴らが大騒ぎをするよ」
加藤は笑っていったが、満更でもない顔つきであった。加奈子はとうから加藤に魂を奪われたようになっていた。もしこの男がこのまま帰ってしまうようなことがあれば、自分の人生もうお終いだとまで感じた。
加奈子は別のグラスにウイスキーをついですすめた。さすがに加藤も徹夜で賭博に耽ったあとで、二、三杯のウイスキーで真っ赤になった。
「すこし、横におなりになったら」
こういう時、加奈子の媚びは全身にあらわれ、甘い声は魔薬のように男を酔わせる力がある。加奈子はうしろへ行って加藤の上着を脱がせてやった。シャツだけになった男がベッドへもぐり込んだのを見届けてから、加奈子はドアに鍵をかけて来た。

四

加藤は神田の宿屋を引き払ったわけではなかったが、加奈子のアパートに泊っていることが

多くなった。彼は時々名古屋へ帰ったり、大阪まで出張したりした。男が多忙であることは、自分が多忙であるかのように加奈子には頼もしく思われた。加藤は独身だといった。もっとも四、五年も前に一度結婚したことがあるが、両親と折り合いが悪く、事実妻の性格にも欠点があったので離縁し、それ以来独身だというのだった。

「いよいよ来年正月になったらアメリカへ行くことにきまったよ。政府でも陶器の輸出を奨励しているから万事うまく行くことになった」

名古屋から帰って来ると加藤はそういった。

「まあ素敵だわねえ」

「君も連れて行くからそのつもりでいるがいいぜ」

「ほんと」加奈子は飛び上った。「わたしにも旅券がおりるかしら」

「そんなこと問題じゃない。僕の秘書ということにすれば、大威張りで行かれるんだ」

「まあ嬉しい。あたしの多年の念願が叶うのよ」

加奈子は加藤の首に飛び付いて、顔中にキスした。そのあとも興奮がやまなくて、毎日浮かれ通しでいた。

或る日加藤は鞄から現金を出して、

「店と別口の金なんだが、持っていると使っちまうから、銀行へ入れといてくれないか」

といった。三十万円ばかりの金だった。

「はい、はい」

その日は土曜日ではなかったけれども、加奈子はすぐその金を銀行へ持っていって、自分の普通預金の中へ繰り入れておいた。

加奈子はこの大きな喜びを自分ひとりで喜んでいるに堪えられなくなった。もっとも郷里の家へは、いざとなれば用事もあるので、前もって知らせておく必要があった。彼女は兄のところへ手紙で知らせてやった。詳しいことは書かずに、ただアメリカ行きが実現しそうだから喜んで貰いたいといってやった。

もう店へなんか用事はないけれども、遊び半分にフラリと出て行って、支度部屋で、

「あたし、お正月になるとアメリカへ行くことになったのよ」

と吹聴して、朋輩たちを羨ましがらせた。

或る晩、偶然そこで山村と行き合せた。

「先生もうおからだは快くなったの」

「すっかり快くなったわけでもないが、暫く振りで今夜来て見たんだ」

山村のそばには、加奈子の知らない新米のダンサーがいた。
「ホテルに泊っていらっしゃるんですか」
「そうだよ」
「電話もかけて下さらないでヒドイわ」
「でも近頃君は忙しそうだから、知らせなかったんだ」
と山村はいった。加奈子は自分の生活に触れることはまずいので、その話はそれっきりにしたが、やはりアメリカ行きのことを山村に話さずにはいられなかった。
「どういうコネで行くんだね」
「コネというほどじゃないけど、ちょっとした手蔓が出来ましたのよ」
「それはまあよかった。長い間の君の理想が実現するわけだからな。成功を祈るよ」
「先生、ほんとに有難う」
加奈子は心から山村に感謝したいような気持になった。山村こそは自分を理解してくれる唯一の人であるように思った。
三日ほど前から加藤はアパートへ泊りきりに泊っていた。多忙な加藤がその日は風邪らしいといって、朝の食事をしたあとで又ベッドへ入ってしまった。

「あんた今日外出しないの」
「今日一日だけ休養だ」
と加藤はベッドの中から答えた。
「それじゃ、あたし髪結いさんへ行って来るから。お留守番していてね」
「うん」
加奈子は手早く外出着に着かえ、もう相当寒いのでオーバーをきて外へ出た。行きつけの美容院は銀座である。十一時頃行ったのだが、少し混んでいて一時頃までかかった。美容院を出ると加奈子は空腹を感じたが、加藤が待っていることを考えると、ひとりでレストランなどで食べるよりアパートへ帰って加藤と一緒に何か取って食べる方がいいと思ったので、タクシーで直ぐ帰った。
部屋へ入ると加藤はいなかった。外出したにしても鍵も掛けずに出るとはおかしいと思った。ふと気がつくと、いつもおいてある加藤の小型トランクと手提カバンがあるべきところになかった。洋服タンスを開けて見たが、加藤の服は着て行ってしまったのだからむろんある筈はなかった。灰皿の中にピースの吸いがらが二、三本転がっているほかは、男の名残も匂いもなかった。一大事が起る時の予感のような不安が暴風のように加奈子の頭を襲った。加奈子は慌て

て箪笥の引き出しをあけて、銀行の預金帳をしまってあるところを改めると、定期預金証も、普通預金の通帳も消えてなくなっていた。同じ場所にしまっておいた実印代用の認印もなかった。加奈子はいつでも外出する時には大切な物を入れておく場所には鍵を掛けるし、印形(いんぎょう)などはハンドバッグへ入れて持って出る習慣だったが、今朝は加藤がいると思うので、それでなくても最近は心もフワフワしたようになっていたので、そんなことも忘れ果てて飛び出して行ったのだった。半狂乱になった加奈子は宝石箱の蓋を開けて見ると、ダイヤもサファイアも真珠も翡翠(ひすい)も、苦心して買い溜めた指輪や耳飾は全部煙のように消えてしまっていた。

「おお――どうしよう――」

とっさに、銀行へ電話を掛けなくてはいけないと思った。ダイアルを廻す手がガタガタ慄えた。銀行はすぐ出た。

「モシモシ、吉沢加奈子でございます。わたしの定期預金と普通預金に異状はないかどうかお尋ねいたします」

電話の聞き手が掛りの男と変った。

「吉沢さんでいらっしゃいますか、午前中に、あなたさまの代理の方がお見えになりまして、都合で預金を全部引き出すというお話で、定期も普通預金も全部お引き出しになりました」

掛り員はそういってから、帳簿を見ながら計算をしたらしく、

「両方合せて、総額七百六十三万八千三百五十円でございました」

「そ、それは泥棒です、わたしの通帳を盗んだんです」

「えッ！　盗まれたんですって――」

加奈子は直ぐ飛び出して××銀行××支店へ行った。銀行でも大騒ぎをしていたので、加奈子が行くと支店長以下出て来た。掛りの話によると、金を引き出しに来た男は加藤ではないらしく、別の人間らしかった。銀行では代理のことだから一応加奈子に電話をして見たが不在であるし、預り証や本人の印形に間違いはないので利子も精算して渡したということだった。加奈子は銀行の応接室で泣き崩れてしまった。

警察の調べによると、日本××製陶株式会社などという会社は、名古屋にも東京にもないことがわかった。加藤民雄という名もおそらく偽名だろうといった。すべてが架空の名称で、素姓の分らない男の実体だけが加奈子の眼にだけ残されていた。しかし加藤という苗字は事実瀬戸付近には沢山あるし、民雄という名も瀬戸の名工民吉の一字を取ったところから見ると、多少あの辺の事情に通じたものであろう。

「手口から見るとかなりあくどい野郎らしいな」と刑事部長はいって、直ぐに捜査の手配をし

た。

事件が起ってから三日目に、加奈子は莫大量の睡眠薬を呑んで自殺をはかった。それが発見されて医師が来た時はすでに絶命していた。遺書が二、三通あったが、その一通は山村に宛てたものだった。

（先生、虹はついに消えました　加奈子）

残光

一

清美は、自分の人生が崩れてしまったことをとおから知っていた。人生というものは、いろんな不意の出来事や、偶然によって、いとなまれ、進行しているように見えるけれども、そのじつ、大体正確な針路を辿るものである。ただそれは、人が何か目標を持って生活している場合のことである。清美も、二、三年前まではそれがあった。例えば恋愛に対する情熱、結婚へのあこがれ——もっとずっと若かった時分には、クリスチャンとして熱心に教会へ通ったこともある。それが単に少女の感傷に過ぎなかったものだとは思えない。自分の精神の中にはたしかに信仰的なものが燃えていた。そのあとで、大阪で小学校の教員を二年ばかり勤めた時には、心から、この清潔で意義のある職業のために自分の生涯を捧げても悔いないような気もちになった。けれどもそれは、はじめての恋愛と、党員にまではならなかったが、左翼グループに入ったことから、教壇から追われてしまった。

大阪で暮らした間だけでも、実にいろんなことにぶつかったような気がする。あの時分は、何をしていても、境遇や思想がどう変化しようとも、自分の眼の前には、いつでも理想の星のようなものが輝いていた。実際あの頃は生き甲斐があったと思う。人生はなんでも育ててくれる沃(ゆた)かな土であった。

アパートの五階の窓から、鼠色に暮れかかった町が見える。軽薄と虚偽の象徴であるネオンサインもまだ光り始めない。この大都会が墓場のように見えるひと時である。

電話がジリジリ鳴った。ジョージからだ。ジョージはハワイの二世だが日本語はほとんど出来ない。清美は神戸のミッションスクールの出で、東京へ来てからも、現在の職場では外人の客が多いから英語はまず不自由なく話せる。

「何をしているんだ」

「まだ起きたばかしよ。朝ご飯もたべていないわ」

ジョージは、一週間ばかり関西へ旅行していたが今朝帰ったと云った。

「少し話がある。一時間ばかりしたら行くよ」

「そう――待ってるわ」

電話を切った。それから清美は風呂の湯を出し、長い髪を巻き上げて丁寧にピンでとめて入

った。四角い小型の浴槽は彼女を入れると一杯になった。丈は五尺三寸五分という日本人としては理想型で、腕も腿も肉付きがいい。大きな乳房は胸に深い谷間を作っている。浴槽のふちに頭をもたせかけて眼をつぶっていると、ゆうべポーカーで一万円負けたことが自然に思い出された。一緒に行った、やはりこのアパートに住んでいるユリも二万円ばかり負けてしまった。銀座のバアの傭われマダムをしている深水タカという中年の女が、そこの店のお客だという男を二人と、女給を二人連れてナイトクラブへ遊びに来て、その帰りに、いまからわたしの家へ遊びに行かないかと誘われて、青山の深水の家へ行って皆でポーカーをやったのだった。二人の男は愛知県の肥料の会社か何かの社員で毎月東京へ出張して来るとのことで、地味な服にヤボなネクタイをして、いかにも物堅そうに見えたが、結局その二人に場を全部浚われてしまった。

「ねえ清美さん、あの二人、ことによると玄人だかも知れないよ」

帰りのタクシーの中でユリが云った。

「そうネ、いかにも素人々々しているのが曲(くせ)ものね」

「きまってるよ。深水のママだってグルだかも知れないよ、チェッ」

本職の賭場へまで出入りする清美はポーカーで一万円ばかり負けたって何んとも思やしない

が、今夜クラブへ洋服屋が月賦を取りに来るのを払ってやると約束してあることを思い出すと、一寸困ったと思ったが、すぐ忘れてしまった。その月賦だってどれだけ溜っているか知らない。

バスから出ると、バスタオルを胸から巻いたまま、電話で食堂へコーヒーとライスカレーを注文した。通いの女中がいたけれど、もう先月から来なくなった。給金を払わなかったからである。部屋の一隅にキチンはあるが、自分で食物をこしらえる興味はなかった。かりに興味があるとしても、肉も、卵も、バタも、パンも、何も材料がない。電気冷蔵庫も先月売り飛ばしてしまった。

部屋の中央にダブルベッドがある。その裾のところにナイロンを掛けたテーブルがある。清美は部屋の入口のところのスイッチをひねって天井の電燈をつけた。それからカーテンを閉め、脱ぎすてたパジャマを又着て、煙草を吸いながら朝の新聞をひろげて読んでいると、食堂のボーイが外から声をかけながらノックした。清美はキチンの小抽斗(ひきだし)から五十円玉をつまみ出し、ドアを開けて、

「ごくろうさま」

と云って、ライスカレーとコーヒーの載った盆を受け取りながら、五十円玉をボーイの手に握らせた。

「すみません」

ボーイは低くつぶやくように云って立ち去った。食堂の払いも先月から溜っていた。

コーヒーを飲みながらあまり旨くないライスカレーを食べた。その時、アドルムがなくなっていることを思い出した。ゆうべ明け方寝る時残っていた二、三錠を呑んでしまった。清美はいくら酒を飲んでいてもアドルムなしでは眠れないのだ。

清美は慌てて取りつけの薬屋へ電話をかけた。

「モシモシ、××アパートの佐藤です。大急ぎでアドルムを三つ届けて頂戴」

アドルムは「劇」だから、名前を書いて認め印を捺さないと売ってくれない店が多いが、この薬屋はこのアパートへ移って来た時からの馴染だからそんなことなしで云っただけ届けてくれる。ところが電話へ出た薬屋の主人が何か口籠ったような返事をしていた。

「届けて下さらないんですか」

「そういうわけじゃないんですが……」

「じゃ、お頼みしないわよ」

清美は癇癪を起してガチャンと電話を切ってしまった。毎月のようにビタミン剤だのホルモン剤だの、クリームだの、いろんな物を取り寄せているから薬屋だって馬鹿にできない勘定に

上るが、清美はもう三月も前から薬屋へ一度も払っていなかった。
――今夜忘れないようにアドルムを買っておかなくっちゃ。
人生の諸問題よりもそれが一番重大なことであるかのように、清美は自分の心にいいきかせた。

二

ジョージが入って来た。その時清美はパジャマの上に古びたふだん着のキモノを着て細帯をしめていた。顔も頭もバスから上ったままだった。ジョージは立ったまま清美を抱いてキスした。テーブルへ来ると彼はすぐシガレットに火をつけて吸いながら英語で話しかけた。ジョージだってもう一年以上日本にいるんだから多少日本語も喋れる筈だが、清美と話す時は英語ばかり使うのだ。事実ジョージの日本語より清美の英語の方が数倍上手だった。
「景気はどうだい」
「相変らずよ」
「相変らずって――いい方か、悪い方か?」

「よかったり悪かったりよ。それよりあんた、大阪へ行って商売うまくいった」
ジョージはしかめっ面して両手をあげて肩をすくめるようにして「ッ、ッ、ッ」と舌を鳴らした。彼の語るところによると、仲間の貿易商二、三人と大阪へ行って、アメリカ向けの輸出品購入の運動をしたが、日本人のブローカーがインチキのところへもって来て、製品が粗悪で到底輸出の可能性がないことが分ったので、仲間一同旅費損をして東京へ帰って来たと云った。
ジョージの仲間は六、七人あった。皆ハワイの二世だが、日本語のよく出来る者もあった。一年くらい前から彼等はナイトクラブ・王冠へよく遊びに来たが、当初の頃はずいぶん景気もよかった。若い二世の貿易商としてホステス達の間に人気があった。当時ジョージは皆目日本語ができないところから、英語の達者な清美と特別親しくなったのだが、二人の関係は急テンポに進んで、清美は自分と同い年くらいのこの青年を心から愛した時期もあった。
しかしだんだん深くつきあうに及んで、ジョージも彼の仲間もあまり質のよくない二世たちであることが次第に分って来た。といって彼等がどんなことをしているのだかそれは判然しなかった。貿易商とはいってるがどういう程度のことだか分らなかった。彼等は京橋の昭和通りに近い古いビルの一室を共同の事務所にしていた。清美はジョージに連れられて一度そこへ行ったことがあった。商品の見本一つない殺風景な部屋で、神戸育ちの清美は、貿易商の事務所

なんてこんなものでないことを知っていた。
ジョージは二本目の煙草を吸いかけながら云った。
「キヨミ、五万円ばかり貸さないか」
「なに寝ぼけているのよ。そんな金があったら苦労しないわ」
「ほんとにないのか」
「さかさにふるったってないわよ。ゆうべ、いい鴨になって、ポーカーで一万円取られて、目下千円の金もないのよ」
「まだバクチをやるのか」
「だってあんたが初めに教えたじゃないか」
「それはそうだが、女が行けば負けるにきまっている。もっとも、お前のからだは鶏が卵を生むように金を生むから、バクチで負けたって構わないが」
「馬鹿にしないでよ」
その時ノックする者があるから出て見ると、薬屋の小僧がアドルムを届けて来たのだった。
清美はほッと安心した。小僧は請求書を差し出しながら、
「これを頂いて来るようにって——」

「月末に来てね」
清美は小僧にやさしい笑顔を見せてドアを閉めた。
ジョージは清美が戻って来る姿を見ていたが、いきなり立っていって抱きしめてベッドの方へ連れて行こうとした。
「ちょっと待って」
清美は洋服たんすの中にあるハンドバッグへアドルムをていねいに仕舞い込んだ。それからドアに鍵を掛けて来ると、壁際の台の側に立って頭髪のピンを手さぐりで一本残らず抜いて台の上においた。あらい息を吐いているジョージの方を見向きもせずに、キモノを脱ぎ棄てると脱兎の如くベッドの上へ飛び上った。

三

ナイトクラブ・王冠には二百人からのホステスがいることになっているが、実際に出勤している女の数は毎晩大抵百五十人前後だ。して見ると三日か四日に一と晩休む勘定になるが、それは平均したらそうなるというはなしで、売れても売れなくても毎晩出て来る女もあれば、籍

はあるがめったに出て来ない女もあるからだ。支配人以下ボーイやコック、バアテンなど従業員が六、七十人いる。ダンサーやバンドマンは会社の従業員の名札の中には入っていない。それと毎晩二組出るショウの芸人まで入れると、少なくとも三百人以上の人間がここで働いていて、戦後の東京独特の、世界にもあまり類型のない、歓楽の雰囲気を醸し出しているのである。

清美とユリが一つの車でクラブへ着いたのは九時少し前だった。もうホールには客がバラバラ入っていた。客席のうしろの壁際の通路から楽屋の方へ行く途中に中華料理と西洋料理の調理場があって、十数人のコックが忙しそうに働き、ジュウジュウと揚げ物の高い音をさせている。廊下で逢う人ごとに「お早うございます」と劇場と同じような挨拶をする。いちばん奥のどん詰りのところから幅の狭い階段を上って行くとダンサーの支度部屋とバンドの控室がある。ホステスの世話をするお仲さんという五十位の女が電話を前にして一段高い畳敷きのところに坐っている。

「小母さん、お早うございます」

「お早うございます。清美ちゃん、つい今し方山川さんから電話でしたよ。来たら直ぐここへ電話をしてくれって」

「あらそう」

清美は電話の側へ行って、小母さんがメモしてある番号へかけ山川を呼び出して貰った。料亭らしかった。

「いま出て来たところよ」

「十時頃までにそっちへ行くよ。連れが一人あるんだ」

「あらそう、お待ちしています」

山川というのは羽振りのいい証券会社の社員だ。ダンサー達は背中合せになった鏡の前へ腰かけてメーキャップしている。顔の出来た女は衣裳箱を鍵であけてホール用の服に着替えてサッサと階下へ降りて行く。ユリが、

「山川さんが来るんだって？」

「十時頃来るって」

「来たら呼んでね」

「もちよ」

その時反対側の鏡の方で喧嘩が始まった。

「あんたのお客って、札でもぶらさげてあるの。あたしは呼ばれたから行ったんじゃないか」

「そんなにお客がほしかったら呉れてあげるけどね、あんまり当てつけがましいことは止しと

くれと云ってるだけよ」
「ふふんだ、人からお客を貰うほどもうろくはしないわよ。向うがあんたよりあたしを好きだから呼ぶのがどうしたのさ」
「まあ、うぬぼれと瘡っかきとはよく云った。まるで横丁のメス犬みたいね」
「なんだって——」
小母さんが飛び下りて来た。
「二人ともお止しなさいよ。大将にいいつけるよ」
それであたりはシンとしてしまった。一人が靴音あらく降りて行くと、もう一人の方も少しおくれて出ていった。十五、六人いる女たちはそしらぬ顔をして自分の支度をしている。他人のことに興味がないからではない。誰でも同じような経験を持っているからである。商人が客を争奪することで熱中するのと、ここの女たちの場合とどうして変りがあろうか。
清美が支度をして、入口の方のバアの溜り場へ行っていると、十時かっきりにボーイが呼びに来た。
「山川さんです。テーブルは57番です」
清美がそのテーブルへ行くと山川と連れの男がいた。

「いらっしゃいませ」
清美は丁寧にお辞儀をして椅子にかけた。めいめい飲み物をボーイに注文した。場内は七分通りテーブルがふさがって、踊り場もかなり混んでいる。
「今晩はどちらのお帰り」
と清美は山川に訊いた。
「例によって会社の宴会さ。ご紹介するがね、瀬川さん、ほんとのこと云ってもいいでしょうね」
「さあ」
パリッとした地味な服を着た色の白い紳士は、上品な笑いを浮かべている。
「これが王冠で有名な清美さん」
「あらいやよ」
「こちらは銀座の瀬川宝石店の御主人。うちの会社の重役でもあるんだ。知ってるだろう、五丁目の」
「存じていますわ、どうぞよろしく」
清美は改めて頭をさげた。

「僕こそよろしく」
若い宝石商はどこまでも物柔かであった。飲み物が来ると三人はグラスを合せた。
「山川さん、ユリちゃんを呼んでもいい」
「ああ、いいとも」
ボーイにユリに伝えさせると、待ち受けていたユリはすぐやって来た。
「あたし、どこへかけようかしら」
「あんたそちらのそばがいいわ」
小柄でまる顔のユリは、黄色いスカートをぱッとさせて瀬川の横へ坐った。
「瀬川さんはおもにどちらへいらっしゃいます」
と清美は話しかけた。
「僕、あんまりこういう方へ来ないんだよ」
「瀬川さんと来ると、何しろ地もとの新橋の連中がうるさいからね。ナイトクラブまで足を伸ばす暇がないだろう」
「冗談いっちゃいけませんよ。銀座の商人なんて、古くて野暮なもんですよ」
一、二回代り番こに踊るうちに第一部のショウが始まった。

「瀬川さんは、お見かけはやさしいけれど、踊って頂くと、ずい分ガッチリしていらっしゃるわね」
「当り前だよ。この人は慶応のサッカーの選手だったんだもの。ボートもやったんでしょう、瀬川さん」
「勉強嫌いだったからね、僕は」
瀬川宝石店といえば、明治時代から有名な老舗だ。清美は関西生れだから古いことは知らないが、たまに銀座を歩いて、そこの店頭に足を留めて見たことはある。銀座人の伝統といったようなものに、現代の感覚が重なっているような瀬川に清美は魅力を感じた。しかしこういう人は容易に遊びに来てはくれないだろうと思ったが、清美は何か対象を見出したような気持になって浮き浮きして来た。

四

瀬川は時々王冠へ遊びに来るようになった。友達をひっぱって来ることもあるが、一人で来る方が多かった。必ず清美をテーブルへ呼んだ。瀬川は丁度三十位で、無論妻子がある。父は

彼が大学へ入る頃に死んで、彼は当主である。自宅は田園調布にあって、自家用車でそこから銀座の店へ通っているのだ。妻は病身で困ると彼は云った。

清美は訊かれても自分の身の上を正直には語らなかった。ただ神戸で生れて育って、学校を出てから結婚をしそこなって少しばかりこの商売をしたことがあるが、大阪は嫌いで、女学校時代の上級生でこの店で働いている人があったので、その人を頼って上京したといったような当り触りのないこととしか話さなかった。男に対して有りのままの自分を告白しないことが、必ずしも誠実が欠けていることにはならない。

或る晩、気がつかずにいたが、十一時半の矢田ショウが始まる頃から豪雨になった。

「外は大変な雨ですって」

「そう——じゃ君帰りに困るだろう。なんならアパートまで車で送ってやろうか」

「ほんと」

「どうせ通り道だよ」

「まあ嬉しい。じゃ、十二時になったら直ぐ出るわ」

「帰っても構わないのかい」

「お客さんと一緒なら、十二時になれば出てもいいのよ」

店は一時半くらいまでは営業しているのだ。十二時十分前くらいになると清美は、

「あたし支度して来るから待ってて下さいね」

と云って支度部屋へ行って通いの服に着替えた。テーブルへ戻って来ると瀬川はもう勘定を済ませていた。

クロークでコートを受け取って入口へ行くと、ドア・ボーイが、

「大変な降りで、出られやしませんよ。タクシーもなかなか捕まらないでしょう」

と云った。滝のような雨が玄関先や道路を叩きつけているのが硝子越しに見えた。

「君ここで待ってたまえ、車を持って来るから」

瀬川はレインコートを頭からかぶると勢よく飛び出して行った。雨と知って帰りを急ぐ客が出口の辺でゴッタ返していた。五分ばかり待っていると、瀬川はかなり離れたところにパークしてあった車を自分で運転して王冠の階段の下まで来ると、扉を開けて手招ぎした。ボーイがドアをあけてくれた。清美は篠つく雨の中へ飛び出し、素早く自動車の中へ飛び込んで、瀬川と並んで腰掛けた。五七年型のキャデラックだ。

雨でボカされてしまった街を沢山の自動車が気違いのように疾駆している。瀬川の運転は鮮やかなものだ。二人とも何も話はしなかった。清美はその時間を長いようにも短いようにも思

った。××アパートの前についた時は雨が少し小降りになっていた。
「一寸寄ってらっしゃらない。汚いとこだけど」
「遅くても構わないの」
「構うもんですか」
清美を先におろして、瀬川はアパートのコンクリートの広場へ車を置くと清美のいるそばへやって来た。階下のロビー風のところには数人の男女が茶を飲みながら話をしていた。清美は先に立ってエレベーターへ行った。
五階の自分の部屋へ入ると、
「一と間きりなのよ。どうぞお掛けになって」
清美はオーバーを脱いだ。瀬川は何一つ持っていなかった。ベッドの裾の方にあるテーブルへ行って二人は腰掛けた。
「送って頂いて嬉しかったわ、とっても」
清美のふたかわの大きな眼には湖のように深い媚びが現われた。それを見ると瀬川はグラグラとしたような気もちになって、片方の手を首に巻き付け、椅子ごと引き寄せてキスした。
それから一時間ばかりたった時には雨はすっかりやんでいた。瀬川はワイシャツを着込んで

鏡の前へいってネクタイを結んでいた。髪を全部おろして、赤縞のネルのパジャマを着た清美は、洋服たんすから瀬川の上着を出して立っていた。
「ここからお宅まで車で何分かかる」
「そうだな、夜だから十五分くらいで行けるだろう」
「それじゃ二時までには帰れるわね。いまお茶をいれるわ」
上着をかけてやると清美はガスで湯を沸かし始めた。リプトン茶が少し残っていてよかった。瀬川はテーブルへ来て煙草を吸っていた。紅茶と角砂糖を両方の前におき、
「レモンもミルクもないけれど」
「いや、結構」瀬川は角砂糖を入れてかき廻しながら「全部自炊でやってるの」
「女中が来なくなっちまったもんだから」
「掃除も自分でやるの」
「掃除はアパートのメードに頼めばやってくれます」
盛り上った胸や、漂う体臭から、再びとりこになりそうな感情を瀬川は制して、
「じゃ、僕、帰る」
と椅子から立った。

清美は前へ廻った。力のはいった抱擁とキス――清美はうっとりとなって、このまま死んでしまえたらどんなに幸福だろうと思った。

それ以来清美は一週間に一ぺんくらいずつ瀬川と逢っていた。アパートへ来たのは最初の時だけで、その後はいつでも青山の旅館で逢っていた。瀬川は黙っていても時々金を渡した。気がつかずにいるとハンドバッグへ分厚い札を二つに折って突っ込んであることもあった。女には、好きな男でも、相手が金持だと、恋愛よりも金を取ることに熱中するようになる女と、本当に好きな男からは金を取りたがらない女とある。それは古い新しいではなく性格である。清美は後者の方なので、瀬川から金を貰うことが何んとなく苦痛であった。

「なんでもないじゃないか、こんなこと」

そんな時瀬川は、年より十も老成した男のように見えた。

清美は溜っているアパートの家賃を入れたり、薬屋や八百屋や肉屋の古い借金も払ったりした。洋服も二着ほど作った。

ある晩、清美はマサミというとても博奕(ばくち)好きの女に誘われて、お店が終ってから、人形町の近くで本職が開帳している賭場へ行った。つれ込み旅館風の家の奥の座敷で、来ている客は種々雑多で、芸者らしい女や、バアのマダムと見える女もまじっていた。花札を用いるばくち

であった。その晩清美は勝った。元手は一万円しか持って行かなかったが、明け方帰る時には十万円近くなっていた。連れのマサミは二万円以上持って行ったのにすっかり取られてしまったので、帰りのタクシーの中で清美は一万円マサミにやった。

ひる過ぎ、まだ寝ているところへ、ユリが飛び込んで来て起された。

「どうだった、ゆうべは」

「勝ったのよ、六、七万――」

「まあ、凄いね。あんたこのところやっぱしツイてるんだよ、一万円貸してよ」

「そうね――」

その後もちょくちょく行ったが、そういつも柳の下にドジョウはいなかった。

五

めずらしくジョージの組がやって来た。日本人もまじっていたが、陳という四十がらみの三国人もいた。陳は前にも一、二度来たことがあるが、皆で「陳さん陳さん」といって立てているところを見ると、彼等に対して相当勢力があるらしかった。

ジョージは、バンドの音に消される低い声で清美の耳許に囁いた。
「今夜は銀座の宝石商は来ていないのか」
「宝石商って――」
「セガワというんだろう」
「瀬川さんなら来ていないわよ」
「さすがキヨミだ、大物を捕まえたって、皆が噂しているぜ」
「ウソよ、ただひいきにしてくれるだけのお客よ」
「ごまかしたって駄目だ、誰でも知っているんだ。ダイヤモンドのこんなやつを巻き上げろよ」
ジョージは卑しい薄笑いを浮かべて指で輪を作って見せた。清美はすっかり憂鬱になってしまった。
そのあとでジョージは、指で合図をして、清美を一番うしろの壁際の空いているテーブルへ連れて行った。
「少し相談があるんだ」
「なあに」

「陳さんがキヨミに惚れてるのだ。陳さんは××ホテルに泊っている。あすの晩、陳さんのホテルへ行って泊ってくれないか」
「なんだって――」
「あの人は香港の財閥なんだ。あの人はわれわれにとって重要な人なのだ。それから、キヨミに対してだって悪くはしないだろうよ」
清美はカッと逆上した。
「いやなこった。あんたはこの上わたしを利用しようとするの」
「利用するのじゃない、双方の利益のためだ」
「あたし、いや！」
清美の声は思わず甲高くなった。前の方のテーブルから一寸こちらを振り向いた人もあった。
「おとなしく承知しないと、ためにならないぜ」
ジョージは凄い眼付をして、左の胸のところを叩きながら、低い声で云った。いつでもそこにピストルを持っているのだ。
「あんたわたしを脅迫する気？　ここじゃそんなこと通用しないよ」
「銀座の顔役くらいなんだ。われわれは日本の政府だって警察だって恐くないんだ」

ジョージはこういってしまうと、さすがに周囲の気配を感じたか、わざと笑顔をつくって立ち上りながら又云った。

「とにかく、あす午後六時にお前のアパートへ行く。ゆっくり相談しよう」

六

清美はその晩眠れなかった。なんとなく幸運が訪れて来かけているような気もちで暮らしていたのが、今夜で一ぺんに崩れてしまった。悲しいやら腹が立つやらでむやみに涙が出た。ジョージのような男につきまとわれていては、しょせん幸福などある道理はなかった。

あすの夕方ジョージがここへ来れば万事休すだ——彼からのがれる方法はない。

——彼が来ないうちにどこかへ逃げよう。

大阪へ逃げたってジョージの手は追い迫るだろう。清美はふと、あすは土曜であることに気がついた。そのあとは日曜と祭日の連休である。瀬川は、ゴルフで、土曜から箱根へ行くと云っていた。瀬川をあす箱根のホテルへ訪ねて見ようか、と考えた。瀬川に会って、何もかも告白して相談してみたらよい知恵があるかも知れない。しかしだしぬけにホテルへ訪ねて行った

りしたら瀬川は迷惑するだろう。あまりずうずうしい押しつけがましい振舞いで、気がひけないではないが、瀬川以外に頼るべき人間はないと思った。

——ともかくも、瀬川さんに会って、方針をきめよう。

やっとそう決心がきまると、乱れに乱れていた心が少しは鎮まって、朝方から少しトロトロ眠った。

十時頃眼が醒めると、清美は飛び起きて、大急ぎで支度にかかった。あまり大袈裟に支度をして行くのも変だから、小さいスーツケースに、着替えと手廻りの品だけを入れ、服は地味なスーツにオーバー。ハンドバッグ、それだけは持って、ユリにでも来られては面倒と、十二時頃アパートを出た。

それからタクシーで日比谷へ行って、映画でも見て二、三時間潰そうと思ったが、まだ何も食べていないことをその時はじめて思い出して、山下橋のレストランへ入って軽い食事をした。そのあとスカラ座で映画を見た。独りで映画を見るなんて珍しいことであった。見ていても何の感激も起らなかった。アメリカ映画だから清美にはセリフは分るが、自分と全く無関係の人間がただ喋ったり動いたりしているに過ぎなかった。自分自身の重大な生活に直面している時には作りものの映画なんて何んの迫力も持たないのだ。それでも二時間ほどつぶしてタクシー

で東京駅へ行って四時×分の沼津行の電車に乗った。
土曜で連休をひかえているのだから電車は混んだ。二等はギッチリ満員になった。半数以上が温泉行きの人で、発車前から車内ははしゃいでいた。新橋や品川では立っている人が多かった。清美の前にも夫婦ではないらしいアベックが乗っていた。人間というものは手易く享楽できるし、どの人も享楽しているように清美には見えた。突然箱根のホテルへ訪ねて行ったら瀬川がどんな顔をするだろうかと思うと不安でもあるし、自分の行為が無謀であるような気もして来たが、ここへ来ては仕方がなかった。断られたら断られた時のことだと思った。
小田原へついた時は秋の日は半ば暮れかけていた。駅前からタクシーに乗って富士屋ホテルへと云った。もう薄暗くなって景色も何も見えなかった。
古風で豪華な富士屋ホテルの玄関先で車を降りると、ボーイが「いらっしゃいまし」と迎えた。清美はスーツケースを提げたままフロントへ行って、
「東京の瀬川さん、お見えになってるでしょうか」
「はい、いらっしゃいます。どなたさまで」
「佐藤と申します」
清美は姓を云った。事務員は直ぐ部屋へ電話をかけ、

「瀬川さんお出になりました、どうぞ」
と云って受話器を清美に渡した。
「モシモシ、清美でございます。突然ですけど、お目にかかりたいことがあって伺いました」
「そう――じゃ直ぐそこへ迎いに行くから」
清美がそこに立っていると、二、三分すると瀬川の姿が現われた。スポーツ・シャツの上に荒っぽいチェックの上衣をひっかけている。清美が側へ行くと、瀬川は黙って清美のスーツケースを取って先に立って廊下を歩き出した。廊下は長く、階段を二つばかり上って、部屋へ入った。ベッドが二つ並んでいる広い部屋だった。ソファーで向き合って坐ると瀬川は初めて口を開いた。
「どうしたんだ、前触れもなしで」
「急にご相談したいことが出来たもんだから。でもご迷惑でしょう、ゴルフのお友達もいらっしゃるし」
「迷惑といえば迷惑だが、来てしまった以上は仕方がない。話はあとで聞くとして、時に食事はまだだろうね」
「ええ」

「僕もまだだ。食堂へ行ってもいいが、知った奴にぶつかるとうるさいから部屋へ運ばせることにしよう。その前に風呂に入ったらどう」
「ええ、でもあとで結構だわ」
瀬川はボーイを呼んで夕食を注文した。食事と同時にボルドウのワインを瓶ごと持って来るように云い、その前にドライ・シェリーを命じた。ボーイはグラスを二つ盆にのせて来てテーブルの上に置き、琥珀色のシェリー酒を注いでいった。二人は盃を合せて飲んだ。
こうしていると清美はなんともいえない安心感に包まれ、悪魔に追われて東京を逃げ出したあの絶望感が霧が晴れたように薄れて、自分もまだ人生を享楽する資格があるように感じ出した。瀬川は何も尋ねないので、自分の方から喋ってはせっかくの気分をこわすような気がして、清美もそのことには触れなかった。
食事が済んだあと、瀬川はゆったりと煙草をふかしながら云った。
「さっき云った相談って、どんなことなんだい」
「あたし、東京にいられなくなったのよ」
「いられなくなったというと」
「殺されるかも知れないわ」

「君を殺すといって脅迫する男があるのかい」
清美は黙って頷いた。ジョージとの関係やこんど新たに起った出来事について詳しく話をするつもりでいたけれども、この場に臨むと口から出せなかった。それから自分の博奕(ばくち)好きなことも、借金だらけのことも、ジョージ以外の男とも金の取引きでたくさん関係したことがあることも、一切合財瀬川の前に告白して神の裁きをまつような敬虔な気もちになれたらどんなにせいせいするだろうと思ったが、それは思ったばかりで、口にする勇気がなかった。
瀬川もその点を追求して訊きはしなかった。彼は決して遊び手という方ではないが、親の代から銀座のどまんなかで暮らしている人間として、大凡こういう種類の女がどういう生活を持つものだかという常識はある。この女と自分との関係を通常の恋愛だなどと考えたことはない。清美にヒモがついていると聞いたって別に驚く気もちにはなれない。
けれども、清美の自分に対する態度が、不純なものばかりだとは思われない。この女には数多の欠点があるだろうと同時に、長所もたくさんある。彼女は醜いものを隠して、美しいものだけで自分と接触しているのだかも知れない。それなら、それで沢山じゃないか——と瀬川は考えるのだった。
「殺すなんておどかしたって、そうやたらに人を殺せるもんじゃないよ。いよいよとなればど

こへでも逃がしてあげるが、あんまりビクビクしないで、度胸をすえて見たらどうなんだい」
「そうね。わたし意気地がなさすぎたのよ。万一殺されたって、わたしなんか惜しい人間じゃないものね。覚悟をきめたわ」
「ははは、立派な覚悟だ。ところで、せっかくやって来たことだから、あすあさってと面白く遊ぼうよ。それにはここじゃ具合が悪いから、あすの朝早起きをしてどこかへ行こう」
「ゴルフをおやりにならなくてもいいんですか」
「ゴルフはいつでも出来るが、君と遠出をするのはいつでもというわけにいかんからな」
「まあ嬉しい」
清美は椅子から飛び上った。
「連休だからどこも満員だかも知れないが」
と云いながら瀬川は伊豆の川奈ホテルへ電話をかけていた。瀬川はそこでもいいお客らしかった。支配人を呼び出して暫く話をしていたが、椅子の方へ戻って来て、
「ようよう部屋が取れたよ。あっちもゴルファーでうるさいだろうが、ここよりは増しだ」
と何んの屈託もなさそうに云った。

七

あまりに素晴らしい幸福に浸っている瞬間には、過去も未来も考えられないものである。清美は東京のことすら思い出さなかった。このまま自分が雲に乗って、フワリフワリとどこかへ行ってしまうんじゃないかと思った。
ゴルフ仲間が起きて来ないうちにと、瀬川は六時に起きて清美を急き立て、朝食もそこそこ、ハイヤーで箱根をたち、小田原から海岸の道を伊東へ向かって走らせた。空には一点の雲もなく、海は静かに凪ぎ、松の木の幹や岩石は朝日に紅く染っていた。漁船の帆が点々として光り、初島は手に取るように近く、大島はかすんで煙をふいていた。
「なんていい景色でしょう」
清美は何遍も声をはずませて云った。例なく早起きしたことが、一層気もちを健康的にするのだった。そうした歓喜を乗せて自動車は走った。
川奈ホテルの三階の、広大な芝地と、松林の彼方に海を見晴らす豪奢な部屋に納まった時、清美の歓喜は頂点に達して知らず知らず歌い出した。

「あなた、ゴルフなさりたいでしょうね」
広いゴルフ場を見ながら清美は云った。瀬川はそっくり箱根のホテルへ道具を預けて来た。
「ゴルフもいいが、君とドライブするのも楽しいよ。午後には南伊豆の方へ行って見よう。何しろこの天気じゃ家の中にいるのはもったいないからね」
——この人もわたしと遊んでいるのを楽しんでいるのだ。
清美は鳥の羽根で撫でられるような快感をおぼえ、同時に男に対する愛情が留め度もなく湧いて来た。
午後は食堂で昼食をとった後、一刻も休むのは惜しいといった風に、直ぐ自動車を呼んで下田街道をドライブした。要するにその一日、清美は人生の頂点といったくらいに、何から何まで幸福ずくめで、有頂天になっていた。しかし瀬川の方は、それほど単純ではなかった。遊んでいながらも、女を観察することは忘れなかった。男に脅迫されているといったことを思い出して、女の境遇について、何んとか考えてやらなくてはなるまいと思った。
しかし彼ほど世故に長けた男が、甘い人情や感傷だけで女に溺れる筈はないのである。
ドライブから帰って、部屋に付いた温泉にはいり、ホテルのどてらに着替えてから清美が云った。

「ああ楽しかった、今日みたいなこと、あたし生れて初めてだわ」
素顔の清美の顔は一層潑剌と活き活きしていた。真白い胸が湯上りでやや紅味を帯び、細帯一つではだけた襟のところからまるく大きな乳房がのぞいていた。瀬川は猶予のできない欲望に駆られた。
「僕も初めてだよ」
「ほんとう——」
清美の眼は焔のように燃えた。しなやかな腕が蛇のように瀬川の首に巻きついた。二人はからみあうようにしてベッドへ行った。
翌日もべつに急いで帰る必要はないし、次第によっては清美の身の振り方を相談してやろうと瀬川は考えているので、わざとゆっくりしていた。
「すこし海の辺でも歩いて来よう」
と瀬川は云った。服を着込み、二人は階段を降りてロビーを通り抜けようとした。その時、向うの隅の椅子に腰掛けていた三人の男がツカツカと近寄って来て前に立ちふさがるようにした。
清美は彼等の姿を見ると蒼白になった。ジョージと、ハル・松原という彼の仲間と、もう一

人は時々顔を見る木村という日本人のヤクザだった。
「あなたは瀬川さんですね」
と日本人のヤクザは云った。
「そうです」
「それじゃ、少し話があるからこっちへ来て下さい」
とヤクザは云って、不作法にも瀬川の腕を摑んで向うへ連れて行こうとした。瀬川はそれを振り切った。ジョージと松原は険悪な顔をして瀬川を睨んでいた。
「用があるならここで云いたまえ」
「俺は女房を取り返しに来たんだ」
ジョージは英語で叫鳴るように云った。日本人のヤクザがそれを通訳しようとすると、
「君、通訳しなくても大抵分るよ」
瀬川は商売柄英語も達者だった。
「女房とはこの人のことですか」
と清美を振り返って云った。
「そうだ。その女は俺の女房なんだ。どうして手前はその女を連れ出したんだ」

「この人に亭主があるとは聞かなかったね。たしかに君は結婚しているのか」
瀬川は逆襲した。木村は一寸調停役のような顔を見せて云った。
「瀬川さん、あんまり強気に出ない方がいいでしょう。この人達は何をするか知れませんよ」
瀬川は苦が笑いした。
「といって真逆ホテルでピストルをぶっ放すわけにもいかんでしょう」
ホテルの事務員やボーイや、広いロビーのあちこちにいる宿泊人たちも、ただならぬこの場の光景に一斉に視線を注ぎ始めた。瀬川は落ち着き払って、三人の顔を等分に眺めながら英語で云った。
「とにかく余り名誉な話ではないらしい。他のお客さんたちが迷惑するから、僕の部屋へ行って話をしよう。清美さんも、来たまえ」
三人は眼を合せて頷き合った。瀬川は先に立って階段の方へ行った。
部屋へ入ると、
「まあ掛けたまえ」
と瀬川は云った。ジョージと木村が、テーブルを隔てて瀬川と向き合いに腰をおろした。ハル・松岡はひとり壁際のところに突っ立って、両手を上衣のポケットに入れて立っている。

一時は血の気をうしなって見えた清美の顔は、いまでは反って紅潮し、唇を嚙みしめながら、離れた窓際に立っている。

「さて話を聞こう。君たちはただ清美さんを連れ戻しに来たのか。それとも他に要求があるのか」

「要求もありますよ。だが、ジョージはぜひとも清美を連れて帰るといってます。彼はこの女に首っ丈ですからね。帰らないといったら奴は女を殺すでしょうよ。瀬川さん、あんたも危ないですよ」

と木村は代弁した。

「清美さん――」

清美は部屋の真ん中頃まで歩いて来た。

「あんたはこの人達と帰るか、どうする」

清美は顔を伏せていたが、突然「わッ」と泣き出した。両手で顔を被いながら、泣き声と叫びとが、交々飛び出した。

「わたし……帰ります……わたしはあなたに愛される資格はありません……わたしは悪い女なんです……」

そう云ってしまうと清美はベッドの上に身を投げ出し、両手で頭を抱えて激しく泣き出した。

「これで一つは片付いた。あとの問題を云いたまえ」

「勝手に人の女を連れ出して、おもちゃにした、その代償を払いなさい」

「それは無論のことだ。だが、断っておくがね、私は銀座の商人だ。相場にない値段じゃ買わないよ。いくら払えばいいんだ」

打って変った鋭い調子だった。三人とも気を呑まれた形でいたが、入口の方へ行ってヒソヒソ囁き合ったあとで椅子の方へ戻って来た。

「瀬川さん、二十万円でいいそうです」

と木村が云った。瀬川は黙って向うの机へ行って、手提鞄から小切手帳を出してそれへ記入すると、自分の椅子へ戻って来て、小切手をテーブルの上においた。ジョージは急いでそれをポケットへ入れた。

清美はもう泣かなかったが、その顔は血の気がないほど蒼ざめていた。

「清美さん、君が悪いんじゃない。どうも仕方がないらしい」

と瀬川はつぶやくように云った。

三人のギャングと一人の女は部屋を出ていった。

八

自然は規則正しく動いているのに、人間の運命はどうしてこうまちまちなんだろう——

清美は相変らず王冠へ勤めていた。しかしお客は減るばかりだった。悪い噂は無数の翼と脚を持って飛び廻るものだ。以前はこの店でもNO・3より落ちたことのなかった清美だが、近頃はお茶を挽く晩が多かった。テーブルへ呼ばれて行っても、受持ちではなく、おつきあい程度ではいくらの収入にもならなかった。それでも呼ばれる晩はまだいいが、一晩中客が付かなくて、バアの格子の中から盛っているホールを覗いている時の味気なさは、この商売をしたことのある者でなければ分らない気持である。従業員やホステスたちの清美を見る眼も気のせいか冷たくなったように感じられた。たまにフリで来るお客があって、指名のない時には、大がい給仕頭が、溜りに売れ残っているダンサーの中から、一人とか二人とか呼んでくれるのである。清美も全盛時代には、すべての人に付け届けをよくしたから、初めての客にも一番先に呼ばれる組であったし、売れる時には頼まなくても人気が付くものだが、今はそれが反対になって、清美の顔を見ながら、わざと無視したように、他のダンサーを呼ぶのであった。外人客や

大きな会社筋のお客などは特に現金なもので、少しでも悪い噂が耳に入ると、警戒して、側を通っても素知らぬ顔をするのが普通である。要するに清美の周囲は日一日と悪い状態に陥ちて行った。

ある晩、支度部屋にいると、小母さんが、

「清美さん、電話」

と云った。出て見ると、例の人形町のばくち宿からで、黒田という胴方(どうかた)の男が「今夜は大変いいのが出来るから来ませんか」という誘いの電話だった。清美にとって賭博ほど強い誘惑はなかった。タクシー代にも事を欠くほどの懐中だったが、腕時計を質に入れりゃ一万円位は借りられるだろうと思った。前に持っていた時計はとっくになくし、それは瀬川に買って貰ったスイッツル製だった。

「有難うございます。都合がついたらお邪魔させて頂きます」

清美はわざと丁寧な言葉で返事をして、電話を切ると、丁度あたりに人がいなかったので小母さんは小さい声で云った。

「清美ちゃん、又例の電話なんだろう」

「そうよ」

「悪いこた云わないから、あれだけは止さないかい」
「……」
「あんたは学問もあるし、わたしなんかがこんなこと云うと生意気のようだけどね、どんな利口な人でも、ばくちでは身をほろぼすものなんだよ。わたしゃ若い時から幾人もそういう人を見ているから、余計なことを云うようだけれど……」
「小母さん、有難う――」
この小母さんだけは、付け届けをしてもしなくても、誰に対しても親切である。
「でも小母さん、わたしはもう駄目なのよ」
「そんなことがあるものか。あんたは一寸、蹴つまずいただけだよ。これからですよ」
「ほんとに有難う。じゃ、考えるわ」
清美はにっこり笑って、急いで階段を降りた。
やっぱり、その日限り時計は清美の腕からなくなってしまった。
清美は日劇の方から数寄屋橋を歩いていた。工事のために板囲いをしたりむしろを敷いたりしてある狭い道をギッチリと人が流れていた。空は晴れているが風は冷やっこかった。
「佐藤君じゃないか」

向うから来た男が急に側へ寄って来て声を掛けた。大阪にいた時代に、あるグループでかなり親しくしたこともある平岩という男だった。もう三十をとっくに過ぎていて、一応ととのった身なりをしている。
「まあ平岩さん、お久し振り」
「君、どこへ行くんです」
「一寸この先まで靴の直しを取りに行くのよ」
「さしつかえなかったら、その辺まで歩きながら、君の話も聞きたいが」
「どうぞ」
平岩は後戻りして歩き出した。交叉点を渡って四丁目の方へ歩きながら、
「佐藤君に会おうとは全く意外でしたよ」
「わたしもよ。もう何年になるかしら」
人通りが多くてろくに話も出来なかった。清美は幾年振りかで会ったこの知人にあまりすげなくするのも悪いような気がするし、それに過ぎ去った思い出を懐かしむような気もちにもなった。
「平岩さん、お茶でも飲みながらお話しましょうよ」

二人は横丁へ入って、混んでいない喫茶店を見付けて清美が先に立って入った。奥まったボックスで向き合って腰を掛け、コーヒーを注文した。平岩は抱えていた書類入れのハトロンの袋を横に置いた。

この平岩という男とは、大阪で、左翼の組織（オルグ）が出来た時、それに属する一つのグループでの知り合いであった。というよりも、清美の初恋の男と同じ会社の工場に働いていた関係から、その意味でも割に親しい間柄であった。どちらも組合の委員であった。その頃清美には、労働者出身の闘士ということが絶大の魅力であった。清美の恋人は知り合って一年ばかりであっけなく肺炎で死んでしまった。

「佐藤君が東京でダンサーをしているってことは人から聞いたが、どこで働いてるんだね」

「今は王冠ってとこにいますの」

「有名な家だね。われわれには縁がないから覗いたこともないが。面白いだろうね」

「面白いことなんかあるもんですか」

「君はまだ結婚しないんですか」

「するもんですか。平岩さんは」

「僕はもう子供が二人出来ちゃった」

平岩は東京へ出てから結婚し、今では党の方でも相当重要な仕事をしているらしい口振りで、幸福らしい自分の家庭についても話し出した。

「子供って可愛いもんですよ」

平凡な父親らしいそんなことを云って笑った。現在の清美にはなんのつながりもない過去の思い出ばかりだった。清美はじきに平岩と話していることにも退屈を感じて来た。平岩は平凡な男だけれども一つのものにかじりついている。そして現在幸福らしい。清美は何んの目標も持てないし、舵も帆も失って海洋の中を漂っている船のような自分の生活と比較して見た。

喫茶店を出るとその前で別れた。

九

十一月になると一つの事件が起きた。ジョージとその一味の者が、密輸入、詐欺、賭博常習、恐喝等、種々の犯罪から一網打尽に逮捕され、ハワイへ送還されたのだった。この出来事は清美の運命をよい方へ転換させる一つのチャンスであった。作者もそうありたいと望むのである。しかし実際は期待に反してしまうのである。なぜかというとその頃は清美の賭博癖は病膏肓（やまいこうもう）に

入って、一晩でも賭場に坐らずにはいられないほど、この悪癖は深く食い入ってしまったのである。ぼくちの資金を得るためには清美はどんなことでもした。体を売るのは一番手っとり早い方法だったが、その機会を多く得るためには値段を安くするよりほかない。アパートへ客を連れ込む時には、以前は一万円より以下では絶対に承知しなかったが、それが五千円でもOKし、どうかすると二千円しか取れないようなことさえあった。それでもその資金が子を生んで金が膨脹してくれれば文句はないが、そうして獲た金は羽が生えて飛んで行ってしまい、残るものはいつでも自分の体一つだった。

十二月になると清美は全く行き詰ってしまった。アパートの家賃や経費は半年以上溜っているので、敷金よりも超過し、事務員から厳重な督促を受け、年内に家賃を払わないなら強制立退きを執行すると宣告された。あらゆる種類の借金が山のように出来てしまった。そうなると妙なもので、体を求めてくれる客もなくなった。

王冠へは通っていたが、お茶を挽くことが多いので、かえって足を出す始末だった。といって満更行かずにいれば座して死を待つにひとしいのでともかくも出て行くのだ。

窮余の策として、清美は、瀬川に無心を云って見ようかと考えた。これはよほど前から考えたことだがさすがにその勇気がなかった。第一無心をきいてくれるかくれないよりも、会って

くれないだろうと思った。電話をかけても電話にさえ出てくれないかも知れぬと思った。しかし瀬川のことを思い出す時だけ、清美は心が温まるような気持になり、何かしら希望めいたものが湧いて来るのだった。

――いかになんでもそんな厚顔しいことはできない……

何回か躊躇したあげく、或る日清美はアパートから瀬川の店へ電話をかけた。すると無造作に瀬川は電話へ出た。

「清美でございます。ご無沙汰をいたしました」

「あんたもお変りありませんか」

「有難うございます。あの、折り入ってお願いしたいことがありますの。ぜひお目にかかりたいんですけど」

「そうですね――」瀬川は一寸考えていたが、

「それじゃ、今日六時に『ケテルス』へ来て下さい」

と云った。瀬川と二、三回食事をしたことのある並木通りのドイツ人のレストランである。

「済みません。必ず六時に伺います」

電話を離れた時、清美は浮かび上ったように嬉しかった。金のことは忘れていた。瀬川に会

えるということだけで十分に幸福であった。

六時に清美がそのレストランへ行くと、瀬川はもう来ていた。

「やあ、久しく会わなかったね」

瀬川は笑顔を見せて云った。客はほとんど入っていなかった。隅の方のテーブルで二人は向き合った。

「あなたにお目に掛かれた義理ではないんですけれど……」

「過ぎ去ったことは云わないとしようよ」

瀬川はボーイに定食を注文し、ブドー酒も取った。

「早速だが、用事から先に聞こうじゃないか」

清美は口ごもった。けれども切り出さずにすむことではないから、思い切って話した。不景気で収入がなく、この年の暮れが越せそうもないこと。アパートの家賃もいくらか入れなければ追い出されそうになっていることなど。けれども博奕で大損をしたことや、自分の不行跡については、勿論口から出せなかった。しかし瀬川はあれ以来王冠へ来ないけれども、彼の友達や知人であそこへ来る人は沢山あるから、清美の不評判のことも耳に入っているかも知れないのだ。そう思うと清美は気が引けたが、困ることだけ訴えて、

「厚顔しい女とお思いでしょうが、なんとかここのところを助けて頂けないでしょうか。わたしも来年からはきっと立ち直りますから」

と瀬川の顔色を見い見い云った。

「多分そんな話だろうと思ったから、少しばかり用意して来た。差し当り十万円もあったらいいのかね」

「結構です——」

瀬川は無造作に上衣の外ポケットに入れていた五千円札ばかりの封筒入りを出して清美に手渡した。清美は嬉しくて涙が出そうになった。自分に対してこれだけの好意を持ってくれる人がいるということは、自分の生活を粗末にしてはいけないということだ。賭博なんか断然やめた。そして今瀬川に誓った通り、商売にも精を出し、必ず立ち直って見せる、と強く自分の心に云った。

食事をしながら瀬川は云った。

「あのハワイの人達も送り帰されたそうだね。新聞で見たが」

「ええ、やっとわたしも解放されましたのよ」

食事がすむと瀬川は、

「僕はもう一度店へ帰らなきゃならんから」
と云った。

十

清美は急に元気づいた。もうクリスマスは目の前に迫っていた。ホールはとっくからクリスマス・デコレーションで飾り立てられていた。「みのる」というダンサーに会った。みのるはニコニコしていた。みのるもバクチ好きで時々清美と一緒に出掛けたことがあった。

「みのるちゃんばかにご機嫌ね。何かいいことがあったの」

「あったわよ」

みのるは清美を隅の方へ連れて行って、ゆうべ渋谷にあるバクチ場へ行って三万円勝って来たことを話した。その家は戦前からの大邸宅で、全然手入れなどの心配のないことや、集まっている客種はもちろん素人ばかりで、それも上流の人が多いことなど話した。

「全然気分がいいのよ。クリスマスまで毎晩あるんだって。あたし今夜も行くから、清美さんも行かない」

清美は強い誘惑を感じたが、反省した。この金は賭博でつかってはならない——

しかし、好きなばかりでいつでも負けてくるみのるが三万円も勝ったところを見ると、いいバクチ場に相違ないと思った。十万円あれば一先ず年は越せるが、それで借金が全部片付くというわけではない。慾をいえばもう十万円ばかりほしいところだ。近頃は元手が乏しいからどうしてもいいとこが取れない。十万円握っていて、自重して賭けていれば損をする道理はない——と思った。しかしみのるには行くと返事はしなかった。

一時半にラストになると、ダンサー達は大急ぎで帰り支度をする。客は皆帰ってしまい、広いホールはガランとして、照明も消され、僅かに通路を照すだけになっている。裏の入口の辺で大勢のダンサーやバンドの人たちがゴタゴタしている。

清美が外へ出ると、いつの間にかみのるが側へ寄って来て、

「清美ちゃん、行こうよ」

と囁いた。それでも清美は決心がつかなかったが、みのるがタクシーを留めて、清美が来るのを待っているのを見ると、ついフラフラと一しょに乗ってしまった。

清美はその晩五万円負けた。

もういけなかった。ぜひともその損失を取り返さなくてはと、次の晩も出掛けると、今度は

持っているだけ全部取られてしまった。

クリスマス・イヴであった。王冠には宵から客が充満した。ボーイたちが忙しく走り廻り、紙の帽子を冠ったり、眼かくしを当てたりした男女が踊り狂った。風船玉が破裂し、テープが投げられる。バンドは狂気したように騒がしい曲を続けさまに演奏する。幾組かのショウの芸人も今夜は特別に熱演する。オールナイトだ。

さすがに今夜は清美も忙しかった。清美はあっちこっちのテーブルでウイスキーをガブガブ煽った。清美は自分の人生を使いきってしまったという気もちがしていた。そしてこの狂躁と絢爛(けんらん)を極めるクリスマス・イヴはその最後にふさわしいような気がした。けれども、しまいには何がなんだか訳が分らないほど泥酔してしまった。

タクシーでアパートへ帰った時は夜が白み始めていた。清美は手箱の底の方から一服の薬を取り出した。これは余程前から用意してあったものだった。オーバーを脱ぎ、黒のドレスのまま、コップに水をくんで来ると、ベッドの上に坐って、紙包みの薬を口に入れ、それから静かに水を飲んだ。

雨(あめ)の苔寺(こけでら)

一

横須賀線の終電車は、以前は午後十一時四十二分であったが、現在は十一時五十五分に延びた。この電車の二等は一箱だが、定連といったような顔が多く、いつも車内が賑やかである。終戦後の数年間は、この終電には二等車はついていなかったが、やはりどの箱へ乗っても顔馴染に不自由はせず、その頃はいまより混雑していたから東京駅からならとにかく新橋からでは絶対に腰掛けられない状態であった。バアのママさんや女給、キャバレーのダンサーといったような人たちが圧倒的に多く、彼女たちは十一時半の看板になるのを待って新橋駅へ駈けつけるのだった。男の乗客も素面の人はまず少なく、大概そういったような所で看板間際までねばっていて、ようようこの電車に間に合ったというような顔が多かったから、車内では酒こそないが、酔いはまだ十分残っていて、気分的にはバアやキャバレーの延長といったような光景が随所に見られた。久米正雄が書いた小説にも、この電車内の混雑と、その中に醸し出される独

特の雰囲気を背景にして、新橋でバアを経営している美貌の名流婦人が昔習ったソプラノを歌い出す光景を描写したりしたことがあった。

その頃は東京の住宅難から、銀座辺で働く女性で、戦災を蒙っていない鎌倉や逗子から通う人がじつに多かったが、次第に東京が復興し、アパートが建ち始まるに従って、それらの女性たちもだんだん東京へ引っ越して行って、いまでは横須賀線の終電へ乗る人はごく僅かになった。それでも顔だけは見覚えのある女性から軽く会釈をされるといったようなことが間々ある。

P子と知ったのもこの終電の中だといってよかった。もっともP子はわたしが行きつけのバア「エトランゼ」に勤めているのだったから、向うではとっくから知っている筈だったが、何分大勢女がいることだし、行けば前から知っている連中がそばへ来てサービスしているので、ニューフェースで比較的無口なP子と接近する機会は殆どないといってよく、一度や二度は紹介されたであろうが、自分が特に興味を持っているわけでもないので、その場限りで顔まで見忘れてしまっているのを、終電の中で偶然近くへ腰かけて改めて挨拶をされるといった次第であった。こうしてバアとちがった空気の中でしみじみよく見ると、P子はなかなか優れた容姿の持主であった。年は十九だというからまだあどけないくらいの若さである。せいはかなり高く肉付きもほどよくついている。まるく締った顔は、窪み加減の眼と片頬に出来る笑くぼが特

徴である。殆ど口はきかないが、歯並を見せ笑くぼを作って笑う時や、窪んだ眼で下から見上げる時の表情はかなり魅力的である。P子はいつでもいいなりをしていた。エトランゼの女たちはみな衣裳で苦労をしている。べつに高価な服や高価なアクセサリーをつけていなくてもよいが、趣味がよくて、数がなくてはいけないのだ。P子は店で着ていた派手なカクテルドレスのまま上に薄いオーバーを着て電車に乗っていることもあった。

P子は女連れと乗っていることもあるし、店のお客の有名な商店の社長と並んで乗っていることもあった。そして彼女は横浜で降りるのだった。横浜の自分の家から通っているのであって、両親もあれば兄弟も何人かあるということだった。

「鎌倉の神山さん、ご存じでしょう」

「知っているよ」

「神山さんの二番目の娘とあたしとお友達よ、横浜の学校で同級だったから。日曜にはたいがい一緒に遊ぶのよ」

口数の少ないP子がそういって話したことがある。神山氏は鎌倉の名士だから誰でも知っている人である。こんな風で電車で時々一緒になるものだから、自然顔もはっきりおぼえてしまって、店へ行った時でも、他の女が一寸立った隙に側へ来ることがあるようになった。ところ

が、彼女はまもなく三月一杯で店をよすことになったといった。どうしてよすのかと訊くと、結婚するためで、その前に料理やお花の稽古に行かなければならなくなった。それがためにバアをよすのだといった。この話はほかの女たちもみな知っていて、本当に縁談が進行しているらしく、先方は大きな商店の息子だといった。

「P子ちゃんあんな堅気の家へお嫁に行って辛抱出来るかしら」

と蔭でいっている女もあった。高級バアとはいえこういうところに勤めていて、まだ十九ばかりで早くもそんな結婚相手が出来るとは、見掛けによらぬ腕で、それが実現すれば幸福なことだとわたしは思った。

わたしはエトランゼへ多く行っても月に三度くらいのものだ。大勢いる中でごく若い女たちを三、四人特にひいきにして、夏一同を鎌倉へ海水浴によんでやったこともあるし、ごく稀れには店が終ってから三人くらい一度に連れてナイトクラブへ遊びに行ったりすることもある。たまには靴やハンドバッグくらい買ってやる女もある。

「うちにはテレビがないのよ。だから日曜にうちにいると退屈して叶わないわ」

色の白いU子という女がいった。

「テレビがない——いま時テレビがなくちゃ人と話も出来ないじゃないか。買ったらいいだろ

う」

「月賦で買えるのよ。頭金二万五千円出して」

わたしはその場で頭金をU子に渡してやった。そんな程度のことはするが、別に特別の野心はないのだ。P子はこのグループに入っていなかった。或る晩そばに人のいない時、

「先生、ナイトクラブへ連れてってよ」

とP子はいった。

「君ひとりで行くかい」

「行くわ」

「じゃ近い内行こう」

と約束したがわたしは実行しなかった。そのうちP子は店へ来なくなった。結婚の準備のためだろうと思った。四月半ば過ぎに暫くぶりでエトランゼへ行くと又P子が来ていた。

「どうしたのだ。結婚は止めたのか」

「そうじゃないけど、都合で少し延びているのよ」

わたしが去年の暮にタイへ旅行して書いた歴史物が映画になって、わたしのあとでスタッフもタイへ行ってロケーションをしたが、現在京都の撮影所で製作進行中であった。映画会社で

は宣伝のためにわたしに京都の撮影所を訪問してくれといった。わたしは承諾の旨を答え、日取りの打合せをし、汽車の切符やホテルの予約なども一切会社に任せて帰った。ひとりでどこかで食事をし、腹こなしに癖になっているパチンコをやったりしたが、まだ時間が早いので九時頃フラリとエトランゼへ行った。宵だから女たちはみんなひまで集まって来た。一人がわたしの映画のことをいったから、わたしも自然、その用事で京都へ行くことになった話をすると、みんなは「わあッ」といって羨ましがった。

「いまごろ京都へ行ったらいいだろうな」

「でも花はもう散ったあとよ」

「花が散ったあとだからなおいいじゃないの。先生、わたしたちを連れて行かない」

「わたしたちって」

「わたしと、×ちゃんと、×ちゃんと」

「だれが束にしてなんか連れて行くものか」

「いいじゃないの。寝る時は一人先生のベッドへ行って、あとの二人は別のベッドへ寝るから」

少し客が混んで来た頃、P子がわたしの横へ来てささやいた。

「わたし今夜鎌倉へ行くの。神山さんへ泊ることに、昼間電話で約束したのよ。あしたは一日お店をサボって遊ぶのよ」

「そりゃいい」

「だから先生、今夜お店がしまうまでいて、一緒に鎌倉へ帰ってよ」

「店がしまうまでといや、まだ一時間半もある。そんなにいられるものか」

「いられるわよ。それからお話もあるのよ。いてよ」

P子は顔に似あわぬしっかりした声で、真剣な眼付をしていった。あどけないようでいて、どこかに強いところがある。わたしが帰りそうな気振りをすると、どこにいてもすぐそばへ来て無理に留めて帰らせないようにした。鎌倉の友達と約束をしたというのは口実で、わたしとどこかへ行くつもりなのかしらとも考えた。わたしは多少興味も湧いて来たが、とにかく仕方がないのでブランデーを何杯も飲んで、ぐずぐずしているうちに十一時半になった。その前に勘定をして外へ出て路地の口に立っていると、誰より早くP子はスプリングコートを着て靴音を立てて飛び出して来た。

「お待ちどおさま」

すぐそこからタクシーを拾って八重洲口へ行って終電へ乗り込んだ。彼女は窓際へ並んで腰

秋生技芸図書

かけた。新橋からは知った顔も乗り込んだがそばへは来なかった。
「先生ほんとに京都へ行くの」
「行くよ、もう切符も取ってある」
「わたしを連れてって」
「君ひとりでついて行くというのか」
「そうよ。先生とだったらどこへだって行くわ」
今夜無理にわたしを引き留めて一緒に鎌倉へ行く理由も分った。しかし結婚を目の前に控えているというのが事実なら、ありえざることだ。冗談でないとすれば、何分不可解なことが多かった。
「今夜神山さんへ泊る約束はたしかだろうな」
「そうよ。T子が駅へ迎いに来ている筈よ」
「あす鎌倉で遊んでいるなら、昼間会って相談しよう」
わたしは一時のがれのつもりでそういった。
「じゃ、あした、きっと会ってね」
鎌倉へ着くのは一時五分前である。改札口の向うに友達の姿が見えないのを知ると、P子は

先に立って歩き出した。
「T子の友だちのお母さんが、駅の近くで飲み屋の店を出しているから、そこにいるのよ」
「こんなにおそく、大丈夫かい」
「大丈夫よ」
仕方がないからP子のあとへついて行くと、小町通りを一丁余り行ったところの路地の口に友達が二人立っていた。路地の中にはまだあかりをこうこうとつけた小料理屋風の家が二、三軒あった。
「さよなら」
「あす、きっとね」
友だちも黙ってお辞儀をした。わたしは駅へ引き返して車に乗った。

二

翌日午後二時頃になるとP子から電話が掛って来た。前おきも何もなく
「神山さんの家にいるのよ。すぐ来て頂戴」

そう遠い所ではないがわたしは車を呼んで行った。主人の神山氏は大抵不在であるし、その日は夫人も映画を見に行ったとかで留守で、若い女が三人廊下にチョロチョロしていた。一人は神山氏の令嬢で、一人は昨夜行った母親が飲み屋をしているという家の娘だ。

P子はわたしが行くと主人顔をして出迎え、一番奥のかなり広い芝生や石を使った築山など見える八畳の座敷へ案内して、テーブルを隔てて真向いに坐った。昨夜と同じ洋服なのだが、昼間こうして日本座敷に向き合って見ると、なんとなく大人びて見えた。

「T子、お紅茶の方がいいわよ」

P子は向うを向いて大きな声で主人が命令するような調子でいった。当家の娘は遠慮がちな態度で紅茶と洋菓子をわたしの前にはこんでくると、直ぐ出て行った。

「先生、ほんとに京都へ連れてってくださる」

「連れて行ってもいいが、そんなことしても構わないのかね」

「いいのよ」

「僕はあさっての午後二時の汽車の切符が取ってあるんだ。京都ホテルで、三泊の予定なんだ」

「それじゃ、あたしもその汽車に乗るわ」

「三日も四日も旅行したり、店を休んだりしてもいいかしら」

「お店の方は勝手勤めだから構わないのよ」

男と一緒に旅へ出て、一つホテルに泊っていれば、その結果がどうなるかぐらいのことはまさかわからぬ筈はない。そうするとすべてを承知しているのかしら。P子はアプレだけれども、なんといっても十九だから、一見(いっけん)してういういしく、あどけない顔だちで、そこら中にまだ子供が残っているといった感じだ。この若い女の精神や肉体には、途方もない無鉄砲な荒れ馬のようなものが宿っていて、どんな冒険に対しても恐れを感じさせないのかもしれない。それとも男と一緒にホテルへ泊るくらいのことは、冒険とも何んとも思っていないのかしら。

わたしは近年外国へは二、三回行ったが、国内旅行は全然しないといってよかった。原因は興味がないのと、旅行の不便さから来ている。わたしの一年中の生活は鎌倉の自宅と、月に二度位東京の大きなホテルへ泊るのと、それだけに限られている。京都へは戦後間もない頃ある用事で一度だけ行ったことがあったが、大阪へはいまだに行ったことがない。ある時期にはかなり魅力を感じた上方趣味も、関西の食べ物も現在のわたしには肌に合わない。いちがいに古くさくて田舎じみたものとしか思われない。今度の京都行きも映画会社に対するお義理であって、わたし自身には京都に対する興味は少しもないのだ。

わたしはP子を連れて京都へ行くことを想像して見ると、ちがった意義を感じて来た。あの見古した京都の風物(ふうぶつ)でも、この若い女を連れて歩いたなら、ちがった気分で接することができるかも知れない。そしてP子とわたしの間に特殊な関係が生じたとしても、別段後悔することではないと思った。大体女の方からこんなにせがまれて連れて行くのだから、そう強く義務を感じなくてもいいのだ。

「じゃ、ともかくも、これで汽車の切符と急行券を買いたまえ。僕は二時より十五分位早く東京駅へ行ってるから」

わたしはこういって、丁度切符と急行券を買うだけの金を出して、P子の前のテーブルの上においた。こんなことをいっても間際(まぎわ)になってすっぽかすかも知れたものじゃない。その場合余計な金を渡してあれば後悔するが、汽車賃だけぐらいなら、もし彼女が来ないったって別に惜しむには当らないからだ。P子は黙ってその金をハンドバッグにしまうと、もう話は済んだという風に、向うを向いて大きな声でいった。

「T子、こっちへ来てもいいのよ」

神山氏の娘とその友達がおずおず入って来た。神山氏の娘もきれいなお嬢さんだが、もう一人のほうも、せいはちょっと低いが、色が白くて美しい顔だ。二人ともすっかり遠慮して固く

なっている。三人とも年は同じだということだが、一寸見てはP子が一番若く見えるくらいだ。それにもかかわらずP子は何彼と指図をするような調子で振舞(ふるま)っていた。一体P子がわたしと何を相談していたのだか、他の二人は知っているのだか知らないのだか、わたしには分らなかった。

「先生、今日わたしたちを、どこかへ遊びに連れてってよ」

「そうだね。しかし遊びに行くといったって、ここからじゃ江ノ島くらいのものだが」

「江ノ島、行きたいわ」

三人ははしゃぎ出した。わたしは呼びつけのハイヤーを呼んで、三人の女を連れて江ノ島へ遊びに行った。この季節には江ノ島は閑散(かんさん)であった。海浜ホテルで二、三時間遊んで食事をして、又鎌倉の車を呼んで夕方に帰って来た。P子は今夜も銀座の店を休んで、もう一晩友達の家へ泊るといった。別れ際に、

「じゃ、あさってね」

とわたしにだけ聞える声でいった。

その日わたしは東京駅から午後二時発の特急へ乗った。発車二十分前に行くと列車は入っていた。わたしは指定された席について、P子は来るか知らんと絶えずホームの方を注意してい

たが彼女の姿は見えなかった。切符は買えたにしても席は離ればなれになるに違いない。乗り込んで来れば二等はそう幾箱もはないから分る筈である。五分前になっても来なかった。

――やっぱり来ないのだ。

わたしはホロにがい気もちになった。自分の方から誘ったのではなく、P子の方から切に行きたいというので承知したのにすぎないけれども、一旦約束して、一緒に行けば、どういうことになるだろうと空想し、期待を持っていただけに、彼女が姿を見せぬのではかないような失望を感じていた。わたしはとうとうホームの方を眺めることを断念し、窓を閉めて、薄っぺらな雑誌を繰りひろげていた。窓ガラスをコツコツ叩く音がするから見ると、P子が立っていた。黒と白のたて縞のワンピースを着て、大きな黒眼鏡をかけ、頭をスカーフで包んでいるP子は、いつもより丈が高く感じられ、大人びて、体も顔もずば抜けて美しく見えた。窓を開けると顔をそばへよせ

「この汽車の切符、満員でどうしても買えなかったのよ。仕方がないからあすの朝七時の急行の切符買ったけど、あすの朝行ってもいいでしょうか」

と、せかせかしていった。旅行シーズンではあるし、特急の切符を間際に買おうとしても無理だかも知れないと思った。

「いつ来たって構わない。あしたは日曜で僕は別に用もないから、ホテルへ来て僕の名をいえばいい」

「そう。じゃ、あしたの朝間違いなく乗るわ。ごめんなさいね」

もう発車の信号が鳴っていた。P子は離れた。汽車が動き出すとわたしは窓を閉めた。近年長距離の汽車の旅などしたことがないので、ぎっちり乗っている列車の中の感じをわたしは好もしくなく思った。外国で汽車に乗った時よりも、もっと他人ばかりの中にいるような気持であった。わたしは碁の雑誌をくりひろげて時間を送っていた。それは少しも退屈ではなかった。P子のことはもう全く念頭になかった。

九時に京都へ着いた。プロデューサーのH氏が迎いに出ていてくれ、直ぐ一緒に京都ホテルへ送られた。H氏はタイへ、わたしが帰った後すぐ行き、一度帰ると又今度は五十人近いスタッフと共にタイへ行って、現地ロケの一切の仕事の指揮をして来た人であった。わたしの単独で気楽な漫遊とちがい、H氏をはじめ一行は骨の折れる忙しい仕事であった。H氏はタイにおける出来事を面白可笑しく話した。

「あすは日曜で私も会社へ出ませんが、一日ご休養をねがって、明後日は撮影所へお出でをねがいます。丁度王宮の場のセットが出来てそこをとりますから、見て頂くには都合がよいので

す。それから明後日は社長も東京から参ります」

H氏は明後日の朝迎いに来る時間を約束して、十二時近くに帰って行った。

翌日は小雨が降っていた。内側に面しているこの部屋からは何も見えなかった。ベッドは一つで、部屋も狭くるしかったが、映画会社の負担でやっていることだから仕方がなかった。どこへも行くところはないからぼかんとしていると、二時頃一階のフロントから

「東京から小泉さんと仰っしゃるお方がお見えでございます」

と電話で知らせて来た。P子だ。間もなくP子は年とったボーイに案内されて入って来た。ボーイはおそろしく大型のトランクを提げていた。

「ゆうべは一時間くらいしか寝るひまがなかったわ。横浜を七時半でしょう。五時から起きて支度をして……」

それでもちっとも寝不足のような顔はしていなかった。眼も顔もはればれと輝いていた。彼女が来たことによってわたしの環境は一変してしまった。それにしてもこの部屋では困るので、先刻の老ボーイを呼んでベッドの二つあるも少し広い部屋はあるまいかときくと、丁度今朝お客が立ったばかりの部屋が一つ空いているといって、同じ四階の外側に面している広い部屋へ移された。広いばかりでなく万端設備がよかった。外は京都市役所と向き合っていた。P子は

汽車の中で食事をしたのでおなかは空いていないといった。カーテンをあけた窓際のテーブルで紅茶を飲んだ。そしてはじめて彼女とキスをした。横須賀線の電車で会ったり、バアの店で会ったりしていても、なんの発展性も予想されなかった相手と急にこんなことになるとは、不思議なようなものだが、考えてみるとここに立ち至るにはみんなP子の方から積極的に働きかけていることだった。わたしには彼女に対する恋愛などは少しもない。彼女もそういった気持についてはこれまで一言も語らないから、彼女の気持もわからないといえばわからないのだ。しかし女が気持を語らなくても、卒直に行動で示せば、やはり気持を語っていると同じことだろう。女が男に許すとか、肉体を与えるということは、なんでもないことだ。それは衝動が一つあれば足りることである。しかしP子のわたしに対する行動は衝動的ともちがう。自分の意志を十分に働かせたうえでの行為である。

わたしは現在この女を愛しても恋してもいないけれども、やがて愛するようになることは出来るであろう。愛があとから生れたからといって、間違っているとはいえない。そして事実わたしは、この女を非常に愛するようになるだろうとその時思った。

「君は嵐山へ行ったことがある」

「ありません」

「それじゃ少し雨は降ってるが、自動車で行けばなんでもないから見物に行こう」
それからわたしはフロントへ頼んで、今夜の都踊りの切符を二枚取ってもらうことにした。嵐山へ行くのも久し振りだし、都踊りに至ってはいつ見たのだったか記憶もないくらいで、自分ひりだったら絶対にそんなことは思いつきもしないことだが、こうしてP子が来た以上は、彼女を標準にして、ある程度は見物をさせてやろうと考えたのだ。
ドライブをするには軽装の方がいいとわたしがいったので、P子は大きなトランクを開けて着替えをした。黒のマンボズボンに、白のサックコートを着た。トランクの中には何が入っているかわたしは知らなかった。
「ばかに大きなトランクを持って来たものだね」
「丁度いいのがなかったもんだから。急で買いに行く暇がなかったでしょ」
といってP子は少しきまりの悪そうな顔をした。
京都の町は静かで、嵐山まで三十分とはかからなかった。小雨の降っている川岸にある程度人が群がっていたが、車を降りても仕方がないのでそのまま橋を渡った。昔とあまり変らない町がある。わたしは運転手にいった。
「これをずっと先へ行けば苔寺だったね」

「そうです。苔寺まで参りますか」
「すぐ帰っても仕方がないからとにかく行ってくれたまえ」
「コケ寺ってなに」
「寺の境内から庭一面に、コケが生えてるんだ。京都の名所の一つでね」
田舎道を通って、やがて苔寺の門前に達した。そこには自動車が数台とまっていた。わたしはその頃足を痛めていたし、それに現在では、自分の趣味からいっても、苔寺なんかに興味はなかった。それよりも、P子のほうが、こんな所には興味がないだろうと考えたから、このまま引っ返そうかというと、中年の運転手が、
「せっかくここまで来られたことですから、見物なさったらいかがですか」
といった。それもそうだと思い、車から降りて、小雨のふる中を、門前の小橋を渡って境内へ入って行った。すぐから、道の両がわ一面の苔だ。
「まあ、すごいコケだわ」
「先の方へ行けばもっといろんなコケがあるんだよ」
その道をかなり歩いて行くと寺がある。そこで拝観料を払い、小門から庭園の方へ入った。広い庭園にひろがっている池のふちの小径をまばらに人が歩いている。老樹と、地上一面の苔